

県営ほ場整備事業（北大海地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

宝達志水町

# 正友じんとくじま遺跡

2007

石川県教育委員会

(財)石川県埋蔵文化財センター

まさとも  
正友じんとくじま遺跡

2007

石川県教育委員会  
(財)石川県埋蔵文化財センター

## 例 言

- 1 本書は正友じんとくじま遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は宝達志水町正友、紺屋町地内である。
- 3 調査原因は県営ほ場整備事業（北大海地区）であり、同事業を所管する石川県農林水産部農業基盤整備課が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は（財）石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて平成16(2004)年度から平成18(2006)年度にかけて実施した。業務内容は現地調査・出土品整理・報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は石川県農林水産部農業基盤整備課と、文化庁の補助を受けた石川県教育委員会が負担した。
- 6 現地調査は平成16年度と平成18年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者（当時）は下記のとおりである。
  - (1) 平成16年度
    - 期 間 平成16年 6 月21日～同年 9 月 5 日、同年11月16日～同年12月28日
    - 面 積 1,900㎡
    - 担当課 調査部調査第 2 課
    - 担当者 本田秀生（調査専門員）、金山哲哉（主任主事）、荒木麻理子（主事）、谷内明央（主事）
  - (2) 平成18年度
    - 期 間 平成18年 5 月10日～同年 7 月20日
    - 面 積 1,000㎡
    - 担当課 調査部調査第 2 課
    - 担当者 松山和彦（調査主幹）、森 由佳（嘱託調査員）
- 7 出土品整理は平成17(2005)年及び平成18年度に実施し、企画部整理課が担当した。
- 8 報告書刊行は平成18年度に実施し、調査部調査第 2 課が担当した。執筆分担は下記のとおりである。編集は谷内が行った。
  - 第 1 章第 2 節（平成18年度分） 松山
  - 第 2 ・ 5 章と第 3 章第 2 節 森
  - 上記以外 谷内
- 9 調査には下記の機関、個人の協力を得た。
  - 石川県農林水産部農業基盤整備課、大藤雅男、中能登農林総合事務所、宝達志水町教育委員会
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
  - (1) 方位は磁北である。
  - (2) 水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海拔高）による。
  - (3) 出土遺物番号は挿図と写真で対応する。

## 目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 遺跡の位置と地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の概要	8
第1節 平成16年度調査	8
第2節 平成18年度調査	9
第4章 平成16年度調査の遺構と遺物	12
第1節 遺 構	12
第2節 遺 物	38
第5章 平成18年度調査の遺構と遺物	46
第1節 遺 構	46
第2節 遺 物	61
第6章 ま と め	66



挿図目次

第1図	調査区位置図 (S=1/2,500) ……………	3	第23図	平成16年度調査 6区遺構実測図② (S=1/60) ……………	34
第2図	遺跡の位置 (S=1/2,000,000) ……………	4	第24図	平成16年度調査 6区遺構実測図③ (S=1/60) ……………	35
第3図	周辺の遺跡 (S=1/25,000) ……………	5	第25図	平成16年度調査 7区遺構実測図① (S=1/60) ……………	36
第4図	遺構配置図① (S=1/800) ……………	10	第26図	平成16年度調査 7区遺構実測図② (S=1/60) ……………	37
第5図	遺構配置図② (S=1/800) ……………	11	第27図	平成16年度調査 1～3区出土遺物実測図 (S=1/3) ……………	42
第6図	平成16年度調査 1区遺構実測図 (S=1/60・1/300) ……………	17	第28図	平成16年度調査 3・4区出土遺物実測図 (S=1/3) ……………	43
第7図	平成16年度調査 2区西遺構実測図① (S=1/60・1/300) ……………	18	第29図	平成16年度調査 4区出土遺物実測図 (S=1/3・1/6) ……………	44
第8図	平成16年度調査 2区西遺構実測図② (S=1/60) ……………	19	第30図	平成16年度調査 6区出土遺物実測図 (S=1/3) ……………	45
第9図	平成16年度調査 2区西遺構実測図③ (S=1/60) ……………	20	第31図	平成18年度調査 平面図① (S=1/150) ……………	47
第10図	平成16年度調査 2区東遺構実測図① (S=1/60) ……………	21	第32図	平成18年度調査 平面図② (S=1/150) ……………	48
第11図	平成16年度調査 2区東遺構実測図② (S=1/60) ……………	22	第33図	平成18年度調査 SB1平面図・断面図 (S=1/50) ……………	49
第12図	平成16年度調査 3区南遺構実測図① (S=1/60) ……………	23	第34図	平成18年度調査 SB2平面図・断面図 (S=1/50) ……………	50
第13図	平成16年度調査 3区南遺構実測図② (S=1/60) ……………	24	第35図	平成18年度調査 SB3～5平面図・断面図 (S=1/50) ……………	51
第14図	平成16年度調査 3区遺構実測図 (S=1/60) ……………	25	第36図	平成18年度調査 SB6・7平面図・断面図 (S=1/50) ……………	52
第15図	平成16年度調査 3区北遺構実測図① (S=1/60) ……………	26	第37図	平成18年度調査 遺構平面図・断面図 (土坑) (S=1/40) ……………	54
第16図	平成16年度調査 3区北遺構実測図② (S=1/60・1/300) ……………	27	第38図	平成18年度調査 遺構平面図・断面図 (溝) (S=1/40) ……………	55
第17図	平成16年度調査 4区遺構実測図① (S=1/60・1/300) ……………	28	第39図	平成18年度調査 遺構平面図・断面図 (井戸・小穴①) (S=1/20・1/40) ……………	57
第18図	平成16年度調査 4区遺構実測図② (S=1/60) ……………	29	第40図	平成18年度調査 遺構平面図・断面図 (小穴②) (S=1/20・1/40) ……………	59
第19図	平成16年度調査 4区遺構実測図③ (S=1/60) ……………	30	第41図	平成18年度調査 出土遺物① (S=1/3) ……	63
第20図	平成16年度調査 4区遺構実測図④ (S=1/60) ……………	31	第42図	平成18年度調査 出土遺物② (S=1/2・1/3・1/5・1/10) ……………	64
第21図	平成16年度調査 4区遺構実測図⑤ (S=1/60・1/300) ……………	32			
第22図	平成16年度調査 6区遺構実測図① (S=1/60・1/300) ……………	33			

表目次

第1表	周辺遺跡地名表 ……………	6	第7表	平成18年度調査 遺構計測表 (土坑) ……	60
第2表	平成16年度調査 3区遺構計測表 ……………	27	第8表	平成18年度調査 遺構計測表 (溝) ……	60
第3表	平成16年度調査 6区遺構計測表 ……………	35	第9表	平成18年度調査 土器観察表 ……………	65
第4表	平成16年度調査 4区遺構計測表 ……………	37	第10表	平成18年度調査 木製品観察表 ……………	65
第5表	平成16年度調査 遺物観察表 ……………	40	第11表	平成18年度調査 銅銭観察表 ……………	65
第6表	平成18年度調査 遺構計測表 (小穴) ……	60			

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

県農林水産部農業基盤整備課（以下、農林）は農地の生産性を向上させるために農地・用排水路・農道などの整備を一体的に行う、ほ場整備事業を実施している。一方、県教育委員会文化財課（以下、文化財課）は開発事業と埋蔵文化財保護との調整を図るため、事前に事業内容の照会を受けている。

農林は宝達志水町正友地内に、ほ場整備事業を計画し、埋蔵文化財分布調査を文化財課に依頼した。試掘の結果、調査区域の一部で正友じんとくじま遺跡（約105,000㎡）が確認され、古墳時代の集落跡の存在が予想された。文化財課は分布調査の結果を農林に回答し、埋蔵文化財の保護が図られるよう設計の見直しを要請した。双方協議の結果、田面部分については盛土で埋蔵文化財を保護し、排水路等、工事の影響が遺跡に及ぶ箇所については発掘調査対象とすることで合意がなされた。農林は文化財課に発掘調査を依頼し、文化財課は（財）石川県埋蔵文化財センター（以下、埋文）に発掘調査を委託した。調査は調査部調査第2課が担当した。

## 第2節 調査の経過

### 平成16・17年度

平成16年6月8日に農林・文化財課・埋文との間で現地協議が行われた。その結果、調査は3・4・6区の水路部分を優先的に実施し、その他のパイプライン部分については稲刈り後に調査可能となるため、その時期に合わせて調査することとなった。なお、その後の協議で2区の一部と5区は設計の変更により工事の影響範囲が減少し、調査面積が2,370㎡から1,900㎡となっている。

6月21日から3・4区の表土除去、22日に作業員が調査に参加して器材搬入後に包含層掘削を行った。23日から遺構検出・掘削を行い、順次写真撮影・実測を行った。調査中、農林で設定した4区のセンター杭が若干南へずれていることが判明し、4区は北側を完掘後、南側を表土除去することとなった。調査担当は当初、本田・谷内であったが、7月20日からは荒木が加わっている。3区は古墳時代と中世、4区では古墳時代と古代の遺構が主体であった。特に3区の南半部と4区の中央部で多くの遺構を検出した。4区では古墳時代の包含層を切り込む焼土坑（SK2）を検出しており、その周辺の包含層からは土師器が多量に出土している。8月3日には実測まで完了した。

8月4日から6区の表土除去を行った。6日から遺構検出・掘削を行い、順次写真撮影・実測を行っていった。6区西半部は遺構・遺物が希薄で、湧水が激しかった。東端付近になると地形が高くなって遺構も多くなり、古代の遺構・遺物を多く検出できた。特にSK1・2からは須恵器が多量に出土している。31日に実測を完了し、9月13日に次の現場である森ガッコウ遺跡へと器材を搬出し、11月まで調査は中断となった。なお、この頃に課内では班の再編成が行われており、調査担当は本田・荒木・谷内から本田・金山となっている。

11月4日に農林・文化財課・埋文との間で現地協議が行われ、2区→7区→1区の順に調査することとなった。10日から2区西半部の表土除去を行った。東半部は重機による排土を工区内の別の箇所へ搬出させたいとの要望が農林からあり、7区と合わせて表土除去を実施することとなった。15日に作業員が参加して器材を搬入し、16日に測量用の杭を設定、17日から遺構検出を行い、順次遺構掘削・

写真撮影・実測を行っていった。26日からは2区東半部と7区の表土除去を行った。2区は古墳時代と古代、7区では古代の遺構が主体であったが、遺構・遺物は数・量とも少なかった。12月9日には遺構を完掘して写真撮影を行い、10日には実測まで完了した。

12月7日から1区の調査に着手した。調査区の大半では遺構・遺物が希薄であり、南半部で中世の遺構を検出した。21日に実測まで完了し、22日には器材を搬出、27・28日で埋め戻しを行い、平成16年度の調査は完了した。

平成17年度、文化財課は平成16年度調査分の出土品整理を埋文に委託した。出土品整理は企画部整理課が担当し、平成17年5月23日～6月16日に実施した。

## 平成18年度

当該年度は正友集落南東における集落農道部分を対象とし、調査面積は1,000㎡を測る。第1図にみるように平成16年度調査区の「6・7区」に隣接する地点である。

調査時点ですでに田面工事が終了し周囲は営農中の状態となっており、さらに既往の埋設管の存在も懸念された。それらの点も踏まえ4月21日に文化財課・中能登農林事務所・埋文の各担当者が現地に会し打ち合わせを実施した。排土場所の都合でかなり土量の移動が必要となるので、工業者が決定し次第その助力を得る旨が了解された。また翌日には地元工区長とも調整を行っている。

調査はまず西部から着手され、5月10日に表土除去、17日には人力による作業を開始し、22日に遺構検出を終え、その後土層図を作成しつつ遺構掘削を進めた。やがて31日には完掘に至った。

翌6月1・2日に西部の実測を終えて調査は中央部に移るが、12・13日に工業者が西部を埋戻し、15日には中央部の表土除去の運びとなった。19日から人力による作業を再開し、21日に遺構検出を済ませ、23日から遺構掘削に取り掛かった。26日からは土層図も作成しつつ29日に完掘した。

7月に入ると梅雨空で雨の日も多くなってくるが、7月4～6日に中央部を実測しつつ、5日には北東部を表土除去し7日までに掘り終えることができた。調査も終盤に近付くなか、11日には南東部を表土除去、13日には掘削を終了させ、翌14日には北東・南東両地区の実測を行った。またこの日には文化財課・中能登農林事務所・埋文の各担当者を現地に交え調査の終了・現地の引渡しについての協議がもたれた。その後は撤収の段取りとなり、19日に機材の片付け、21日にトラックで機材を搬出し無事現地調査を終了させることができた。

なお、出土品整理については事業終了年度の関係で現地調査と同年度に実施している。やはり文化財課の委託により埋文（企画部整理課）が8～10月に作業に当たった。





第1図 調査区位置図 (S=1/2,500)

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

正友じんとくじま遺跡は、羽咋郡宝達志水町の旧押水町正友・紺屋町地内に位置する。宝達志水町は、平成17年3月に隣接する押水町と志雄町が合併して誕生した町である。南北に長い石川県のほぼ中央部、かつての能登国の最南端に位置し、西は日本海に臨み、北は羽咋市、南はかほく市（旧高松町）、東は宝達山地を挟んで富山県水見市に接する。東西約10.2km、南北約17.4km、面積111.68km<sup>2</sup>の町である。

町の南東端に位置する能登地方最高峰の宝達山(637m)は、能登地方では比較的高い土壤生産力を有し、宝達葛などの植物資源や、金や蛍石などの鉱物資源に恵まれた山である。かつて中腹以上はブナの原生林に覆われていたが、スギなどの植林や無線中継所の建設により、僅かに山頂部に残るのみとなっている。宝達山を源流とする前田川・大坪川・宝達川は、山麓部で扇状地を、下流部では小規模な潟埋積平野を形成し、海岸部に横たわる内・中・外3列の砂丘を切って



第2図 遺跡の位置 (S=1/2,000,000)

日本海へ注ぐ。扇状地上には、ウルム氷期に形成された河岸段丘の名残が台地となって点在している。

現在、平野部には水田が広がり、国道249号線、国道159号線（押水バイパス）、JR七尾線が南北に併走している。扇状地上にも棚田状の水田が広がり、山麓の丘陵部は牧草地や果樹園などに利用されている。砂丘上は明治時代以降の砂丘固定作業によって黒松林に覆われ、能登有料道路が走る。

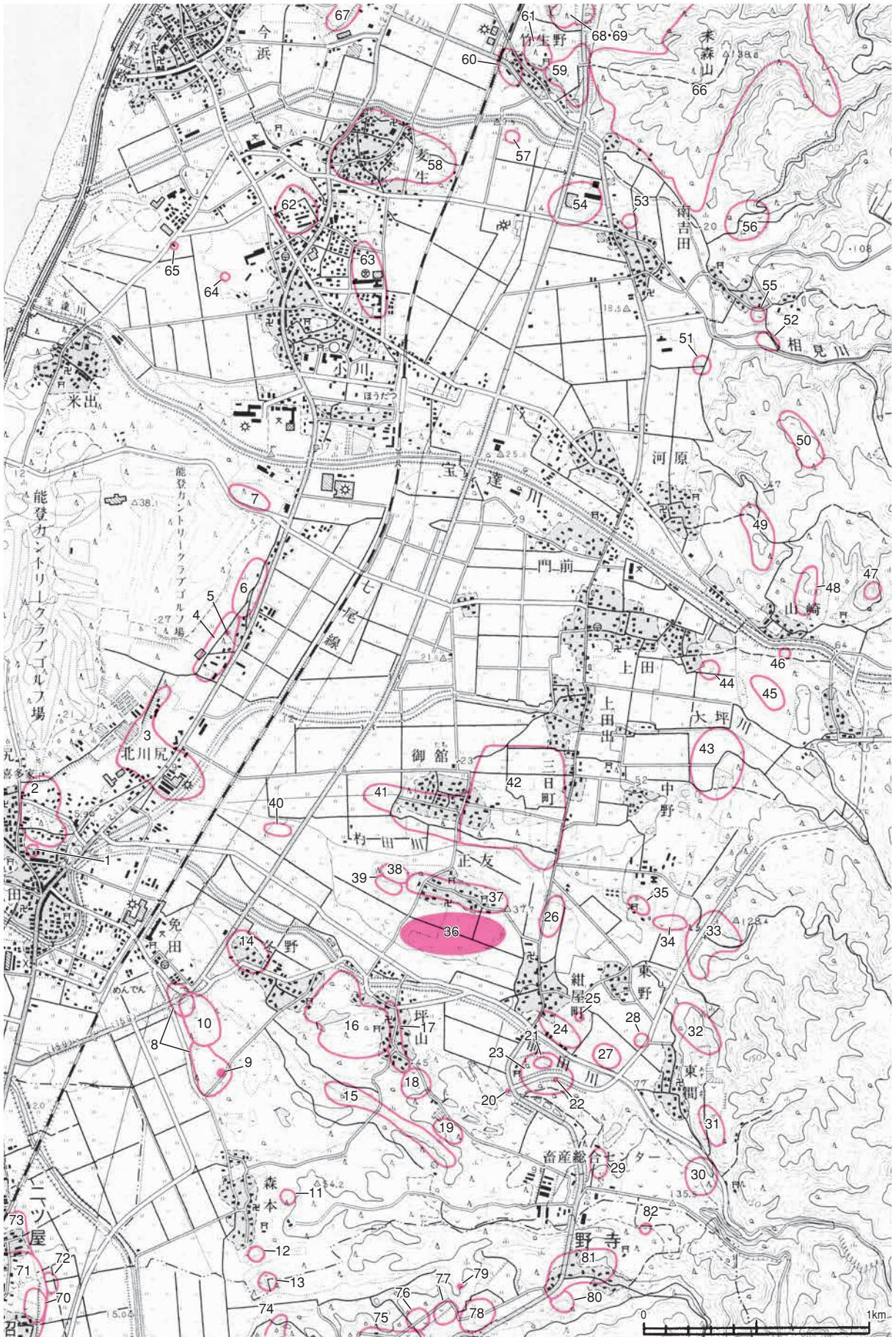
正友じんとくじま遺跡は、前田川によって形成された扇状地の扇端部北端にあり、前田川と大坪川に挟まれた地帯、現在の正友集落が置かれている台地の南側に位置する。かつては前田川の氾濫に悩まされた地域である。

### 第2節 歴史的環境

正友じんとくじま遺跡周辺では、御館遺跡(41)から石川県で初めて、旧石器時代のナイフ形石器が発見されている。他に竹生野遺跡(59)、免田一本松遺跡(10)などからも旧石器時代の石器が出土しているが、いずれも遺物のみの出土であり、実際に人が生活していたかどうかは不明である。

縄文時代になると、いわゆる縄文海進とその終息によって海岸部に形成された砂丘上や、扇状地上に多くの集落遺跡が見られる。紺屋町ほんでん遺跡(24)は中期末～後期初頭の集落遺跡で、土器だけでなく石棒や土偶などの祭祀具も出土している。紺屋町ダイラクボウ遺跡(23)からは、後期～晩期の堅果類の貯蔵穴が多く確認されている。他にも東間さかて山遺跡(30)(前期末～中期前葉)、上田うまばち遺跡(43)、正友はちじがり遺跡(39)、坪山かわだ遺跡(40)などが見られる。





第3図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)



第1表 周辺遺跡地名表

No.	遺跡名 (宝達志水町)	所在地	種別	時代	No.	遺跡名 (宝達志水町)	所在地	種別	時代
1	北川尻すわ山遺跡	北川尻	散布地	縄文	43	上田うまばち遺跡	上田	集落跡	縄文
2	北川尻ほしば山遺跡	北川尻	散布地	古墳～平安	44	上田地頭方遺跡	上田	散布地	縄文
3	北川尻おさの山遺跡	北川尻	散布地	弥生・古墳	45	上田狐塚古墳	上田	古墳	古墳
4	上田出西山遺跡	上田出	散布地	弥生～平安	46	上田永畑遺跡	上田	散布地	不詳
5	米出ドダヤマ中世墓	米出	墳墓	中世	47	山崎中世墓	山崎	墳墓	中世
6	堂田遺跡	堂田	散布地	奈良～平安	48	山崎横穴群	山崎	横穴墓	古墳
7	小川A遺跡	小川	散布地	不詳	49	河原三つ子塚1～10号墳	河原	古墳	古墳
8	冬野小塚1～5号墳	免田・森本・冬野	古墳	古墳	50	南吉田向山中世墓群	南吉田	墳墓	中世
9	冬野大塚古墳	森本	古墳	古墳	51	南吉田堂の後遺跡	南吉田	散布地	古墳
10	免田一本松遺跡	免田	集落跡	旧石器～古墳	52	南吉田堂の庭遺跡	南吉田	散布地	古墳
11	森本ドソウバ遺跡	森本	中世墓	中世	53	南吉田穴田遺跡	南吉田	散布地	不詳
12	森本B遺跡	森本	散布地	奈良～平安	54	南吉田葛山遺跡	南吉田	散布地	古墳～中世
13	森本A遺跡	森本	散布地	奈良～平安	55	南吉田古屋敷遺跡	南吉田	散布地	不詳
14	冬野遺跡	冬野	散布地	縄文～平安	56	南吉田サンマイ遺跡	南吉田	散布地	平安・中世
15	冬野オオクボ1号窯跡	冬野	窯跡	奈良	57	麦生かわだ遺跡	麦生	散布地	不詳
16	坪井山砦跡	坪山	砦跡	中世	58	麦生遺跡	麦生	散布地	不詳
17	坪山横穴群	坪山	横穴墓	古墳	59	竹生野遺跡	竹生野	集落跡	旧石器～中世
18	坪山みやの田遺跡	坪山	散布地	不詳	60	竹生野フルヤシキ遺跡	竹生野	散布地	古墳～中世
19	坪山あかさか窯跡	坪山	窯跡	奈良	61	竹生野天皇山1～3号墳	竹生野	古墳	古墳
20	紺屋町むかいの窯跡	紺屋町	窯跡	古墳	62	今浜新保山遺跡	今浜	散布地	縄文・奈良
21	紺屋町天神山横穴群	紺屋町	横穴墓	古墳	63	今浜墓田山遺跡	今浜	散布地	奈良～平安
22	紺屋町飯塚古墳	紺屋町	古墳	古墳	64	今浜A遺跡	今浜	散布地	不詳
23	紺屋町ダイラクボウ遺跡	紺屋町	寺院跡	縄文・平安・中世	65	今浜B遺跡	今浜	散布地	不詳
24	紺屋町ほんでん遺跡	紺屋町	散布地	縄文・古墳・中世	66	末森城跡	宿・麦生・南吉田	城跡	中世
25	岡部館跡	紺屋町	館跡	不詳	67	麦生A遺跡	麦生	散布地	不詳
26	紺屋町七十苅遺跡	紺屋町	集落跡	縄文・古墳・奈良・中世	68	宿東山1～12号墳	宿	古墳	古墳
27	東間たけのこし遺跡	東間	散布地	縄文	69	宿東山遺跡	宿	集落跡	旧石器～奈良
28	東間ほりかいち遺跡	東間	散布地	縄文	No.	遺跡名 (かほく市)	所在地	種別	時代
29	紺屋町ひらき遺跡	紺屋町	散布地	縄文	70	中沼きりやま古墳群	中沼	古墳	古墳
30	東間さかて山遺跡	東間	集落跡	縄文	71	中沼D遺跡	中沼	散布地	古墳～平安
31	東間ヨウショウ遺跡	東間	散布地	奈良～中世	72	中沼D東遺跡	中沼	散布地	平安・中世
32	東間宝殿山1～4号墳	東間	古墳	古墳	73	二ツ屋D遺跡	二ツ屋	散布地	古墳～平安
33	正友ヤチャヤマ窯跡	東野	窯跡	奈良	74	瀬戸コノウエ遺跡	瀬戸	散布地	古墳～平安
34	東野B遺跡	東野	散布地	不詳	75	八野ウワノ1～5号窯跡	八野	窯跡	古墳
35	御館ヘライバシ窯跡	御館	窯跡	奈良～平安	76	八野ウワノ遺跡	八野	散布地	縄文
36	正友じんとくじま遺跡	正友	集落跡	縄文～中世	77	八野ガメ山1・2号窯跡	八野	窯跡	奈良
37	正友1～6号墳	正友	古墳	古墳	78	八野遺跡	八野	散布地	古墳～奈良
38	正友火葬場台地遺跡	正友	散布地	縄文	79	八野アカサカ窯跡	八野	窯跡	奈良～平安
39	正友はちじかり遺跡	正友	散布地	縄文	80	野寺A遺跡	野寺	散布地	縄文
40	坪山かわだ遺跡	坪山	散布地	縄文	81	野寺1～4号窯跡	野寺	窯跡	古墳
41	御館遺跡	御館	散布地	旧石器～中世	82	野寺尼塚	野寺	経塚	不詳
42	御館館跡	御館	館跡	中世					

弥生時代は、縄文時代に比べて遺跡数が少ない。中期に遡る遺跡は、北川尻おさの山遺跡（3）など砂丘上にごく僅かに見られるのみである。しかし、後期中葉になると冬野遺跡（14）や免田一本松遺跡（10）、竹生野遺跡（59）などで集落が築かれ、古墳時代前期まで営まれる。免田一本松遺跡においては古墳時代後期にも集落が営まれている。その古墳時代には、相見川・宝達川流域、前田川・大海川流域など流域ごとに集団が存在し、多くの古墳が築かれている。代表的な古墳に、中期の円墳である冬野大塚古墳（9）がある。直径約38m、高さ5.5mの規模を持ち、墳頂部には円筒埴輪を施設している。他にも冬野小塚古墳群（8）（前期～中期）、東間宝殿山1号墳（32）（後期）、正友古墳群（37）などが見られる。

飛鳥時代（7世紀）になると、旧押水町から旧高松町にかけての丘陵に、「高松・押水窯跡群」と呼ばれる能登の中核的窯跡群が形成され、平安時代（10世紀前葉）まで須恵器生産が続く。これまで60基以上の窯跡が確認され、旧押水町正友・紺屋町周辺と旧高松町八野・野寺周辺では、操業時の窯跡が見られる。この時期の集落遺跡である北川尻ほしほ山遺跡（2）（8世紀前～中葉）からは、竪穴住居とともに墨書土器や和同開珎などが出土している。他にも宿東山遺跡（69）（8世紀前葉）では竪穴住居が2棟、竹生野遺跡（59）では平安時代の掘立柱建物が確認されている。またこの地域は、8世紀中頃の律令体制下では「能登国羽咋郡大海郷」に含まれていたが、平安時代末期（12世紀前半）には荘園化し、「大泉庄」となっている。

「大泉庄」は鎌倉時代初期（12世紀末）には村上源氏中院家の家領であったが、室町時代（14世紀前半）になると「大泉北・中・南庄」の三庄に分割され、「大泉南庄」は西園寺家に引き継がれている。正友じんとくじま遺跡周辺は「大泉中庄」に含まれる。御館館跡（42）はその「大泉中庄」のほぼ中央に位置し、14世紀後葉～16世紀第3四半期の中国青磁、瀬戸・美濃焼、珠洲焼、灯明皿などが出土し、主要街道と舟運が交差する交通の要地という立地条件と、周囲を囲む堀や土塁の存在から、荘園管理施設の可能性が指摘されている。しかし文献等に記載は見られず、領家などは不明である。また紺屋町七十苧遺跡（26）では12～13世紀の掘立柱建物が確認されている。

戦国時代（16世紀）になると、この地域は能登と加賀を結ぶ要地としてたびたび戦場となり、坪井山砦（16）や末森城（66）が築かれた。末森城が本格的に構築されたのは、天正5年（1577）に上杉謙信が七尾城攻略のために逗留して以降のことである。後に前田家家臣・奥村家福（永福）の預かるところとなり、天正12年（1584）越中の佐々成政との「末森合戦」の舞台となった。その際、佐々成政が陣を置いたのが、永禄10年（1567）に能登畠山氏家臣温井・三宅氏によって築かれた坪井山砦である。どちらも、前田家による加賀・能登・越中の三国支配が確立していくなかで戦略的価値を失うこととなった。

現在、正友じんとくじま遺跡周辺には、紺屋町・三日町・上田・河原・竹生野・宿といった集落が存在し、少なくとも16世紀末の文献にその名前を認めることができる。また明治中頃まで、これらの集落を辿る「なか里道」といわれる街道が存在し、中世には主要街道であったと考えられている。現在は国道471号線が走っており、往時の面影を彷彿とさせている。

#### 引用・参考文献

- 岡野秀紀 1998 『御館館跡』 押水町教育委員会  
 川畑 誠 1987 「高松・押水窯跡群について」『宿東山遺跡』 石川県埋蔵文化財センター  
 国土庁土地局国土調査課 1974 『土地分類図（石川県）』 財団法人日本地図センター  
 斎藤晃吉ほか 1974 『押水町史』 押水町史編纂委員会  
 西野秀和 1992 『押水町冬野遺跡群』（財）石川県埋蔵文化財センター  
 本田秀生 2005 『冬野遺跡・免田一本松遺跡』（財）石川県埋蔵文化財センター  
 平凡社 1991 『石川県の地名』 日本歴史地名大系17  
 松山和彦ほか 2000 『押水町紺屋町七十苧遺跡』（財）石川県埋蔵文化財センター  
 村上吉郎ほか 2002 『図説 押水のあゆみ』 押水町史編纂委員会



## 第3章 調査の概要

### 第1節 平成16年度調査

調査区は水路やパイプラインの敷設箇所に設定され、1～7区と呼称した。5区は農林の設計変更に伴い依頼面積からは除外されており、欠番となる。6・7区に水路とパイプラインの併設箇所があり、平成18年度調査区が北に隣接する。調査面積は1区178㎡、2区420㎡、3区310㎡、4区540㎡、6区383㎡、7区69㎡の計1,900㎡となる。遺構の分布は3・4区と6・7区の一部に集中していたことからグリッドによる区画割りは行っていない。遺構番号は調査区ごとに付している。

現況の地形は東から西へと傾斜しており、耕地整理によるカット面も随所に確認できた。遺構検出面の標高は最東端（2区東端）で39.3m、最西端（1区西端）が25.6m、最南端で（4区東端）で30.3m、最北端（6区西端）が30.3mを測る。地山も調査区により異なっており、現正友集落に近い調査区では粘土質、前田川に近い調査区が砂質となっている。層序は第4章で後述する。

1区では土坑3基、溝2条、ピット2基を検出した。時期は中世が主体である。町道を挟んで反対側に位置する3区とは、遺構の分布や遺物の時期にまとまりがみられる。

2区では土坑5基、溝3条、ピット5基を検出した。時期は古墳時代、古代が主体である。2区東端で複数のピットを検出しており、遺跡は東へ広がる可能性がある。ピットは柱穴の可能性が高く、建物跡を構成するものと考えるが、調査区狭小なために規模の確認には至らなかった。

3区では土坑1基、溝10条、ピット24基を検出した。時期は古墳時代、中世が主体である。3区中央部から南端にかけては遺構が多く、北側では古墳時代、南側では中世の遺物が主に出土している。一部で弥生時代の遺構・遺物も確認しており、4区との連結部付近では古代の遺物も出土している。

4区では土坑2基、溝1条、ピット32基を検出した。時期は古墳時代、古代が主体である。4区中央部から西端にかけては遺構が多い。SK2周辺では土器が多量に出土し、古墳時代の包含層を古代の遺構が切り込んでいた状況を確認している。4区東端は盛土が厚く湧水も激しい。

6区では土坑2基、ピット15基を検出した。時期は古代が主体である。6区東端では遺構が密に分布しており、SK1・2からは土器が多量に出土した。西半部は遺構が希薄で、湧水も激しい。北側に隣接する平成18年度調査区とは、遺構の分布や遺物の時期にまとまりがみられる。

7区では土坑3基、溝1条、ピット1基を検出した。時期は古代が主体である。

各区の遺構・遺物の確認状況をまとめると、3区南半部から4区西半部にかけてのL字状の箇所と、6区東端から7区にかけての範囲で遺構が目立ち、3・4・6区から遺物が多く出土している。

調査着手前、本遺跡は古墳時代の集落跡と予想されていたが、調査の結果、複数時期にわたる集落跡であることが明らかとなった。

## 第2節 平成18年度調査

平成18年度調査区は、平成16年度調査区6区・7区の北側に隣接して位置する。

排土置き場確保のため、総面積1,000㎡のうち西部330㎡の調査を先に行い、東西方向で10mごとにグリッドを設定し、W1～W6区とした。調査終了後に埋め戻し、東側の道なりにカーブを描いた調査区中央部500㎡の調査を行った。W6区の延長線上でW9区まで設定し、北側に突出した地区をN区とした。また、水田への通路確保のため幅約2mを残し、電柱で分断されるまでの調査区90㎡を中央部東側（E区）とした。その後、さらに南東に伸びる調査区45㎡の調査を行い、南東区（SE区）とした。また道路を挟んだ北東側35㎡も調査区に含まれ、北東区（NE区）とした。

耕土と黒褐色粘質土の包含層を除去した面で遺構を検出した。遺構検出面の土層は場所により異なっており、W6区まではにぶい黄褐色粘質土であるが、N区では暗オリーブ褐色粘質土、W7区より東では黒褐色または暗褐色を呈する粘質土である。遺構検出面の下層は灰オリーブ色シルト層、礫層と続く。礫層は場所により高低差がみられ、遺構検出面にまで現れている所もある。遺跡全体が扇状地上に位置するため、検出した遺構面も緩やかに西に傾斜し、W3区の鞍部との境からSE区東端までの標高差は、約2.2mであった。

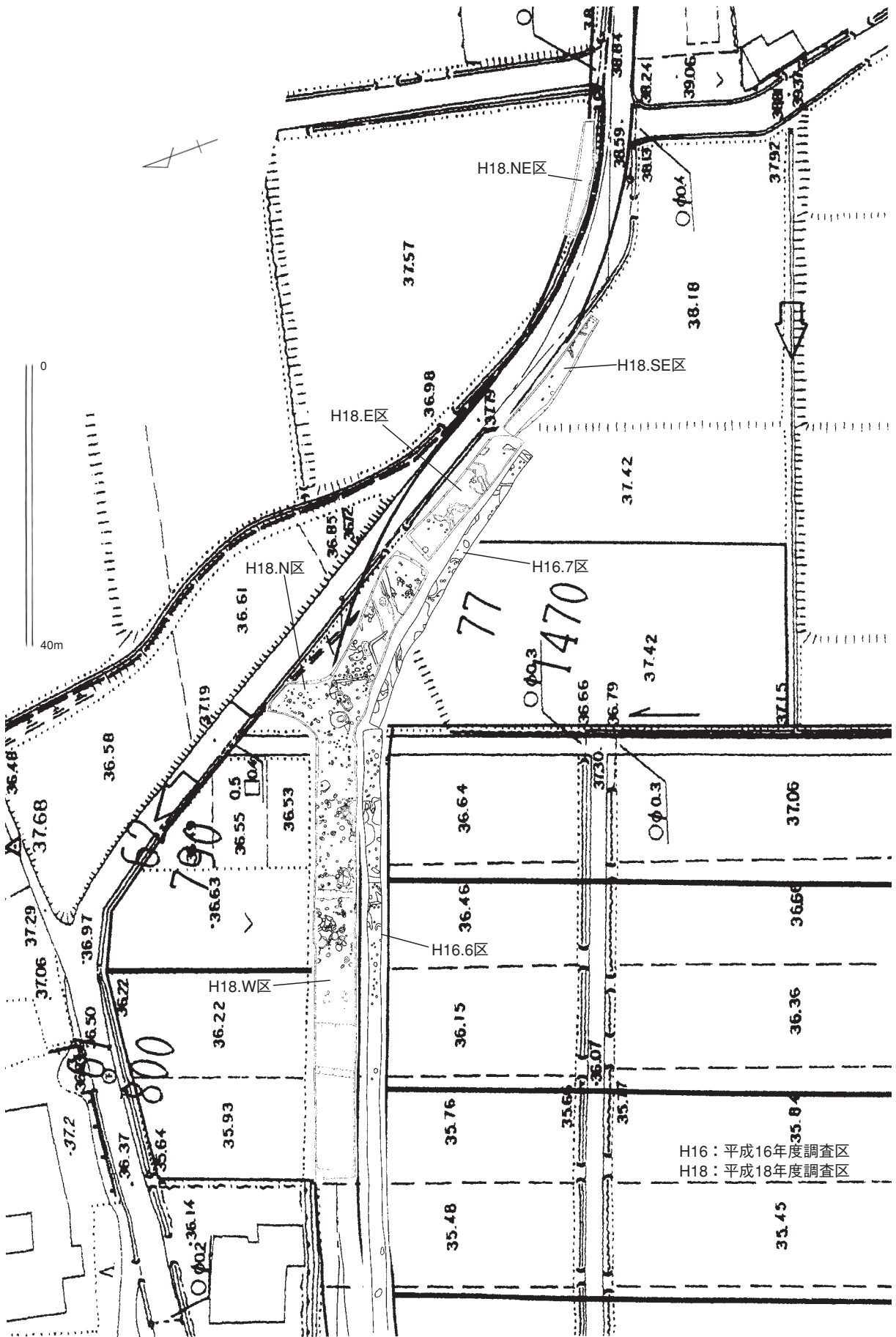
調査の結果、W4～W9区を中心に掘立柱建物（SB）7棟、井戸（SE）1基、溝（SD）6条、土坑（SK）5基、小穴（P）多数を検出した。調査区西側のW1～3区は鞍部になっており、遺構は確認できなかった。E区以東も遺構密度が低く、SE区東側で溝2条と小穴数基を検出した。NE区は耕作中の水田の一部を調査区としており、水の流入・湧水で調査が困難なため、東西2箇所1m四方のトレンチを掘削してみたが、SE区の遺構検出面標高下約40cmまで耕土・客土に覆われており、その下層の黒褐色粘質土層や暗黄褐色砂質土の地山面でも、遺構面は確認できなかった。耕土からは珠洲焼片が出土しており、耕地整理により遺構面が削平された可能性が考えられる。

検出した掘立柱建物のうち、W6区に位置するSB2は古代に属し、N区に位置するSB3・4、W8区に位置するSB6は中世に属する。小穴のなかには、掘立柱建物として復元した柱穴以外に柱根が残るものもあり、他にも掘立柱建物や柵等の存在が考えられる。SD2・4など、溝のなかには周辺の掘立柱建物と軸を揃えているものもあり、区画溝と考えられる。

調査区全体をみると、W4区以西で古墳時代の遺構・遺物がみられ、W4～W9区にかけて古代の遺構・遺物が多く分布し、W7区以東では中世の遺構・遺物が出土する状況が確認できた。古墳時代から古代にかけて集落域が東に広がり、中世には集落自体がやや東へ移動していったと考えられる。



第4図 遺構配置図① (S=1/800)



第5図 遺構配置図② (S=1/800)

## 第4章 平成16年度調査の遺構と遺物

### 第1節 遺 構

#### 1 区

1区は町道田中・出村・坪山線の西側（第4図参照）のパイプライン設置箇所に位置し、調査面積は178㎡である。1区の大半は耕土ないし農道盛土直下で地山に達する。過去の耕地整理による削平を受けているため、遺構面の残りが悪く、検出できた遺構も少ない。遺構検出面の標高は北端で25.6m、西端が25.4m、南端で24.4mである。土坑（SK）3基、溝（SD）2条、ピット（P）2基を検出した。遺構の主時期は中世と判断したが、古墳時代の遺物も目立つ。なお以下の説明で、検出高は遺構検出面の標高値を、深さは検出面からの深さを示している。

##### SK1（第6図）

1区南端で検出した。東側に隣接する溝を切っている。上端が隅丸方形、坑底で円形を呈し、検出高24.4m・1辺1m・深さ1mを測る。坑底で湧水を確認した。土師器が出土している。

##### SK2（第6図）

1区南部で検出した。検出状況から平面形態は円形と想定できる。坑底は隅丸方形を呈する。検出高24.3m・長軸径1.45m・短軸径70cm以上・深さ46cmを測る。埋土は暗褐色粘質土を基調とし、土師器が出土した。

##### SK3（第6図）

1区中央部で検出した。調査区幅が狭小なために全形を窺えず、溝の可能性もある。検出高25.3m・長軸径1.9m・短軸径70cm以上・深さ19cmを測る。埋土は暗褐色粘質土を基調とし、土師器が出土した。

##### SD1（第6・27図）

1区南部、SK2の北付近で検出した。検出高24.3m・幅3.7m・深さ20cmを測る。埋土は暗褐色粘質土を基調とし、木製の鉢（1）、土師皿（2）、珠洲焼の播鉢（3）、土錘（4～6）が出土した。

##### SD2（第6・27図）

1区中央部で検出した。検出高24.2m・幅30cm・深さ16cmを測る。白磁の四耳壺（7）、土師皿（8・9）、土錘（10）が出土した。

##### P1・2（第6図）

P1は1区南端、SK1の南付近で検出した。隅丸方形を呈し、検出高24.4m・1辺65cm・深さ3cmを測る。さらに底面で小穴を検出し、径25cm・深さ5cmを測る。P2は1区中央部で検出した。円形を呈し、検出高24.3m・径30cm・深さ14cmを測る。共に土師器が出土した。

#### 2 区

2区は工区中央を横断するパイプライン設置箇所に位置する。調査面積が420㎡で東・西区に分かれており、東区120㎡、西区300㎡である。調査区全域に道路や旧農道による盛土が、さらにその下には旧耕土が堆積していた。検出面は東から西へと低くなる。そのせいか西区端は耕地整理の影響を大きく受けており、東区と西区東端に比べ、遺物の包含層（暗褐～黒灰色系）の残りが良くなかった。



遺構検出面の標高は東端で39.3m、西端が32.0mであった。

土坑5基、溝3条、ピット5基を検出した。東区端は遺構の分布が比較的密で、建物跡を構成できた可能性も残る。遺構の主時期は古墳時代、古代と判断した。

#### SK1（第9図）

西区東端で検出した。検出状況から平面形態は円形と想定できる。検出高36.7m・長軸1.8m・短軸70cm以上・深さ14cmを測る。坑底は平坦に近く、南東隅部で小穴を検出した。径20cm・深さ13cmを測り、土師器が出土している。

#### SK2（第8図）

西区、SD2付近で検出した。西区を横断する溝状を呈し、検出高35.8m・幅65cm・深さ12cmを測る。土師器が出土した。

#### SK3（第10図）

東区で検出した。西半部に遺構の切り合いが確認できる。検出状況から平面形態は隅丸長方形と想定できる。検出高37.9m・長辺90cm以上・短辺70cm以上・深さ5cm、坑底の西半部で深さ40cmを測る。遺物は出土していない。

#### SK4（第11図）

東区東端で検出した。検出状況から平面形態は隅丸方形と想定できる。検出高39.3m・1辺60cm以上・深さ5cmを測る。さらに坑底の西半分は一段掘り込まれており、深さ14cmを測る。掘方の形状から柱穴の可能性も残る。土師器が出土した。

#### SK5（第11図）

東区東端で検出した。東区を横断する溝状を呈し、検出高39.3m・幅50cm・深さ15cmを測る。坑底付近で石を確認した。土師器が出土している。

#### SD1（第8・27図）

西区で検出した。土層断面の切合いから、この付近で溝の掘り返しを行っていたことが窺える。検出高36.3m・幅50cm・深さ20cmを測る。土層断面の5・7・8層に対応するが、5層と7・8層とは土質が異なる。土師器の高杯（12）が出土した。

#### SD2（第8・27図）

西区で検出した。検出高35.9m・幅25cm・深さ15cmを測る。土師器の甕（13）が出土した。

#### SD3（第11図）

東区で検出した。浅い落ち込みを切る。検出高38.8m・幅50cm・深さ20cmを測る。溝底は北から南へと低くなる。土師器や須恵器が出土した。

#### P101（第10図）

東区で検出した。円形を呈し、検出高38.2m・径25cm・深さ31cmを測る。土師器が出土した。遺構の周辺で同規模のピットを検出しており、これらは建物跡を構成する可能性がある。

#### P102・103（第11図）

東区で検出した。円形を呈し、検出高38.9m、径はP102が30cmでP103が20cm、深さはP102が40cmでP103が12cmを測る。土師器や須恵器が出土した。

#### P104・105（第11・27図）

東区東端で検出した。円形を呈し、検出高はP104が39.1mでP105が39.3m、径はP104が30cmでP105が15cm、深さはP104が7cmでP105が20cmを測る。P104から須恵器の杯（14）、P105から土師器が出土した。

### 3 区

3区は町道田中・出村・坪山線の東側、つまり1区から道路を挟んで反対側、水路とパイプラインの併設箇所位置し、調査面積は310㎡である。耕土より下の層には河川・洪水等による堆積土が厚く残っており、包含層も広い範囲で確認できる。包含層の色調は暗灰褐色系で、3区北部が粘質土、南部では砂質土が主体となっている。遺構検出面の標高は北端で25.0m、南端が25.8mであった。土坑1基、溝10条、ピット24基を検出した。3区北端は鞍部である。遺構の主時期は古墳時代、中世と判断した。弥生時代終末期の土器も少量出土している。

土坑や溝を中心に説明を加えていくが、ピットは第2表の遺構計測表に計測値を記した。そのほかにも計測値が必要と判断したピットについては、深さを図中の( )の数値で示しておいた。また、遺構計測表中の出土遺物の項目では、小片が多く、弥生土器か土師器か判別がつかないものもあったため表記を土師器に統一している。だが、その中でも明らかに古代の土師器と判別できたものについては、備考にそう記した。以上のような説明方法は後述の4区や6区の遺構についても適用している。

以下の文章による説明は便宜上、水路を境界にして3区を北・南区と分けている。

#### SK1 (第14図)

北区で検出した。平面形態は楕円形を呈し、坑底の隅部ではややオーバーハング気味に掘り込まれている。検出高25.9m・長径1.1m以上・短径75cm・深さ80cmを測る。断面の4層に若干地山土を含むものの土質的に大きな差異は認められず、ごく短期間に埋没したものと判断できる。坑底で湧水を確認した。遺物は出土していない。

#### SD1 (第15・28図)

北区で検出した。北側に隣接する落ち込みを切る。検出高25.6m・幅80cm・深さ40cmを測る。溝底でピットを4基検出した。溝内に柱・杭状のものを設置していた可能性がある。ピットの深さは15～20cmであった。包含層である暗灰褐色系の土と溝の埋土とでは土質的に大きな差異はなく、地山粒が少量混じる程度である。後述のSD4・6と遺構の形状が似る。溝及び溝底のピットから鉢(30)や、弥生時代終末期～古墳時代前期の土器が出土した。

#### SD4 (第14図)

南区北端で検出した。不整形の落ち込みを切る。検出高26.1m・幅50cm・深さ20cmを測る。溝底でピットを6基検出した。溝内に柱・杭状のものを設置していた可能性がある。SD1と異なり、ピットの配列に規則性を窺える。ピットの深さは5～10cmであった。埋土は暗褐色粘質土を基調とする。溝及び溝底のピットから土師器が出土した。

#### SD5 (第14・28図)

南区北端、SD4付近で検出した。検出高26.1m・幅70cm・深さ13cmを測る。埋土は灰褐色砂質土を基調とする。土師器が出土した。埋土がSD4と異なるものの出土した土器を比較してみると、さほど時期差は確認できなかった。土師器の高杯(31)が出土した。

#### SD6 (第13・28図)

南区で検出した。検出高26.1m・幅45cm・深さ35cmを測る。溝底でピットを5基検出した。溝内に柱・杭状のものを設置していた可能性がある。SD1・4と異なりピット間に一部、切合いが認められる。ピットの深さは1～5cmであった。埋土は暗褐色粘質土を基調とする。溝及び溝底のピットから土師器の高杯(32・33)が出土した。

#### SD7・9 (第12・28図)

南区で検出した。当初は別遺構として扱っていたが、掘削を進める過程で溝の上端が不明瞭となり、SD7の南側上端からSD9の北側上端にかけての幅約10mの範囲を一つのまとまりとして捉え直した。浅い落ち込みに堆積した包含層の可能性はある。検出高は25.9～26mを測り、埋土は暗茶褐色ないし暗褐色砂質土を基調とする。土師皿（34～38）や須恵器の瓶（39）が出土しており、（35）はSD7内のピットから出土している。

#### SD8（第12図）

南区、SD7・9内で検出した。P20を切る。検出高25.9m・幅90cm・深さ30cmを測る。埋土は暗灰褐色砂質土を基調とする。土師器や珠洲焼が出土した。

#### SD10（第13図）

南区で検出した。P15に切られる。北側に浅い落ち込みを伴う。検出高26.1m・幅50cm・深さ5cmを測る。溝底には連なるようにしてピットが掘り込まれている。埋土は暗灰褐色砂質土を基調とする。土師器や中世の土師皿が出土した。

### 4 区

4区は3区の南端から東西方向にのびる水路設置箇所で、調査面積は540㎡である。調査区は耕地整理による影響で、現況の水田区画に合わせて段差となっており、東から西へと階段状に遺構面が残っていた。地山は砂質土で、4区西部で一部、砂礫層となっている。遺構検出面の標高は東端で30.3m、西端が25.8mであった。土坑2基、溝1条、ピット32基を検出した。遺構の主時期は古墳時代、古代と判断したが、縄文土器や弥生時代終末期の土器も少量出土している。SK2やP24～27周辺の包含層から土器が多量に出土した。なお、遺構計測表の留意点については3区の項を参照されたい。

#### SK1（第17図）

4区西部で検出した。屈曲の浅い「く」の字状を呈する。検出高27.2m・長軸1.1m・短軸80cm・深さ30cmを測る。遺物は出土していない。

#### SK2（第19・29図）

4区中央の土器集中出土箇所検出した焼土坑である。古墳時代の包含層を切っており、形状はうまく捉えられなかった。断面図を基に計測すると、検出高28.7m・長軸1.7m以上・短軸1.5m以上・深さ50cmを測る。埋土は暗灰色ないし暗灰褐色粘質土を基調とする。2・4層は炭化物層、3・5～6層は焼土粒を含んだ層で、9層が古墳時代の包含層である。炭化物層と焼土層がレンズ状に層を違えて堆積していることから何らかの火焚き行為、もしくは貼床をしていた可能性がある。6層から土師皿（58）が完形で出土した。

#### SD1（第20図）

4区中央の土器集中出土箇所付近で検出した。検出高28.4m・幅35cm・深さ10cmを測る。溝底で石が1点出土した。

### 6 区

6区は現正友集落の南縁沿いに位置し、調査面積は水路・パイプライン併設箇所が383㎡で、そのうち水路が147㎡である。遺構検出面の標高は6区東端36.3mから西端30.3mへと徐々に減じ、遺構の数も同様に減少傾向を示す。基本層序は盛土→耕土（旧耕土含む）→古代の包含層→地山となっており、6区西端から東へ130mまでは明確な遺構が確認できなかった。土坑2基、ピット15基を検出している。6区西端は鞍部であった。遺構の主時期は古代と考える。



なお、遺構計測表の留意点については3区の項を参照されたい。

#### SK 1 (第23・30図)

6区東端で検出した。東に隣接する土坑と西に隣接する落ち込みを切る。隅丸長方形を呈し、検出高36.0m、長辺2m以上・短辺1m以上・深さ50cmを測る。壁面の立ち上がりは緩く、坑底の北西隅部でピットを1基検出し、深さ10cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土を基調とし、土層断面の6～8層に対応する。6・7層には土器と炭化物が、8層には地山を多く含んでいた。壁面の崩落土の可能性が低いことから、8層は埋め戻しの可能性がある。5層は風倒木痕、9・10層が他遺構の埋土である。遺物は須恵器の甕(63)、土師器の甕(64)・鉢(65)、須恵器の杯(66～74)等が出土しており、取り上げはSK2と合わせて行った。

#### SK 2 (第23・30図)

6区東端、SK1の南側に隣接する。北東隅部でピットに切られる。長方形を呈し、検出高36.0m・長辺4.2m・短辺1m以上・深さ50cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土を基調としており、土層断面の8・9層に対応し、9層がややオーバーハング気味に堆積している。3層が攪乱で、4～7層は風倒木痕の可能性が。遺物は須恵器の甕(63)、土師器の甕(64)・鉢(65)、須恵器の杯(66～74)等が出土しており、取り上げはSK1と合わせて行った。

### 7 区

7区は6区の東端に隣接し、現正友集落の南縁沿いのパイプライン設置箇所位置する。調査面積は69㎡である。遺構検出面の標高は7区東端37.1mから西端36.4mへと低くなる。基本層序は盛土・耕土→地山が大半で、6区で観察できた包含層はあまりよく残っていない。土坑3基、溝1条、ピット1基を検出した。遺構の主時期は6区と同様、古代と考える。

#### SK 1 (第25図)

7区西端で検出した。溝状を呈し、検出高36.4m、幅50cm以上・深さ35cmを測る。坑底の西部で石が調査区北壁に刺さった状態で出土し、他に土師器と須恵器が出土した。

#### SK 2 (第25図)

7区中央部で検出した。平面形態は推定困難であり、検出高36.7m、長軸1.7m以上・短軸40cm以上・深さ5cmを測る。浅い落ち込みの可能性が。坑底の北部でピットを検出し、深さ15cmを測る。土師器と須恵器が出土した。

#### SK 3 (第25図)

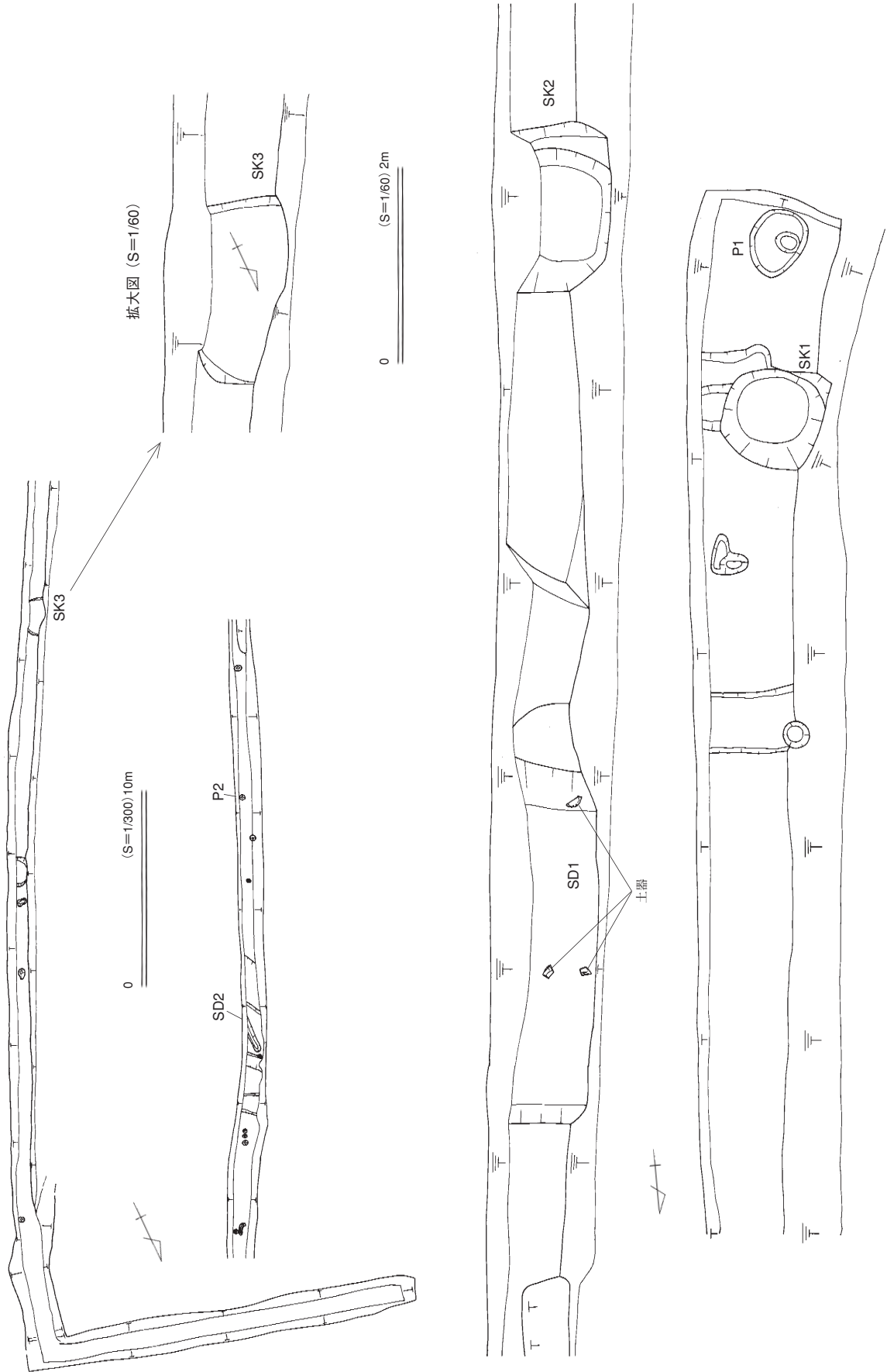
7区中央部で検出した。凸状を呈し、検出高36.7m、東西長4.5m・南北長1.5m以上・深さ10～20cmを測る。坑底はやや凹凸が目立つ。埋土は土層断面の6・7層に対応し、3～5層に切られていることから、層位は6・7層→5層→4層→3層の順に新しくなる。土師器が出土した。

#### SD 1 (第25図)

7区中央部で検出した。検出高36.6m・幅2.5m・深さ15cmを測る。埋土は土層断面の5層に対応し、3・4層に切られていた。各層はいずれも下部で砂礫を含んでいることから、溝状の遺構であった可能性がある。遺物は出土しなかった。

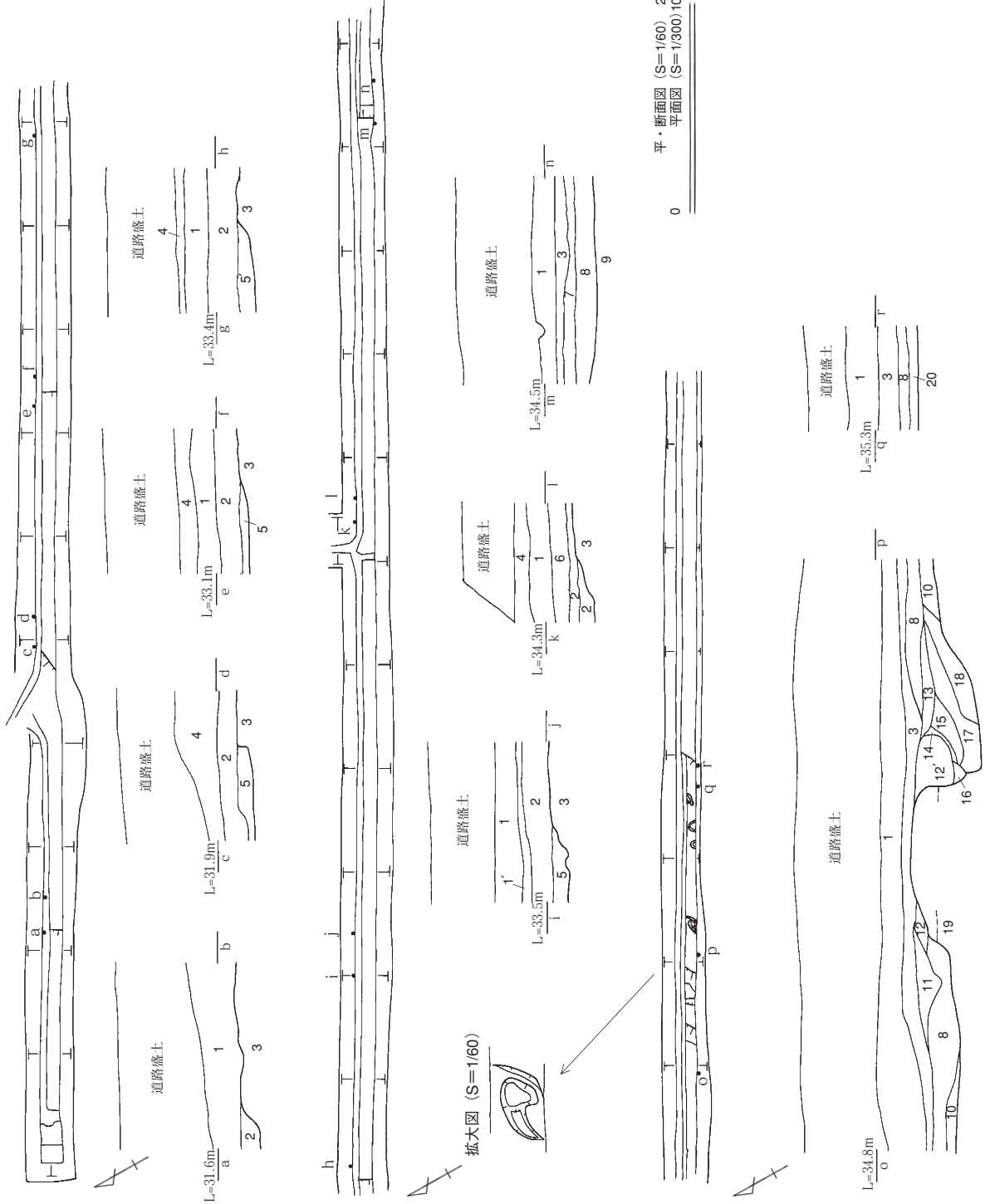
#### P 1 (第25図)

7区中央部で検出した。円形を呈し、検出高36.9m・径35cm・深さ15cmを測る。土師器が出土した。

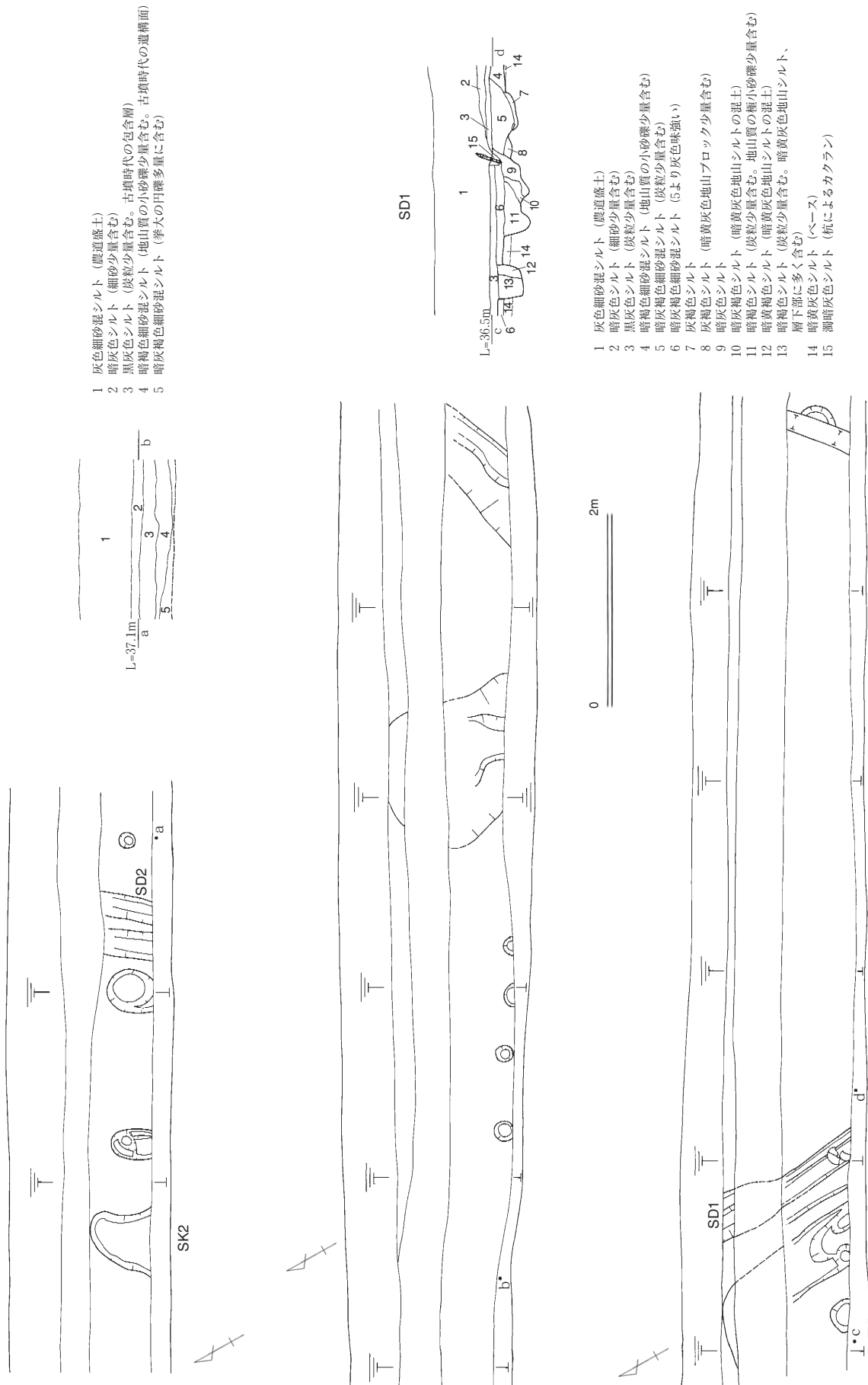


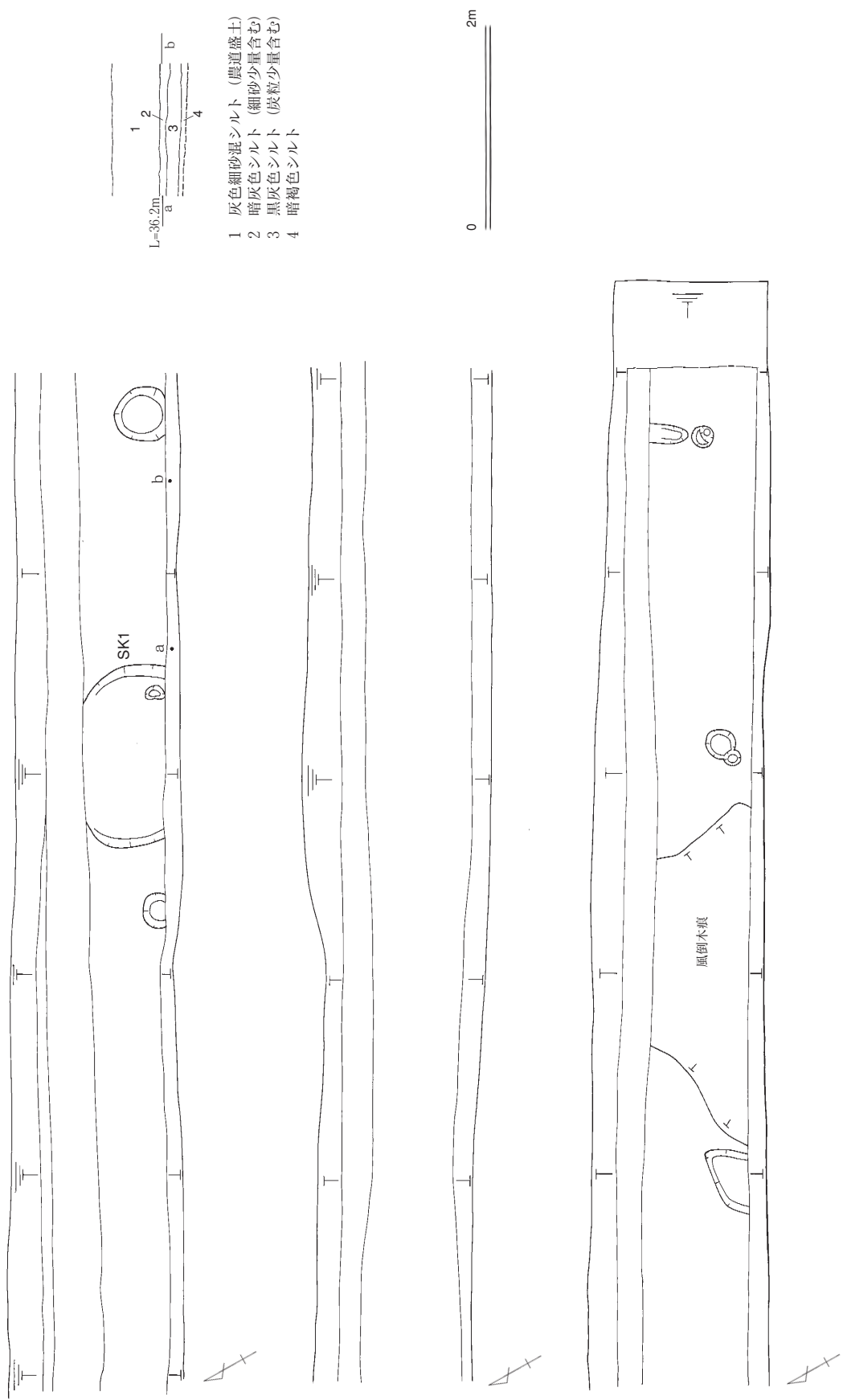
第6図 平成16年度調査 1区遺構実測図 (S=1/60・1/300)

- 1 灰色粘質土 (砂粒多量に含む)
- 1' 床土茶灰色粘質土 (砂粒多量に含む)
- 2 灰色砂質土 (旧耕土)
- 2' 灰色砂質土 (2層との間に小砂利層。2層より色調暗い)
- 3 褐色粘質土
- 4 茶灰色粘質土 (3層ブロック含む)
- 5 淡灰色砂
- 5' 灰色砂 (3層ブロック混)
- 6 灰色粘質土 (1層に類似するが色調やや暗い)
- 7 茶灰色粘質土 (暗褐色土を含む)
- 8 暗褐色粘質土
- 9 暗茶灰色粘質土 (砂粒、小礫多量に含む)
- 10 茶灰色粘質土 (砂礫含む)
- 11 灰色土 (砂礫含む)
- 12 黒褐色粘質土
- 12' 黒褐色粘質土 (黄～茶褐色のブロック含む)
- 13 茶灰色粘質土
- 14 暗褐色粘質土 (黄～茶褐色土を含む)
- 15 暗褐色粘質土
- 16 黄灰白色粘質土 (暗褐色土を含む)
- 17 褐色粘質土
- 18 暗褐色粘質土
- 19 黄灰白色粘質土
- 20 暗褐色粘質土

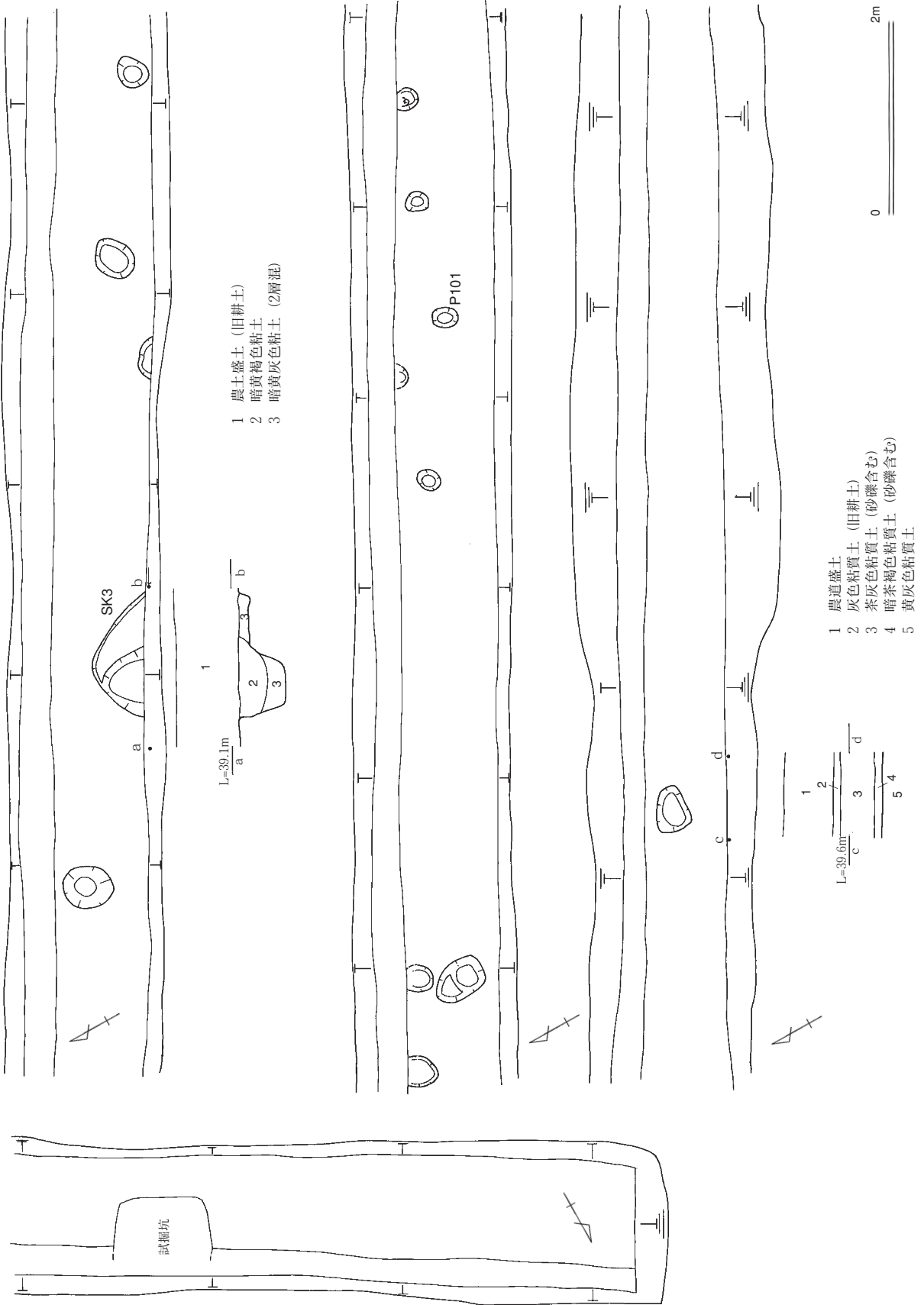


第7図 平成16年度調査 2区西遺構実測図① (S=1/60・1/300)

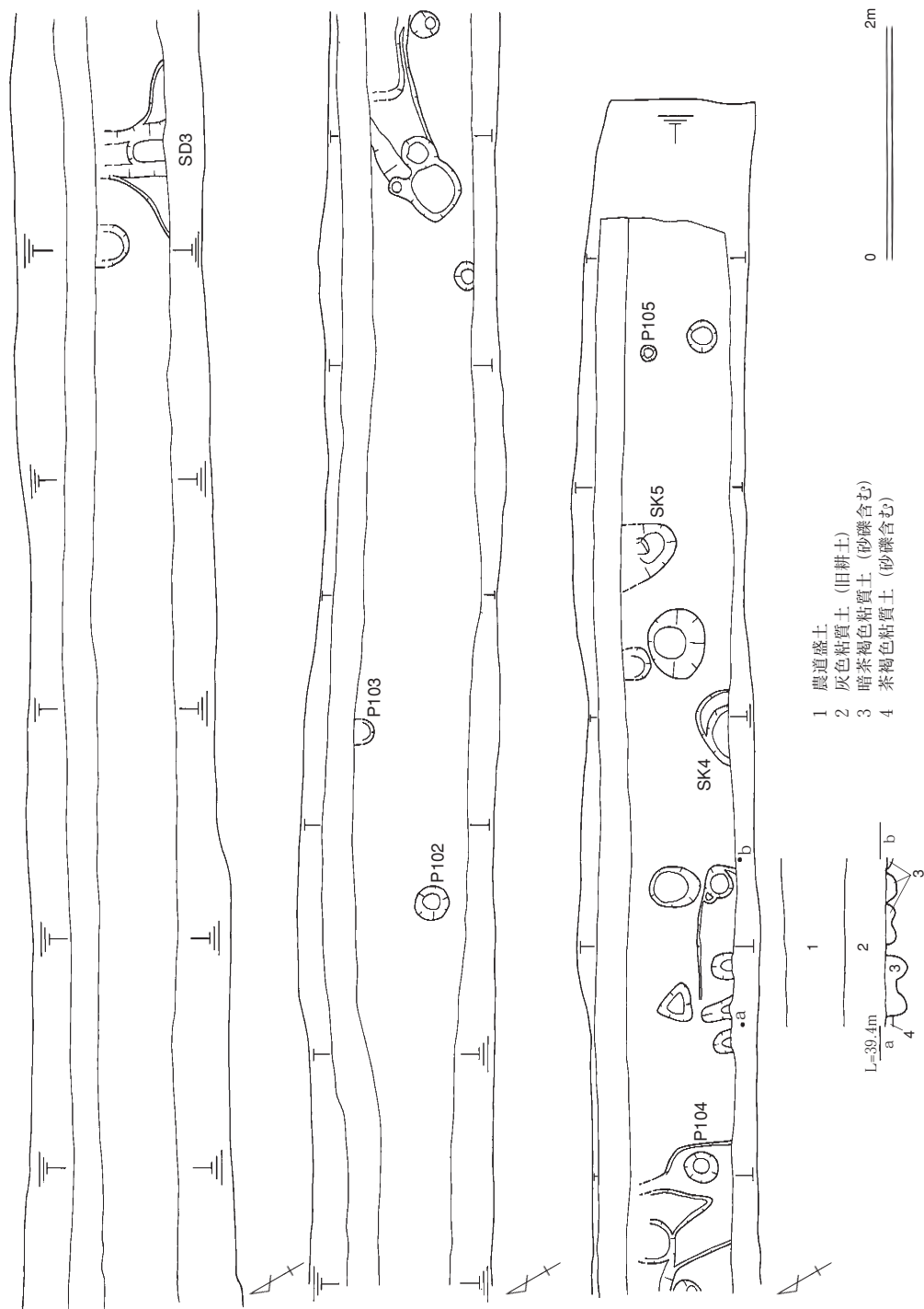




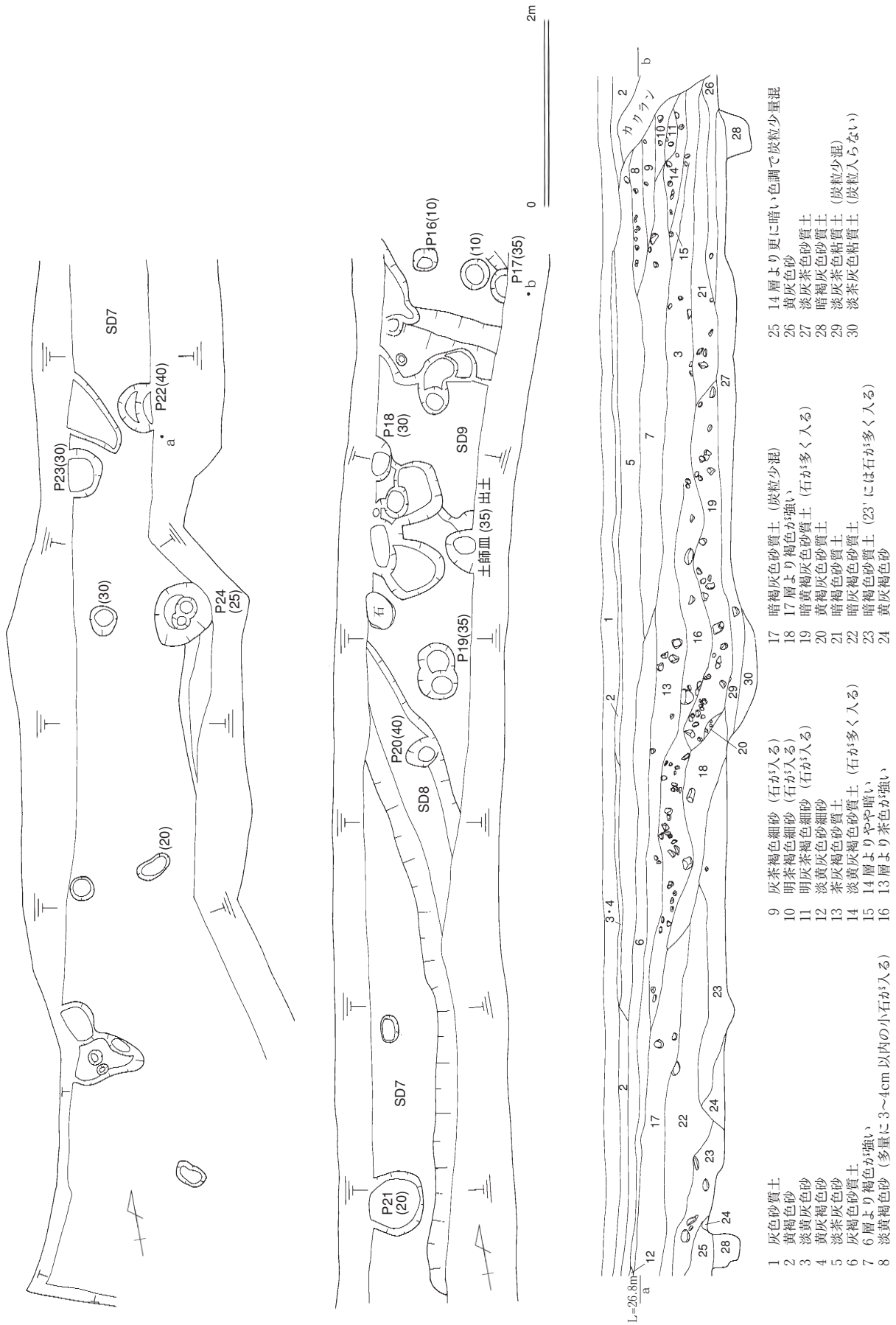
第9図 平成16年度調査 2区西遺構実測図③ (S=1/60)



第10図 平成16年度調査 2区東遺構実測図① (S=1/60)

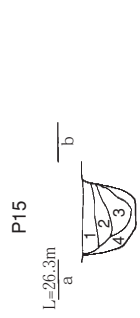


第11図 平成16年度調査 2区東遺構実測図② (S=1/60)

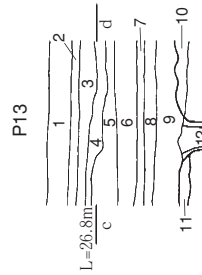


第12図 平成16年度調査 3区南遺構実測図① (S=1/60)

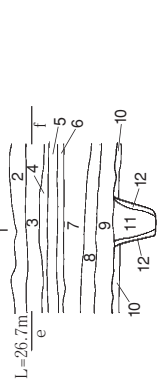




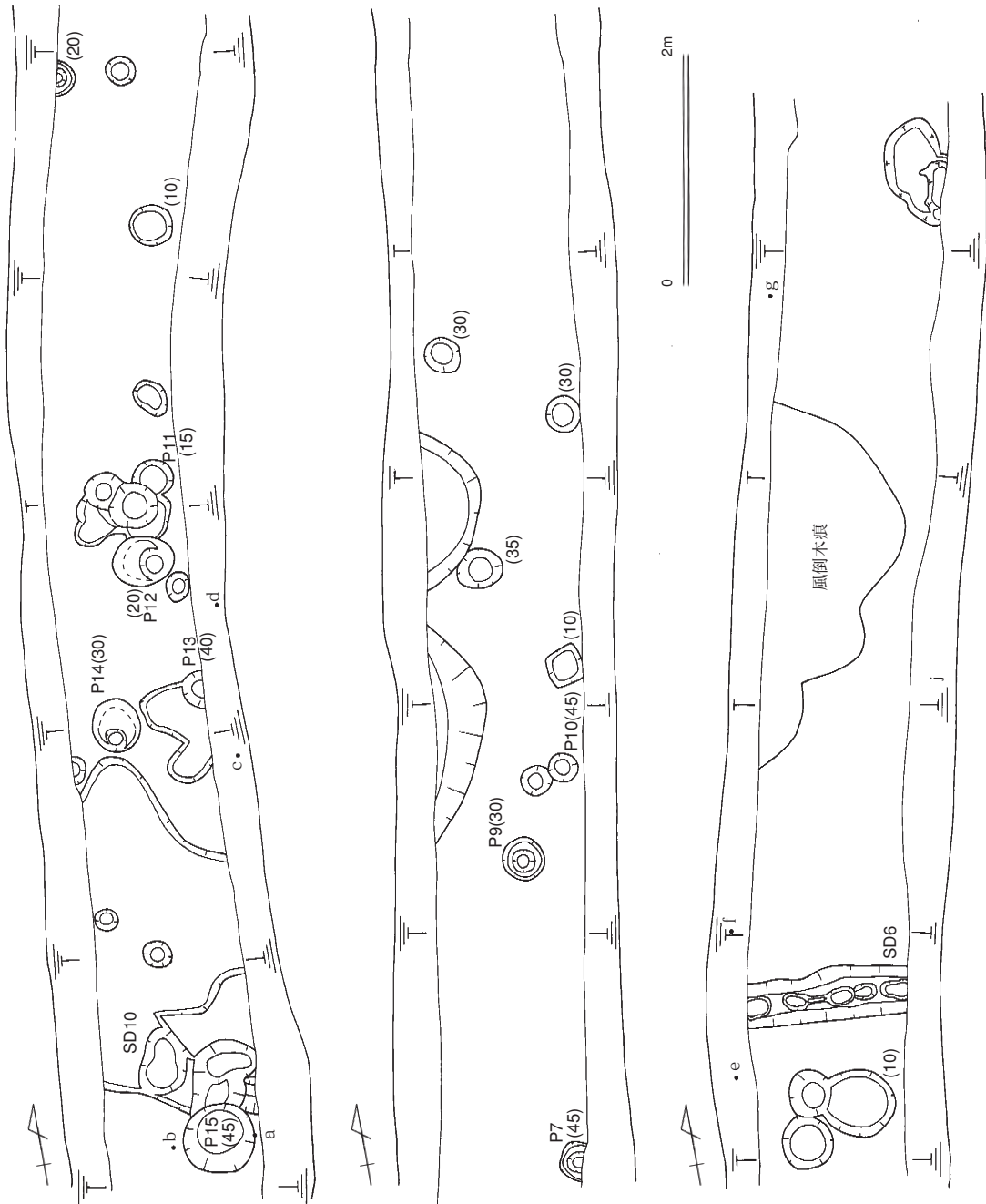
- 1 暗褐色砂質土 (粘土・炭化物混入)
- 2 褐色砂質土
- 3 暗褐色砂質土 (地山アロックスを含む)
- 4 褐色砂質土 (地山アロックス多量を含む)



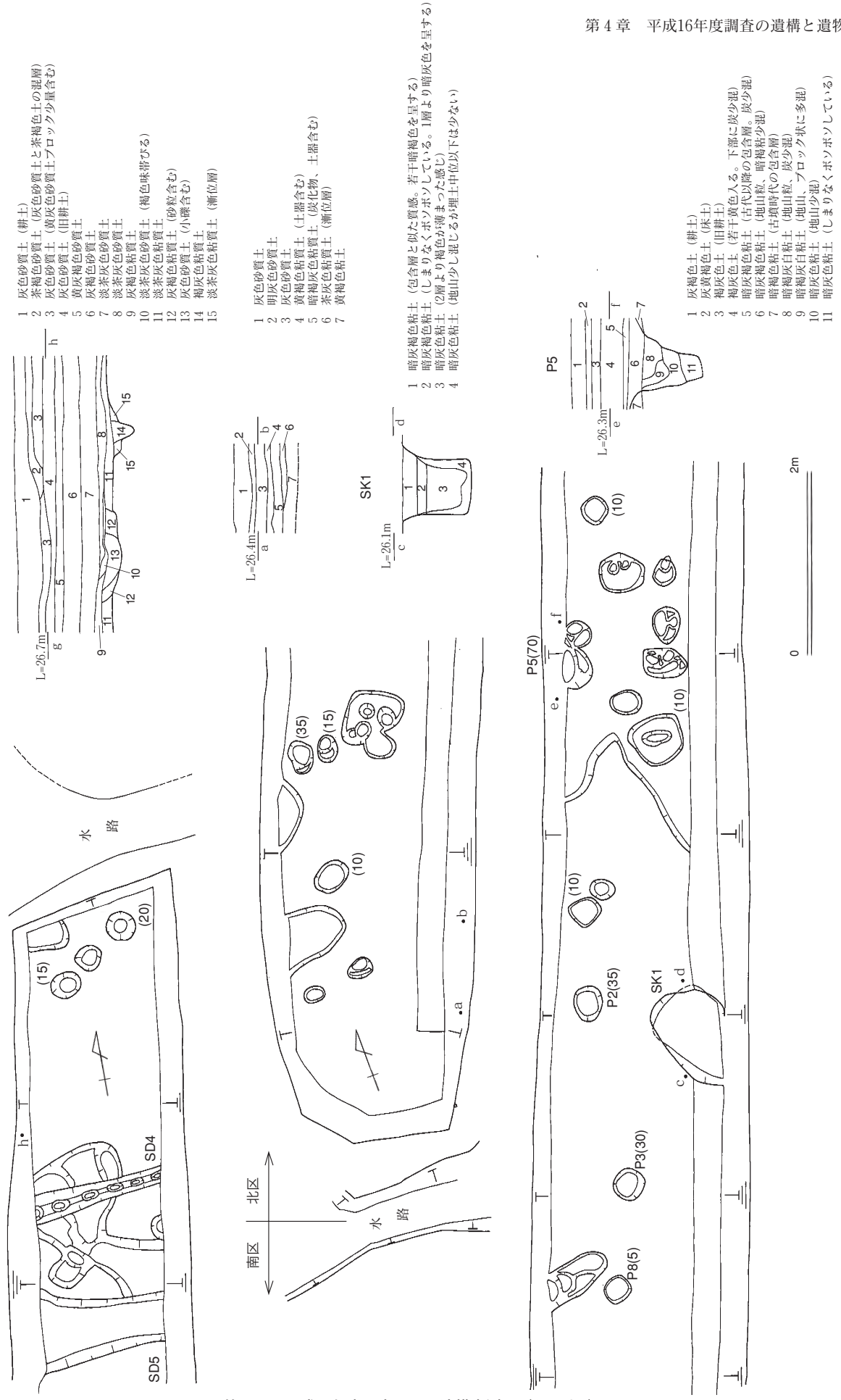
- 1 灰色砂質土 (粘土)
- 2 茶灰色砂
- 3 淡茶灰色砂 (中に鉄分多)
- 4 淡黄灰色砂 (根株上に落ち込む)
- 5 灰褐色砂質土
- 6 茶灰褐色砂質土
- 7 暗褐色砂質土 (炭化物・土器含む)
- 8 暗褐色砂質土 (炭化物・土器含む)
- 9 暗褐色砂質土 (炭化物・土器含む)
- 10 暗褐色砂質土 (運搬層?)
- 11 暗褐色砂質土 (運搬層?)
- 12 暗褐色砂質土 (炭化物多量を含む)
- 13 暗黄褐色砂



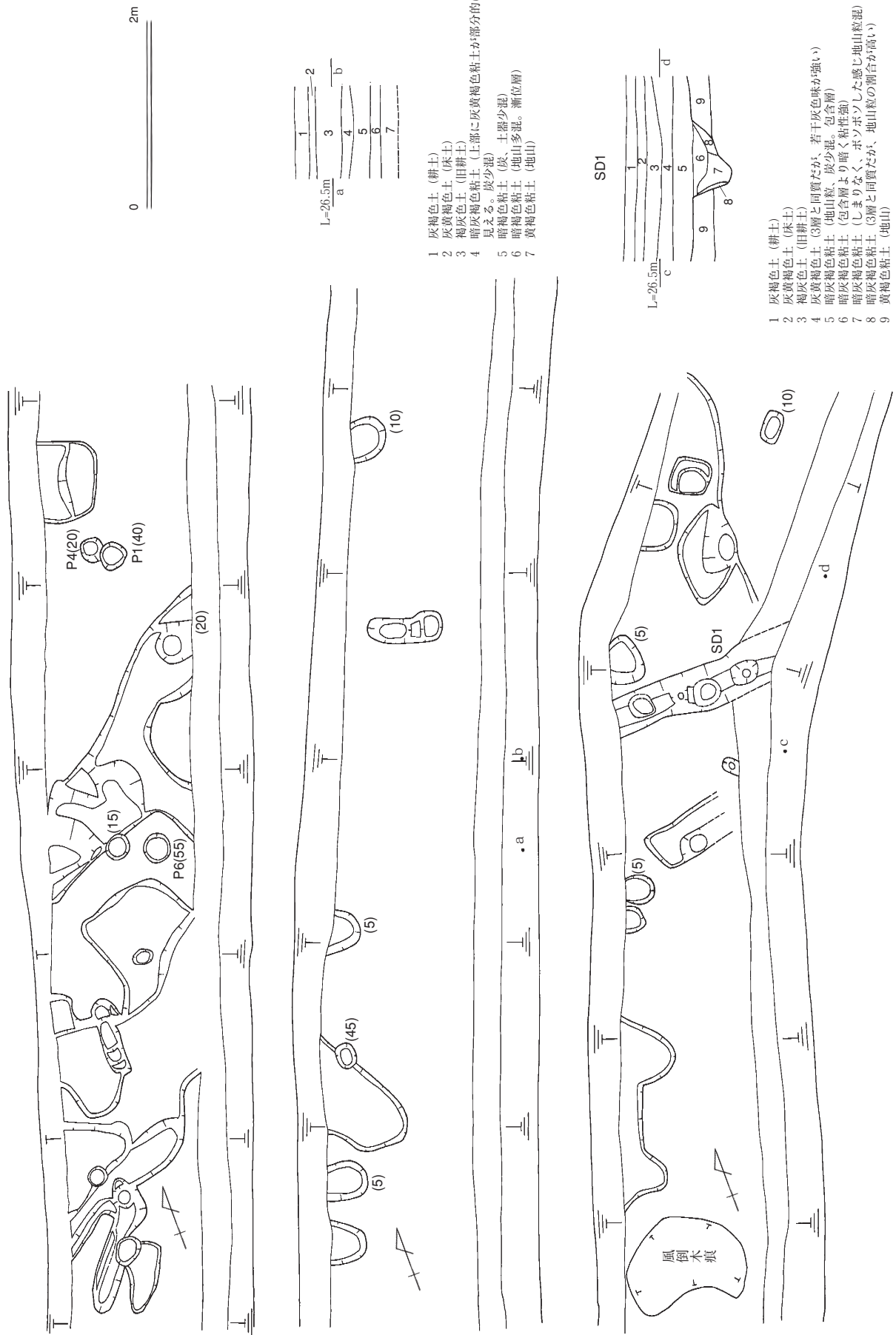
- 1 灰色砂質土 (粘土)
- 2 茶褐色砂質土 (灰色砂質土と茶褐色土の混層)
- 3 灰色砂質土 (旧粘土)
- 4 黄褐色砂質土
- 5 灰褐色粘質土
- 6 暗褐色粘質土
- 7 淡茶灰色砂
- 8 淡茶灰色粘質土
- 9 淡茶灰色粘質土 (漸移層)
- 10 淡茶灰色粘質土 (炭化物多量を含む)
- 11 暗褐色砂質土 (炭化物多量を含む)
- 12 暗黄褐色砂



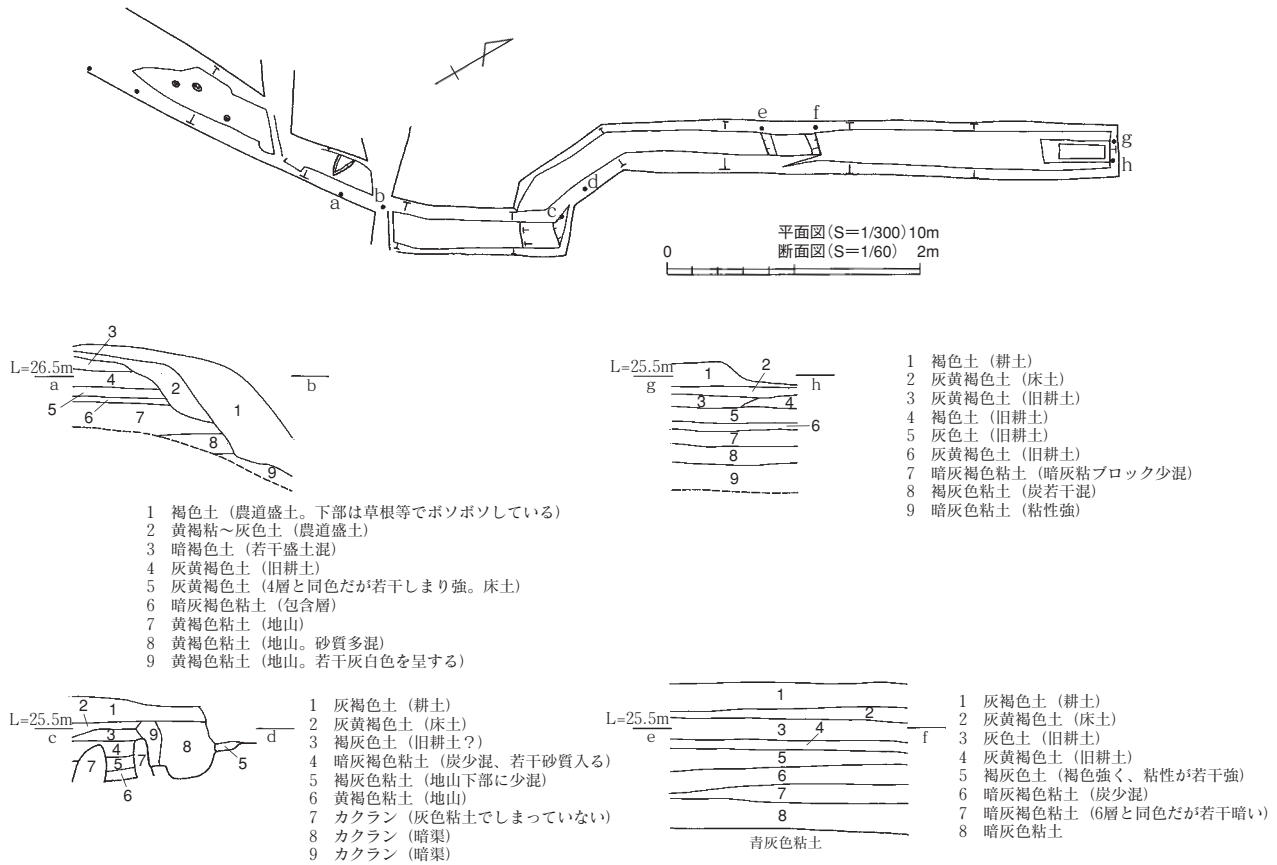
第13図 平成16年度調査 3区南遺構実測図② (S=1/60)



第14図 平成16年度調査 3区遺構実測図 (S=1/60)



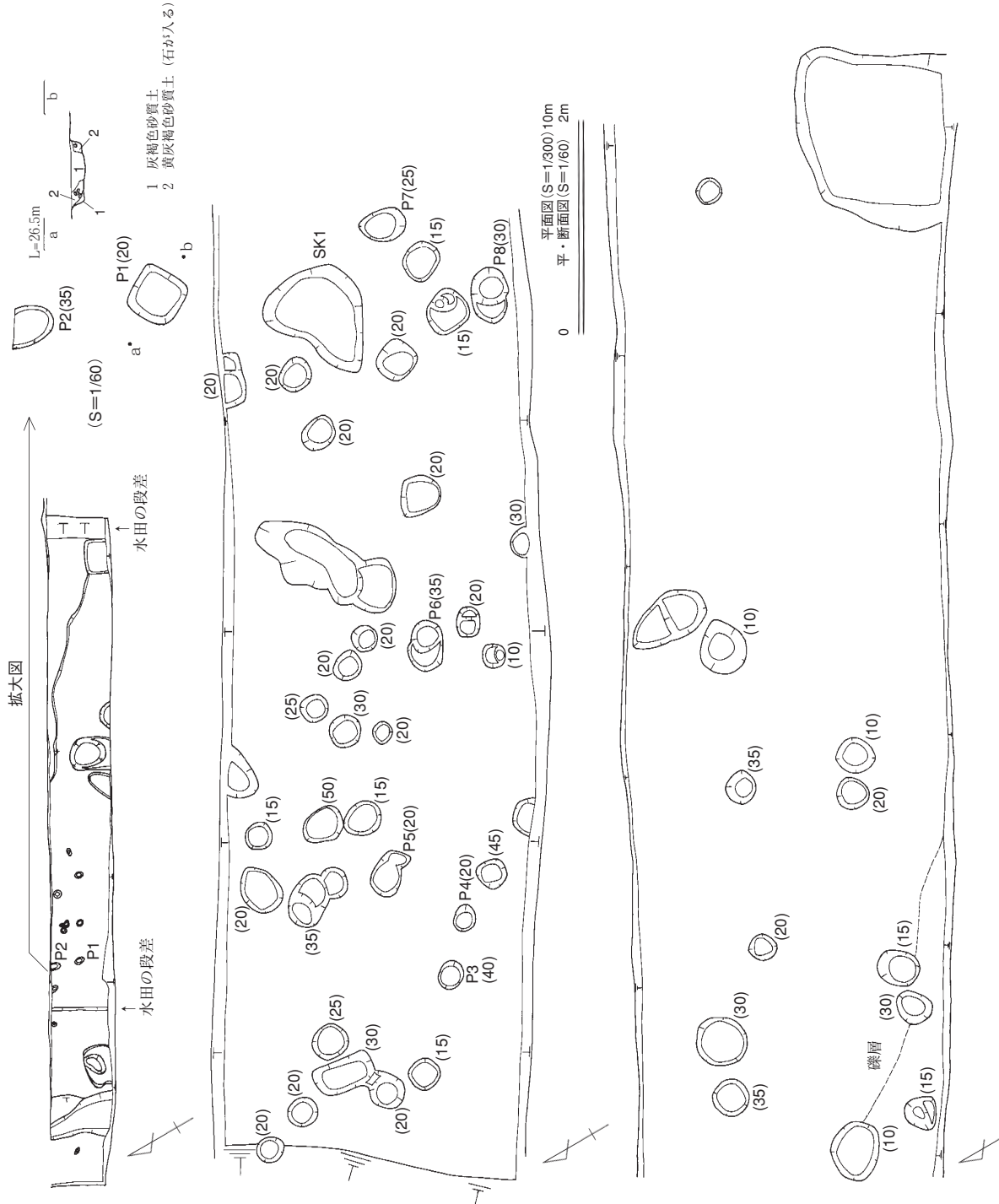
第15図 平成16年度調査 3区北遺構実測図① (S=1/60)



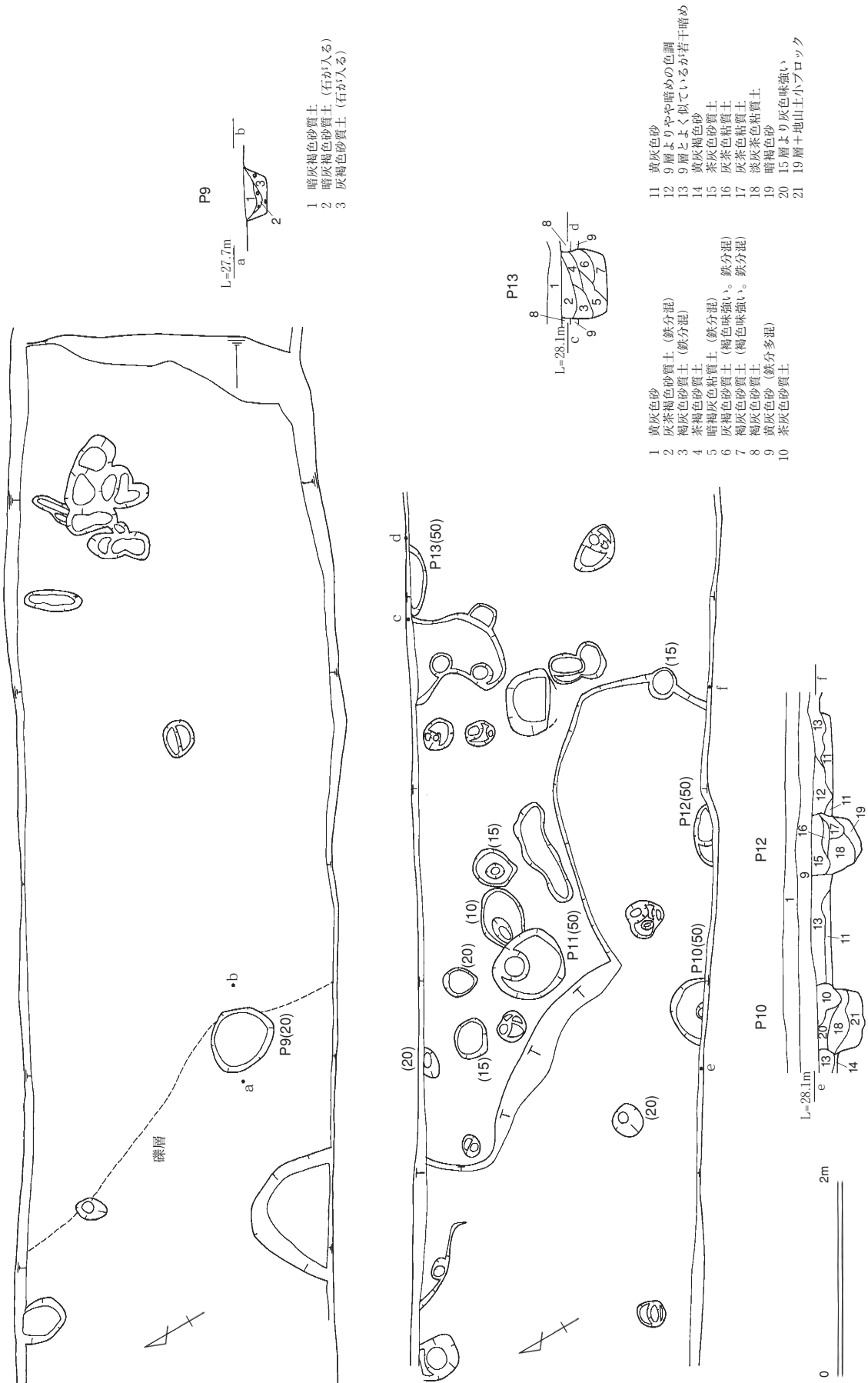
第16図 平成16年度調査 3区北遺構実測図② (S=1/60・1/300)

第2表 平成16年度調査 3区遺構計測表

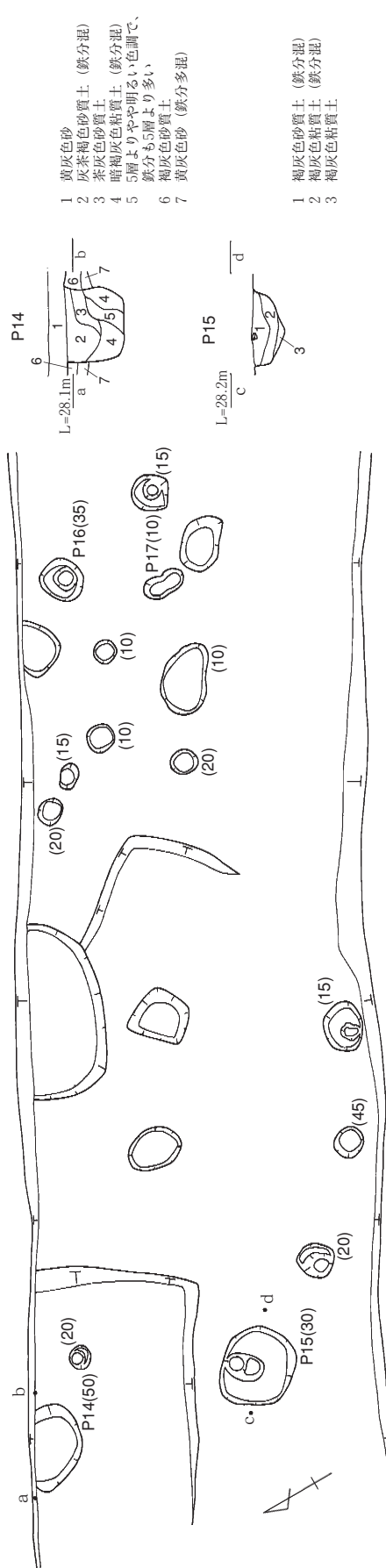
番号	位置	検出高(m)	形状	規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
1	3区北	25.8	円	30×25	40	—	第15図
2	3区北	25.9	円	40×35	35	—	第14図
3	3区北	26.0	隅丸方	30×30	30	土師器	第14図
4	3区北	25.8	円	25×25	20	—	第15図
5	3区北	25.9	瓢箪	70×(35)	70	—	第14図
6	3区北	25.9	円	30×30	55	土師器	第15図、第28図23
7	3区南	26.1	円	40×(20)	45	—	第13図
8	3区北	26.0	隅丸方	30×30	5	—	第14図
9	3区南	26.1	円	35×35	30	—	第13図
10	3区南	26.1	円	25×25	45	土師器	第13図
11	3区南	26.1	円	40×30	15	土師器	第13図
12	3区南	26.1	円	50×40	20	土師器	第13図
13	3区南	26.1	円	35×(20)	40	土師器、須恵器	第13図、第28図24
14	3区南	26.1	円	45×45	30	土師器	第13図
15	3区南	26.1	円	60×60	45	土師器	第13図
16	3区南	26.0	隅丸方	25×20	10	土師器	第12図
17	3区南	26.0	円	35×(20)	35	土師器	第12図、第28図25・26
18	3区南	25.9	円	50×(25)	30	土師器	第12図
19	3区南	25.8	瓢箪	65×40	35	土師器	第12図、第28図27
20	3区南	25.6	円	30×25	40	土師器	第12図
21	3区南	25.8	円	70×(50)	20	土師器	第12図、第28図28・29
22	3区南	25.9	円	50×(40)	40	土師器	第12図
23	3区南	25.9	円	50×(40)	30	土師器	第12図
24	3区南	25.9	円	70×50	25	土師器	第12図



第17図 平成16年度調査 4区遺構実測図① (S=1/60・1/300)



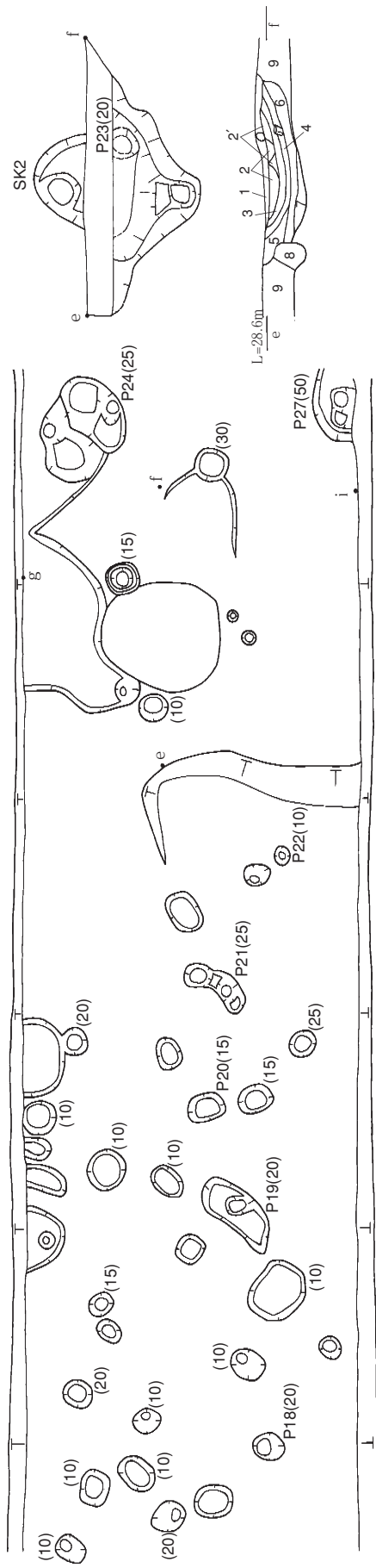
第18図 平成16年度調査 4区遺構実測図② (S=1/60)



- 1 黄灰色砂
- 2 灰茶褐色砂質土 (鉄分混)
- 3 茶灰色砂質土
- 4 暗褐色粘質土 (鉄分混)
- 5 5層よりやや明るい色調で、鉄分も5層より多い
- 6 褐灰色砂質土
- 7 黄灰色砂 (鉄分多混)

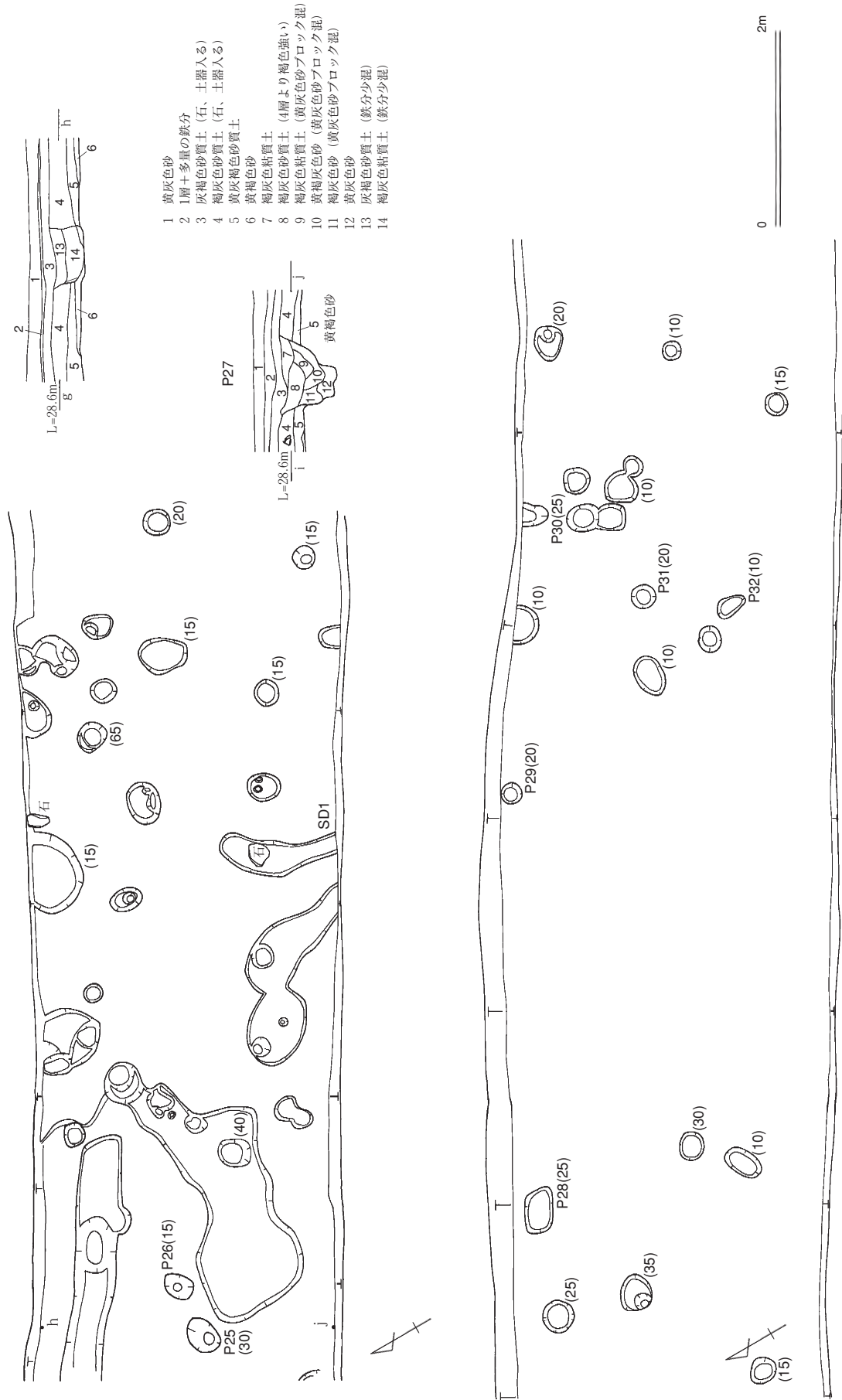
- 1 褐灰色砂質土 (鉄分混)
- 2 褐灰色粘質土 (鉄分混)
- 3 褐灰色粘質土

0 2m



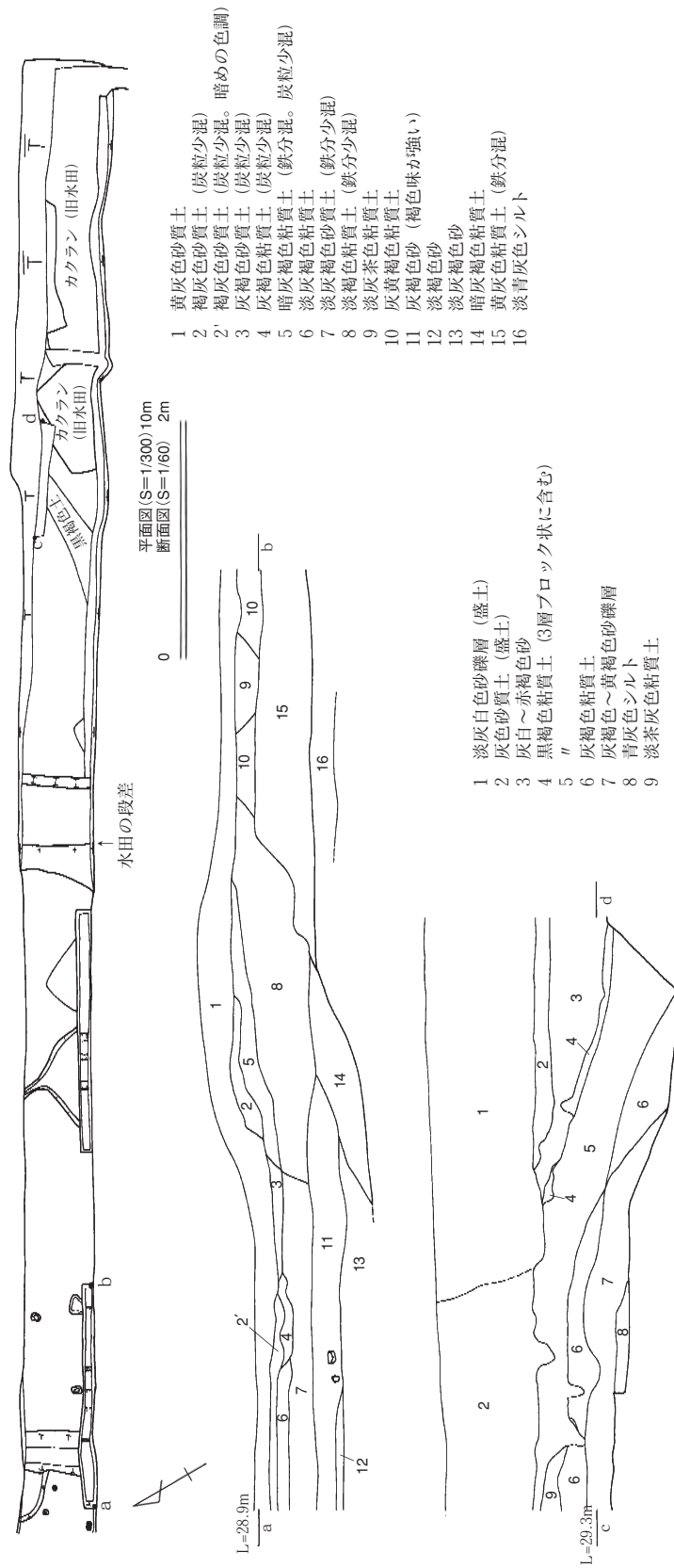
- 1 褐灰色粘土 (炭少混。若干砂質気味)
- 2 暗灰色粘土 (炭多混。焼土粒混。炭化物層)
- 2' 焼土の入る割合が少ない
- 3 暗褐色粘土 (焼土ブロック状に混。炭少混)
- 4 暗灰褐色粘土 (炭多混。焼土粒少混。炭化物層)
- 5 暗灰褐色粘土 (炭、焼土粒少混。若干砂質気味)
- 6 暗灰褐色粘土 (炭、焼土少混。5層よりも粘質。土器出土)
- 7 暗灰褐色粘土 (地山混)
- 8 暗灰褐〜黄褐色粘土の混層 (カクランの可能性高い)
- 9 暗褐色粘土 (炭少混。古墳時代の包含層)

第19図 平成16年度調査 4区遺構実測図③ (S=1/60)

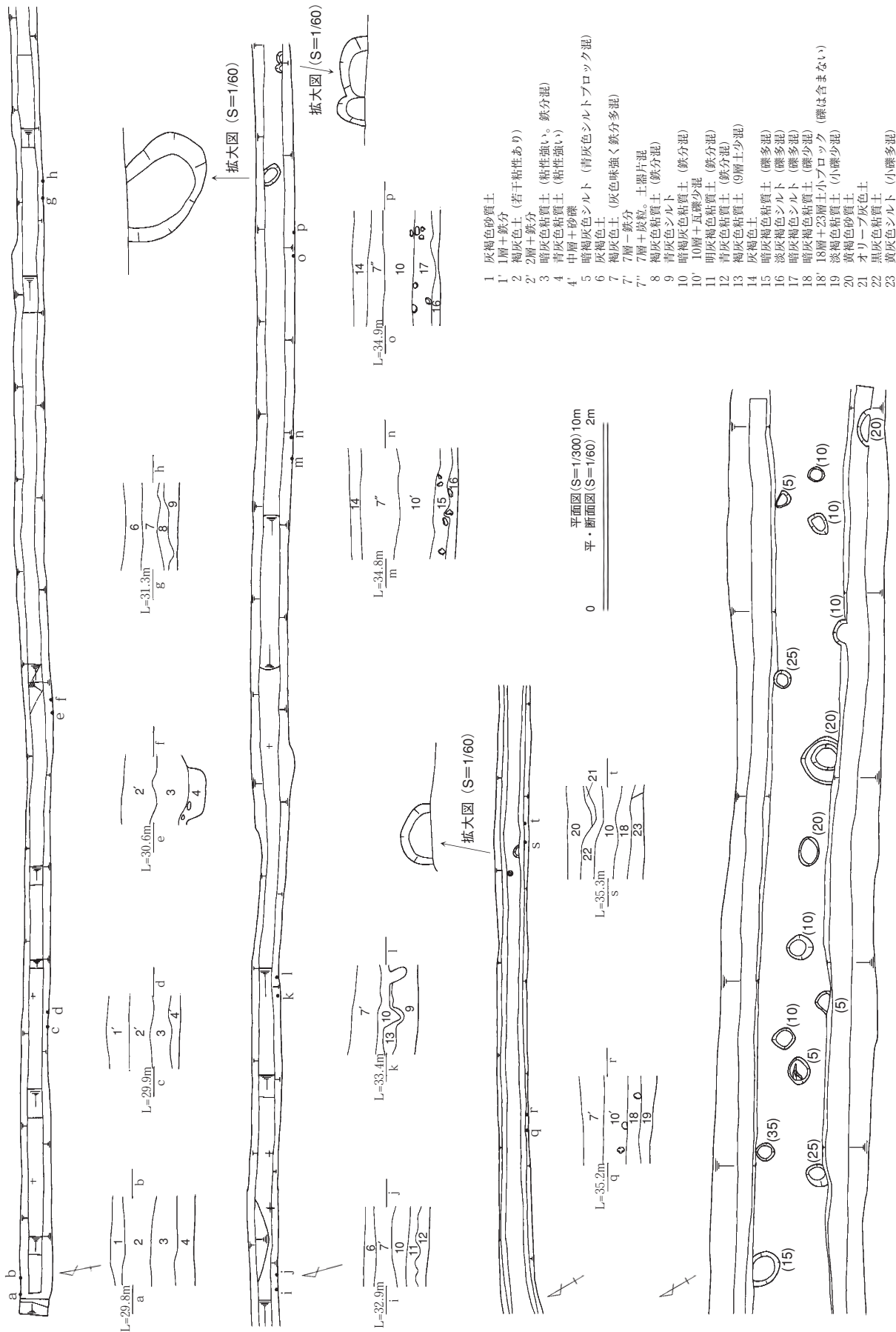


第20図 平成16年度調査 4区遺構実測図④ (S=1/60)

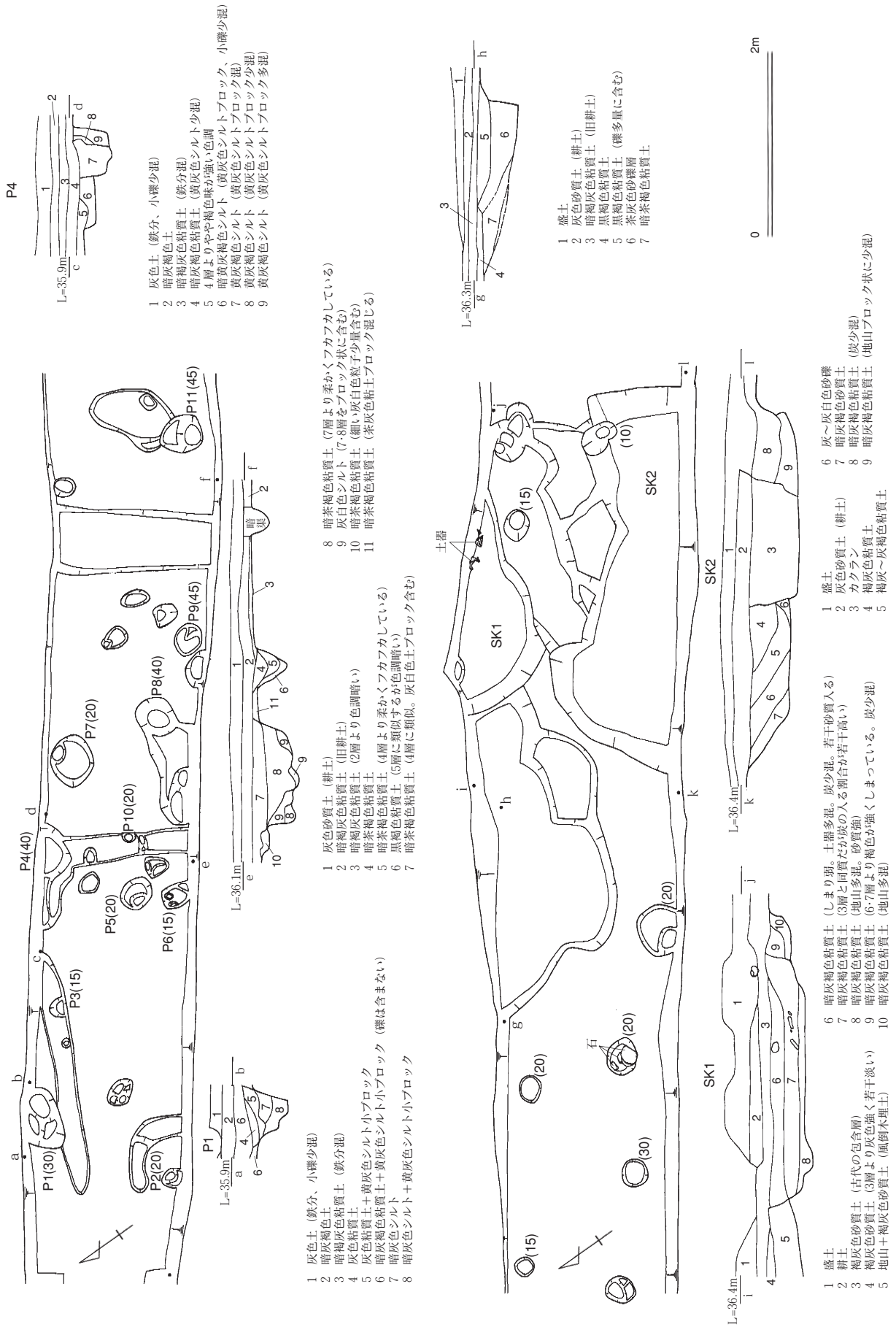




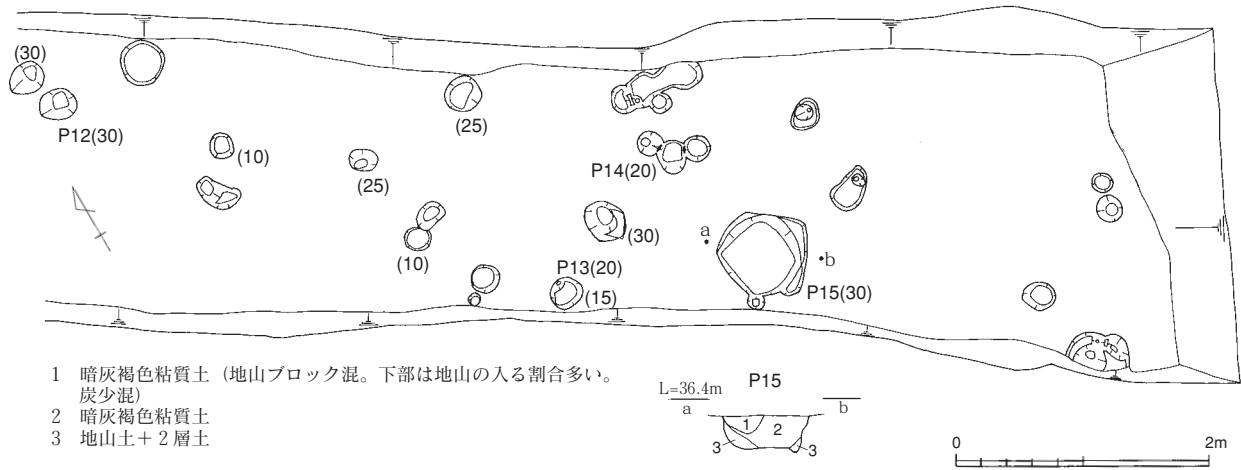
第21図 平成16年度調査 4区遺構実測図⑤ (S=1/60・1/300)



第22図 平成16年度調査 6区遺構実測図① (S=1/60・1/300)



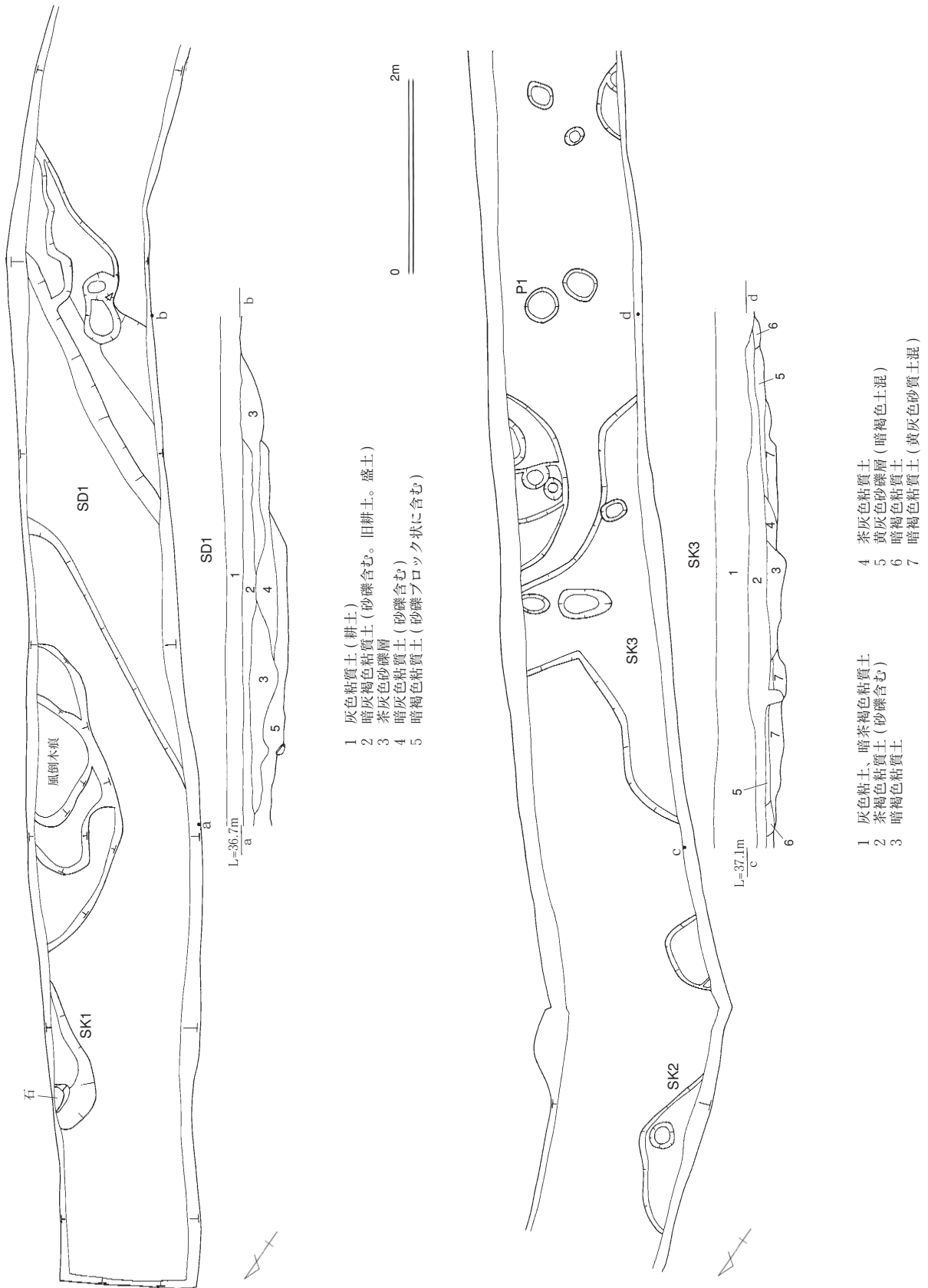
第23図 平成16年度調査 6区遺構実測図② (S=1/60)



第24図 平成16年度調査 6区遺構実測図③ (S=1/60)

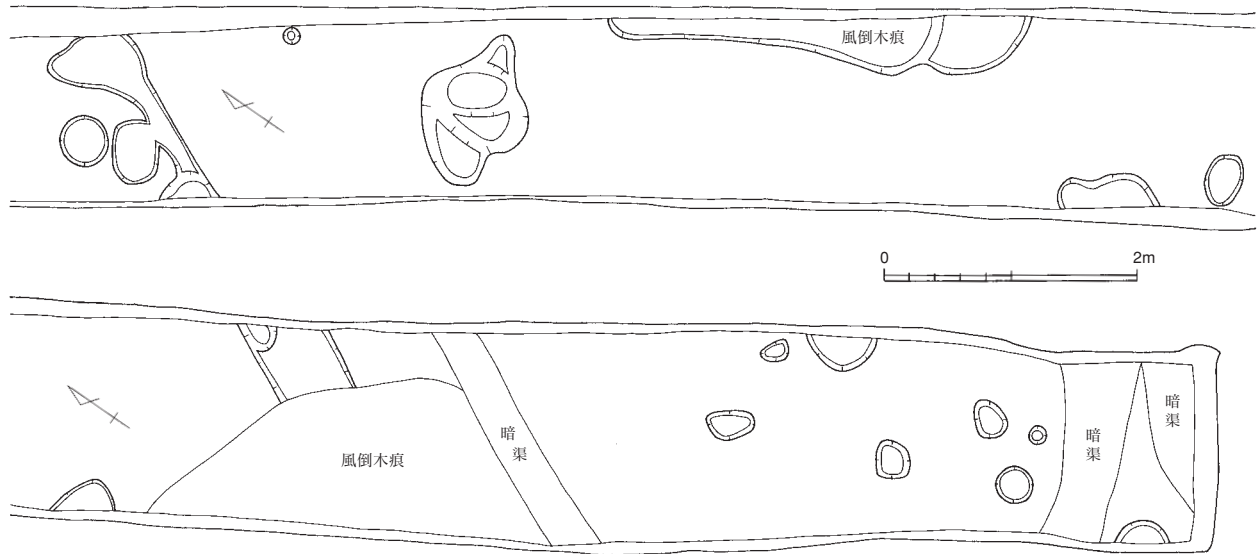
第3表 平成16年度調査 6区遺構計測表

番号	位置	検出高(m)	形状	規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
1	6区	35.7	楕円	(60) × (40)	30	土師器	第23図
2	6区	35.7	隅丸方	20 × 20	20	土師器	第23図
3	6区	35.6	円	(20) × 20	15	土師器	第23図
4	6区	35.8	隅丸方	50 × (40)	40	土師器	第23図
5	6区	35.8	隅丸方	30 × 30	20	土師器	第23図
6	6区	35.8	隅丸方	30 × 25	15	土師器	第23図
7	6区	35.8	隅丸方	50 × 45	20	土師器	第23図
8	6区	35.9	隅丸方	40 × 40	40	土師器	第23図
9	6区	35.9	円	35 × 30	45	土師器	第23図
10	6区	35.7	円	10 × 10	20	土師器	第23図
11	6区	36.0	円	50 × 40	45	土師器	第23図、古代
12	6区	36.2	円	30 × 25	30	土師器	第24図
13	6区	36.2	円	20 × 20	20	土師器	第24図
14	6区	36.2	円	20 × 20	20	土師器	第24図
15	6区	36.2	隅丸方	60 × 60	30	土師器	第24図



第25図 平成16年度調査 7区遺構実測図① (S=1/60)





第26図 平成16年度調査 7区遺構実測図② (S=1/60)

第4表 平成16年度調査 4区遺構計測表

番号	位置	検出高(m)	形状	規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
1	4区	26.4	隅丸方	45×40	20	土師器	第17図
2	4区	26.4	楕円	40×(35)	35	—	第17図
3	4区	27.1	円	25×20	40	土師器	第17図、古代
4	4区	27.1	円	25×20	20	土師器	第17図
5	4区	27.1	隅丸長方	45×30	20	土師器	第17図
6	4区	27.2	楕円	45×30	35	土師器	第17図
7	4区	27.2	楕円	40×30	25	土師器	第17図
8	4区	27.2	楕円	50×35	30	土師器	第17図、古代
9	4区	27.4	円	70×60	20	土師器	第18図
10	4区	27.9	円	70×(30)	50	土師器	第18図
11	4区	27.9	隅丸方	80×70	50	土師器	第18図
12	4区	27.9	楕円?	(60)×(20)	50	土師器	第18図
13	4区	27.9	楕円?	80×(20)	50	土師器	第18図
14	4区	27.9	隅丸方	60×60	50	土師器	第19図
15	4区	27.9	隅丸方	70×65	30	土師器	第19図
16	4区	28.1	隅丸方	35×35	35	土師器	第19図
17	4区	28.1	瓢箪	40×20	10	土師器	第19図
18	4区	28.1	円	30×25	20	土師器	第19図
19	4区	28.2	隅丸長方	80×30	20	土師器	第19図、第29図59
20	4区	28.2	隅丸方	30×25	15	土師器	第19図
21	4区	28.2	楕円	65×20	25	土師器	第19図
22	4区	28.2	円	20×15	10	土師器	第19図、古代
23	4区	28.3	円	25×(20)	20	土師器	第19図
24	4区	28.4	楕円	75×45	25	土師器	第19図
25	4区	28.4	楕円	40×30	30	土師器	第20図、古代
26	4区	28.4	楕円	30×25	15	土師器	第20図
27	4区	28.4	円	70×(40)	30	土師器	第19図、古代
28	4区	28.5	隅丸長方	50×30	25	土師器	第20図
29	4区	28.5	円	20×20	20	土師器	第20図
30	4区	28.6	円	30×25	25	土師器	第20図
31	4区	28.6	円	20×20	20	土師器	第20図
32	4区	28.6	楕円	30×20	10	土師器	第20図

## 第2節 遺物 (第27～30図)

遺物の時期は古墳時代と古代を田嶋編年 (1986・1988)、中世は藤田編年 (1989) を参考とした。

1～11は1区出土遺物である。1～6はSD1、7～10がSD2、11は表採出土である。1は木製の鉢で加工痕が部分的に残り、内外面には黒漆が塗布される。2は土師皿で全体的に歪みが激しく、口縁端部と体部外面に計2段のナデが施される。3は珠洲焼の挿鉢で、内面は磨耗しロクロ痕が目立つ。4～6は土錘である。4・5は体部中央がやや膨らみをもつものに対して、6はスマートな形状である。色調・胎土とも似る。7は白磁の壺で、欠損しているが肩部に耳が付く。8・9は土師皿である。8は2と同様に2段のナデが施される。9の小皿は器壁が均一である。2・8・9は藤田編年Ⅱ期と考える。10は土錘で4～6より厚手である。図中の破線は指頭痕ではなく欠損部を示す。11は珠洲焼の挿鉢で口縁端部がやや外傾し、内面の卸目は幅2.5cmの6本である。

12～20は2区出土遺物である。12がSD1、13はSD2、14がP104、15～20は包含層出土である。12は高杯で杯体部が内湾気味に開き、底部との境はヨコナデで窪む。13は甕で口縁「く」の字を呈する。遺存度が低いために口径は縮小する可能性がある。14は無台杯で器壁が薄く、底部外面はヘラ切り後、未調整である。形状は椀に似る。15は甕で器壁が脆くなっており、口縁端部に煤が付着する。16は鍋で一度折り曲げた後に上方へつまみ上げたような口縁部を呈する。17は蓋で焼きが甘く、つまみは偏平となる。18は杯で体部が直線的に開き、ロクロ痕が目立つ。19の杯は土師質で器壁が薄く、底部内面が黒色化している。14・18は田嶋編年Ⅵ2期と考える。20は紡錘車である。土師質で上面に溝状の窪みを通り、側面の一部に煤が付着している。

21～50は3区出土遺物である。23はP6、24がP13、25・26はP17、27がP19、28・29はP21、30がSD1、31はSD5、32・33がSD6、34～38はSD7、39がSD9、21・22、40～50は包含層出土である。21・22は珠洲焼の挿鉢である。21は焼成が甘く土師質で、22の内面の卸目は幅2cmの8本である。23は高杯脚部で中央部が若干膨らむ形状を呈する。24は土師器の底部で内面に乱雑なハケメが施される。外面はケズリと判断したがはっきりとは確認できなかった。25・26は底部糸切りの皿である。26は遺存度が低いために底径が縮小する可能性がある。25・26は58よりも新しく、34～38よりも古い印象を受けた。27は土師皿と考える。口縁端部はヨコナデにより器壁の厚みが減じる。28は土錘で灰黄色を呈する。29は甕である。遺存度が低いために口径は縮小する可能性がある。30は鉢で口縁に広めの段を持ち、尖底の底部を持つ。内面には赤彩痕を留める。時期は弥生時代後期～古墳時代前期と考える。31～33は高杯である。31は器壁が厚く、下から棒状のものを突っ込んだ痕跡が内面上半に確認できる。32の脚部は器壁の厚さを減じることなくまっすぐと下へ伸びており、裾部で緩く屈曲し接地する。内面の接合痕は棒状の工具で消去されたものと判断した。33の杯部内外面には横方向のハケが施され、脚部との境では接合痕が残る。脚部は外面に縦方向のミガキが施されており、若干膨らみつつ下へ伸びる。内面には約1cm幅の接合痕を残す。31～33は田嶋編年12・13群に収まるものとする。34～38は手づくねの土師皿で34が中皿、35が小皿となる。胎土の色調は34・35・37が黄褐色を基調とし、36・38は灰白色を基調とする。34は口縁端部と体部に計2段のナデが施されている。35は溝内の柱穴から出土しており、胎土や出土状況から34と同時期のものとする。したがって34～38は藤田編年Ⅱ期に収まるものと判断した。39は高台の形状から瓶の底部と考える。40は甕である。遺存度が低いために口径は縮小する可能性がある。器壁は脆く砂粒の大きなものが目立つ。41は高杯である。杯部との境は継ぎ足すようにして粘土が貼り付けられている。外面には縦方向のミガキが施され、3分

の2の範囲に煤が付着している。内面にある接合痕の消去は雑で裾部にはハケが残る。田嶋編年12・13群と判断した。42は有台杯で高台が歪む。43は須恵器の無台杯で体部が内湾気味に開く。田嶋編年VI 2期と考える。44～46は手づくねの土師皿である。44の口縁端部はヨコナデにより外反し、45は直線的に体部が立ち上がる。体部は歪むが胎土や出土状況から44・45は接合する可能性があり、その場合の口径は11.4cmで器高が2.8cmを測る。46は器高が低い。44～46は藤田編年II期に収まるが44・45はやや新しい様相を呈する。47・48は皿である。47は陶器の皿でロクロ痕が目立つ。48は陶器の皿で、蛇の目釉剥ぎ箇所以外は高台内も含めて内外面に銅緑釉が施されている。49は碗で陶胎染付けを模倣したものであり、見込みに目痕が残る。47～49は近世以降のものと判断した。50は須恵器の硯である。甕の体部片を転用したもので図中央の白抜き範囲に墨痕が薄く残っていた。内面のタタキが擦り減るほど使い込まれており遺跡近辺に識字層の存在を想定できる。

51～62は4区出土遺物である。51～57は4区中央の土器集中箇所出土、58がSK 2、59はP19、60～62が包含層出土である。51・52は口縁下端を突出させる山陰系の大型の壺である。51の体部は球胴形を呈し、頸部を強く屈曲させて口縁には段を持つ。口縁の作りがしっかりしており、ほぼ均一の器厚で端部に至る。体部は内外面ともに縦方向のハケ、外面肩部付近で横方向のハケが施されており、口・頸部は内外面ともにヨコナデが施される。内面全体が黒色化し、煤が付着していた。共伴した52～56の時期に近いものと判断したが、口縁の形状は古い印象を受ける。52は丸底で体部が長胴、頸部は直立気味に立ち上がり、器壁を減じることなく口縁部に至る。口縁の欠損が多く、元々あった有段の口縁がはがれてしまったものと判断した。体部外面は横方向のハケで肩部付近には縦方向のハケが施される。底部内面はナデ、体部内面下半が縦方向のハケで、上半はハケ後にナデが施される。口頸部は内外面とも一次調整のハケメを残しつつヨコナデが施されており、内面は底部から口縁に至るまで部分的に煤が付着していた。53は小型の壺である。球胴形の体部を呈し、外面にミガキ、内面には粗いハケが施されている。54～56は高杯である。54は外面に縦方向のミガキが施され、一部に赤彩痕を留める。脚部内面の接合痕は1～1.5cmの間隔で残存し、計5段の輪積みを確認した。接合痕は下部へいくにつれ棒状工具等のナデにより不明瞭となる。55の脚部内面の接合痕はナデにより消され、外面には一次調整と思われるケズリ痕を確認でき、ミガキは不明瞭であった。53と胎土が似る。56は裾部が強く屈曲して接地する。脚部内面の接合痕は見当たらず、上端付近でシボリメを確認できる。54と胎土が似る。51～56は田嶋編年の12・13群に収まるものと判断した。57は軽石である。下半部側面を打ち欠くことによって下端部を突出させようとしていたものと推定できる。用途はよくわからなかった。58・59は土師皿である。58の体部は直線的に斜め外方へ伸びており器壁が薄い。底部外面は糸切りで内面にはロクロ痕を明瞭に確認できる。藤田編年I期と判断した。59は手づくねで口縁端部は強くヨコナデされている。藤田編年II期と考える。60は甕で口縁が「く」の字を呈する。61は高杯で杯部が途中で屈曲して開く。摩滅が激しい。62は土師皿である。底部の器壁は厚く外面が糸切りである。58より新しい印象を受ける。

63～76は6区出土遺物である。63～74はSK 1・2、75・76が包含層出土である。63・64は甕である。63は須恵器で体部中位が若干張り、口縁は「く」の字状を呈する。体部外面が平行線文のタタキ後にカキメ、内面は同心円文のタタキ、口縁部内外にはナデが施される。64は土師器で長胴を呈し、口縁の括れが弱く端部に面を取る。外面には縦方向のハケ、内面にはハケ後にナデが施され、口縁内面には横方向のハケが残る。65は頸部の括れが弱く鉢とした。内外面にハケメが施され外面は斜方向、内面が横方向である。口縁端部にはナデが施され、体部下半内外面の一部に煤が付着する。66～73は無台杯である。66・67の体・底部境は丸みを持ち不明瞭で、口縁端部をつまんで外反させている。口径

は14cm弱で器高が4cmを測る。67・68は土師質である。69は外面底部が全体的に磨耗しており、その中央に径2cm前後の小穴様の欠損部を確認できる。70・71は体・底部の境にナデが入り平底状となる。体部は直線的に開き、口縁端部に丸みを帯びる。70は焼きが甘く、平成18年度調査の出土遺物17と接合する。71の底部内面は全面に自然釉がかかる。69～71は口径12cm前後、器高3.5cm前後を測る。66～71は田嶋編年II 3期と考える。72・73は体・底部の境が丸みを持ち不明瞭で、口縁端部をつまんで外反させており、器高も3cm前後と低い。74・75は有台杯である。74の高台は接地面に窪みがある嘴状を呈し、腰がやや張る。底部外面に墨痕に似た汚れが薄く残る。田嶋編年II 3期と考える。75の高台は方形を呈し、体部は深身で直線的に開く。76は土師皿である。体部を短く折り曲げて成形している。藤田編年II期と判断した。

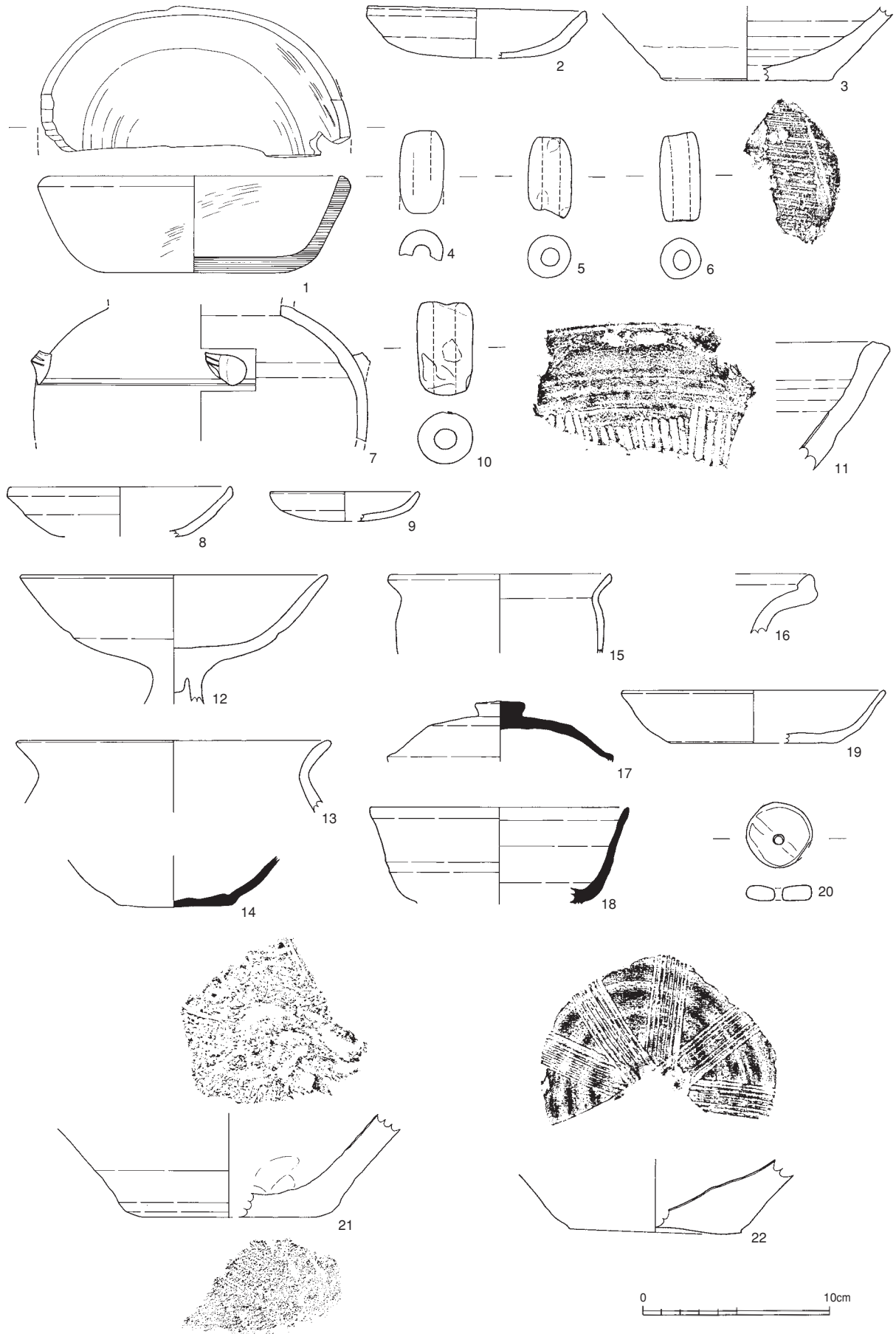
第5表 平成16年度調査 遺物観察表

報告番号	実測番号	出土地点	種類	器種	口径	底径	器高	色調内面	色調外面	胎土	焼成	調整内面	調整外面
1	木-1	1区 SD1	木器	鉢	16.0	11.0	5.2	-	-	-	-	-	-
2	D-38	1区 SD1	土師器	皿	11.8	9.6	2.7	淡黄	灰白	細砂多含	並	ヨコナデ	ヨコナデ
3	D-48	1区 SD1	珠洲	鉢	-	9.4	(4.1)	暗青灰	灰	粗砂、細砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ、糸切り
4	D-40	1区 SD1	土師器	土鍾	-	-	4.5	にぶい橙	橙	粗砂多含	良	-	ナデ
5	D-41	1区 SD1	土師器	土鍾	-	-	4.4	-	にぶい橙	粗砂少、細砂多含	並	-	ナデ
6	D-42	1区 SD1	土師器	土鍾	-	-	4.8	-	にぶい橙	粗砂少、細砂多含	並	-	ナデ
7	D-47	1区 SD2	白磁	壺	-	-	(7.4)	-	-	-	-	-	-
8	D-54	1区 SD2	土師器	皿	12.0	-	(2.7)	灰黄褐	黒褐	礫、粗砂含	良	ヨコナデ	ヨコナデ
9	D-51	1区 SD2	土師器	皿	8.0	7.0	1.6	浅黄橙	にぶい黄橙	細砂含	良	ヨコナデ	ヨコナデ
10	D-39	1区 SD2	土師器	土鍾	-	-	5.1	-	明赤褐	礫、粗砂多含	良	ナデ	ナデ
11	D-49	1区 表採	珠洲	鉢	-	-	7.0	灰	灰	細砂多含	良	ロクロナデ	ロクロナデ
12	D-34	2区 SD1	土師器	高杯	16.6	-	(7.0)	橙	橙	礫、粗砂多含	良	不明	不明
13	D-58	2区 SD2	土師器	甕	16.9	-	(3.9)	にぶい黄橙	にぶい黄褐	礫、粗砂、細砂含	良	ヨコナデ	不明
14	D-55	2区 P104	須恵器	杯	-	6.3	(2.8)	灰白	灰白	礫、粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ
15	D-52	2区東 遺構検出	土師器	甕	11.8	-	(4.3)	にぶい黄橙	にぶい黄褐	礫、粗砂多含	良	ヨコナデ	ヨコナデ
16	D-46	2区東 排水溝 包含層	土師器	鍋	-	-	4.5	にぶい黄橙	浅黄橙	粗砂、細砂含	並	不明	ヨコナデ
17	D-36	2区東 遺構検出 包含層	須恵器	杯蓋	-	-	(3.3)	灰黄	にぶい黄橙	粗砂、細砂含	並	ロクロナデ	ロクロナデ
18	D-57	2区東 遺構検出	須恵器	杯	14.0	-	(5.2)	灰白	灰白	礫、粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ
19	D-35	2区東 遺構検出	土師質	杯	14.2	9.4	2.9	橙～にぶい黄橙	橙～にぶい黄橙	細砂、粗砂多、赤色粒含	良	ロクロナデ	ロクロナデ
20	D-37	2区東 遺構検出	土師器	紡錘車	-	-	-	浅黄橙	灰白	粗砂含	良	-	-
21	D-18	3～4区 連結部 排土	珠洲	鉢	-	11.2	(5.7)	灰黄	橙～灰黄	細砂、粗砂多含	不良	ロクロナデ	ロクロナデ
22	D-13	3区南 包含層	珠洲	鉢	-	9.3	(4.1)	灰	灰白	礫、粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ
23	C-15	3区中 P-6	土師器	高杯	-	-	(5.0)	橙	橙	砂礫含	良	ナデまわし	ミガキ?
24	C-1	3区南 P-13	土師器	底部	-	6.4	(1.7)	黒褐	灰褐	礫、粗砂多含	良	ハケ	ケズリ、ナデ
25	D-3	3区南 P-17	土師器	皿	-	6.8	(1.9)	橙	橙	礫、粗砂、細砂、赤色粒含	良	ロクロナデ	ロクロナデ、糸切り
26	D-4	3区南 P-17	土師器	皿	-	6.2	(1.6)	にぶい橙	橙	細砂、赤色粒含	良	ロクロナデ	ロクロナデ、糸切り
27	C-2	3区南 P-19	土師器	皿	13.8	-	(2.4)	にぶい橙	にぶい橙	細砂粒、赤色粒含	良	ヨコナデ	ヨコナデ
28	C-3	3区南 P-21	土師器	土鍾	-	-	4.0	浅黄橙	灰黄	細砂、粗砂含	良	-	ナデ
29	C-4	3区南 P-21	弥生	甕	(18.6)	-	(2.6)	明褐灰	灰褐	細砂、粗砂含、赤色粒少含	良	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ
30	C-6	3区中 SD1	弥生	鉢	14.4	1.4	8.1	淡黄	浅黄橙	礫、粗砂、細砂含	並	ナデ	ナデ



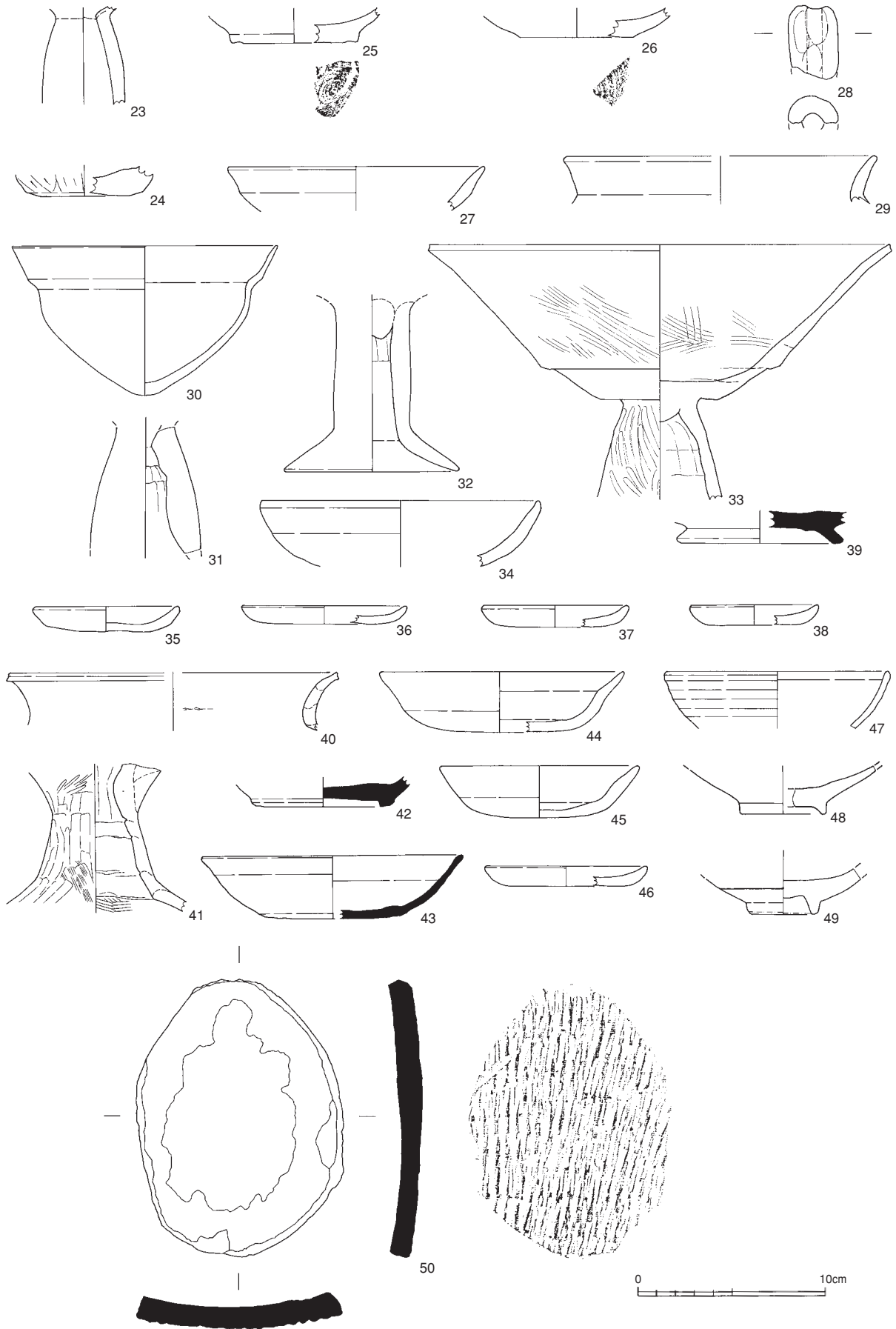
第4章 平成16年度調査の遺構と遺物

報告番号	実測番号	出土地点	種類	器種	口径	底径	器高	色調内面	色調外面	胎土	焼成	調整内面	調整外面
31	C-7	3区南 SD5	土師器	高杯	—	—	(6.8)	浅黄橙	浅黄橙	砂礫含	良	ナデまわし	不明
32	C-14	3区南 SD6	土師器	高杯	—	9.2	(8.8)	浅黄橙	浅黄橙	砂礫、焼土塊含	良	ナデまわし	不明
33	C-5	3区南 SD6 包含層	土師器	高杯	25.0	—	(13.8)	明褐灰	にぶい黄橙	礫、粗砂、赤色粒含	並	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ、ミガキ
34	D-6	3区南 SD7	土師器	皿	15.0	—	(3.6)	灰黄褐	灰黄褐	細砂、粗砂、赤色粒含	良	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ
35	D-5	3区南 SD7内柱穴	土師器	皿	7.7	4.1	1.5	褐灰	黄灰	礫少、細砂含	良	ヨコナデ	ヨコナデ
36	D-7	3区南 SD7	土師器	皿	8.8	6.0	1.0	灰白	灰白	細砂、極細砂粒含	良	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ
37	D-8	3区南 SD7	土師器	皿	7.8	6.6	1.2	灰黄褐	褐灰	細砂、粗砂含	良	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ
38	D-9	3区南 SD7	土師器	皿	6.8	5.0	1.1	灰白	淡黄	細砂含	良	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ
39	D-10	3区南 SD9	須恵器	瓶	—	9.0	(1.8)	灰	緑灰	礫、粗砂、細砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ
40	C-8	3区中 包含層	弥生	甕	17.6	—	(3.1)	橙	橙	礫目立つ	良	ヨコナデ	ヨコナデ
41	C-9	3区中 包含層	土師器	高杯	—	—	(8.6)	にぶい橙	にぶい橙	砂粒含	良	ナデまわし、ハケ	ケズリ、ミガキ
42	D-21	3区南 包含層	須恵器	杯	—	7.7	(1.6)	灰	灰	細砂、粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ
43	D-14	3区南 包含層	須恵器	杯	14.1	8.0	3.4	灰	灰	細砂、粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ
44	D-15	3区南 包含層	土師器	皿	13.1	—	3.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	極細粒含	良	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ
45	D-16	3区南 包含層	土師器	皿	10.6	—	2.8	にぶい黄橙	にぶい黄橙	極細粒含	良	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ
46	D-12	3区南 包含層	土師器	皿	8.8	6.6	1.1	灰白	淡黄	細砂、極細砂粒含	並	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ
47	D-11	3区北 壁立 包含層	陶器	椀	12.0	—	(3.1)	—	—	—	—	—	—
48	D-22	3区南 包含層	陶器	皿	—	4.6	(2.6)	—	—	—	—	—	—
49	D-17	3～4区 連結部 排土	磁器	椀	—	3.2	(2.5)	—	—	—	—	—	—
50	D-19	3～4区 連結部 溝	須恵器	転用碗	—	—	—	黄灰	灰黄	細砂、粗砂含	良	タタキ	タタキ
51	C-16	4区 土器集中④	土師器	壺	27.0	—	(52.3)	黒褐	灰白	礫、細砂、粗砂、赤色粒含	良	ヨコナデ、ナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ
52	C-17	4区 土器集中⑦	土師器	壺	—	—	58.3	にぶい褐	浅黄橙	砂粒、赤色粒含	良	ハケ、ナデ、ヨコナデ	ハケ、ナデ、ヨコナデ
53	C-12	4区 土器集中⑥	土師器	壺	—	—	(7.1)	にぶい黄橙	浅黄橙	砂粒、焼土塊含	良	ハケ、ナデ	ミガキ
54	C-13	4区 土器集中⑧	土師器	高杯	—	—	(6.1)	浅黄橙	浅黄橙	砂粒、赤色粒含	良	ナデまわし	ミガキ
55	D-24	4区 土器集中⑤	土師器	高杯	—	—	(7.8)	浅黄橙	淡橙	極細粒含	良	ナデまわし	ミガキ
56	C-11	4区 土器集中①	土師器	高杯	—	13.4	(9.2)	浅黄橙	浅黄橙	砂礫、焼土塊含	良	不明	不明
57	D-59	4区 土器集中 土層	軽石	—	—	—	(7.8)	—	—	—	—	—	—
58	D-1	4区 SK2	土師器	皿	8.8	4.4	2.3	浅黄橙	浅黄橙	礫少、細砂、粗砂、赤色粒含	良	ロクロナデ	ロクロナデ、糸切り
59	D-2	4区 P-19	土師器	皿	9.5	—	1.8	橙	にぶい橙	細砂、赤色粒含	良	ヨコナデ	ヨコナデ
60	C-10	4区 包含層	土師器	甕	16.0	—	(5.4)	浅黄橙	浅黄橙	砂粒、焼土塊含	良	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ
61	D-23	4区 包含層	土師器	高杯	15.8	—	3.7	浅黄橙	浅黄橙	礫、粗砂、細砂含	並	ナデ	ナデ
62	D-20	4区 包含層	土師器	皿	8.3	5.5	2.1	橙	橙	極細粒含	良	ロクロナデ	ロクロナデ、糸切り
63	D-44	6区 SK1・2	須恵器	甕	18.4	—	(27.4)	青灰	青灰	礫少、粗砂、細砂含	良	ロクロナデ、タタキ	ロクロナデ、タタキ
64	D-32	6区 SK1・2	土師器	甕	22.2	—	(17.6)	にぶい褐	にぶい褐	礫少、粗砂、細砂多含	良	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ
65	D-33	6区 SK1・2	土師器	鉢	24.6	—	(18.8)	にぶい黄橙	灰黄褐	礫、粗砂多含	良	ハケ	ハケ
66	D-28	6区 SK1・2	須恵器	杯	13.8	8.8	4.0	暗灰黄	灰褐	礫、粗砂、細砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ
67	D-26	6区 SK1・2	須恵器	杯	13.6	8.9	4.1	灰白	灰白	礫少、粗砂、細砂含	不良	ロクロナデ	ロクロナデ
68	D-27	6区 SK1・2	土師器	杯	14.3	10.3	3.6	浅黄橙	浅黄橙	礫、粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ
69	D-29	6区 SK1・2	須恵器	杯	12.3	7.9	3.4	灰黄褐	灰褐	礫、粗砂、細砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ
70	D-31	6区 SK1・2	須恵器	杯	12.4	7.8	3.4	灰黄	にぶい褐	礫、粗砂、細砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ
71	D-30	6区 SK1・2	須恵器	杯	11.8	7.1	3.7	灰	灰	礫、粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ
72	D-56	6区 SK1・2	須恵器	杯	14.4	9.4	2.8	灰白	灰白	粗砂、細砂含	不良	ロクロナデ	ロクロナデ
73	D-53	6区 SK1・2	須恵器	杯	13.2	7.4	3.0	灰黄褐	にぶい黄橙	礫、粗砂、細砂含	並	ロクロナデ	ロクロナデ
74	D-45	6区 SK1・2	須恵器	杯	—	9.0	(3.9)	灰白	灰	礫、粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ
75	D-43	表採	須恵器	杯	15.2	9.0	6.8	灰	灰	礫、粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ
76	D-25	6区 包含層	土師器	皿	8.5	—	1.5	褐灰	灰黄	礫、粗砂含	良	ヨコナデ	ヨコナデ

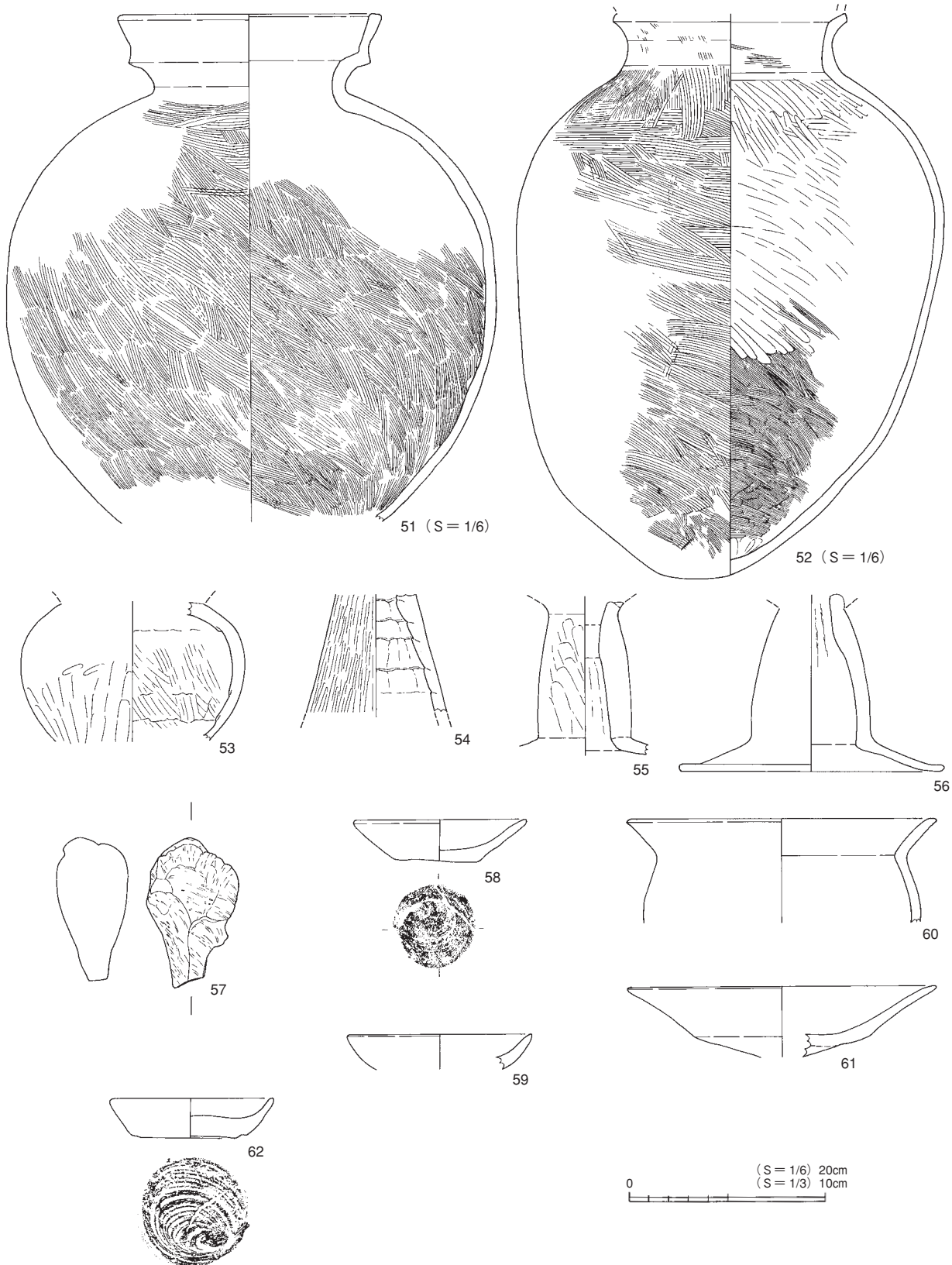


第27図 平成16年度調査 1～3区出土遺物実測図 (S=1/3)

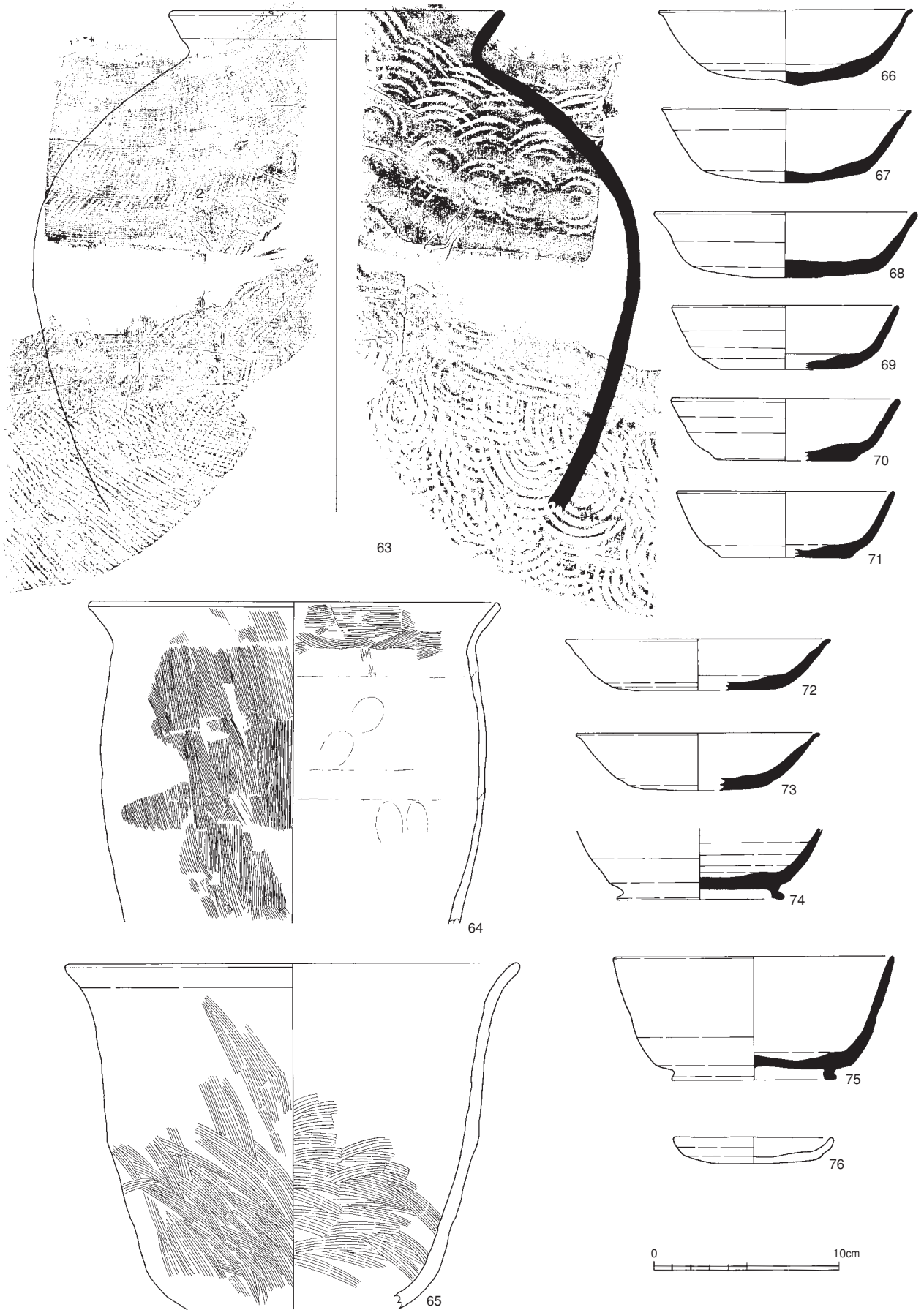




第28図 平成16年度調査 3・4区出土遺物実測図 (S=1/3)



第29図 平成16年度調査 4区出土遺物実測図 (S=1/3・1/6)



第30図 平成16年度調査 6区出土遺物実測図 (S=1/3)

## 第5章 平成18年度調査の遺構と遺物

### 第1節 遺 構

検出した掘立柱建物・井戸と、若干補足を必要とする土坑・溝・小穴について記した。その他の遺構については、遺構計測表（第6～8表）にまとめているので参照されたい。規模は長軸（長辺）×短軸（短辺）で表し、柱穴など同一遺構内で深さに段差が見られるものは、両方ともに記載した。また、地山に複数の層位が認められるものは、基準（L）からの下降値で断面図上に表している。

#### SB1（第31・33図）

W5区に位置する。2間×2間程度の規模と考えられる。柱間寸法は南北方向には約2.0mであるが、東西方向では2.0～2.4mで、東側が約40cm長い。柱穴は深さ約12cmと浅く、長軸が55～76cmの隅丸長方形や楕円形を呈する。遺物の出土はみられず、時期は不明である。

#### SB2（第31・34図）

W6区に位置する。南側でSK1と切りあっているが、3間×2間程度の規模と考えられる、総柱の掘立柱建物である。柱間寸法は南北方向には約1.6mであるが、東西方向では2.0～2.5mで、東側が約50cm長い。側柱の柱穴はP1・P2・P3・P23・P27などからなり、直径58～66cmの円形を呈するものが多く、深さはP2で床面が礫層に達しているため26cmとやや浅いが、他の柱穴では34～48cmを測る。中央の柱穴は直径32～38cm、深さ10～18cmと小さく浅い。古代に属すると考えられるが、遺存状態の良好な遺物の出土に乏しく、詳細な時期については不明である。

#### SB3・SB4（第32・35図）

N区に位置する。2間×2間程度の規模と考えられる。柱間寸法は2.0m～2.5mで、SB1・2とは逆に、東西方向で西側が約50cm長く、南北方向でも北側が30～50cm長い。SB3の柱穴にはP32・P44・P45などがみられ、SB4の柱穴にはP32・P46などがみられる。ともにP30と切りあっており、SB4→P30→SB3（P44）の順に変遷していったことが確認できる。柱穴の形状は、直径約25cmの円形または長軸30cm前後の楕円形と考えられ、深さは10～50cmとばらつきがみられる。ともに北東の柱穴（P45・P46）から土師器皿（第41図7・6）が完形で出土しており、12世紀前半頃にSB4からSB3へ、建て替えを行ったと考えられる。

#### SB5（第32・35図）

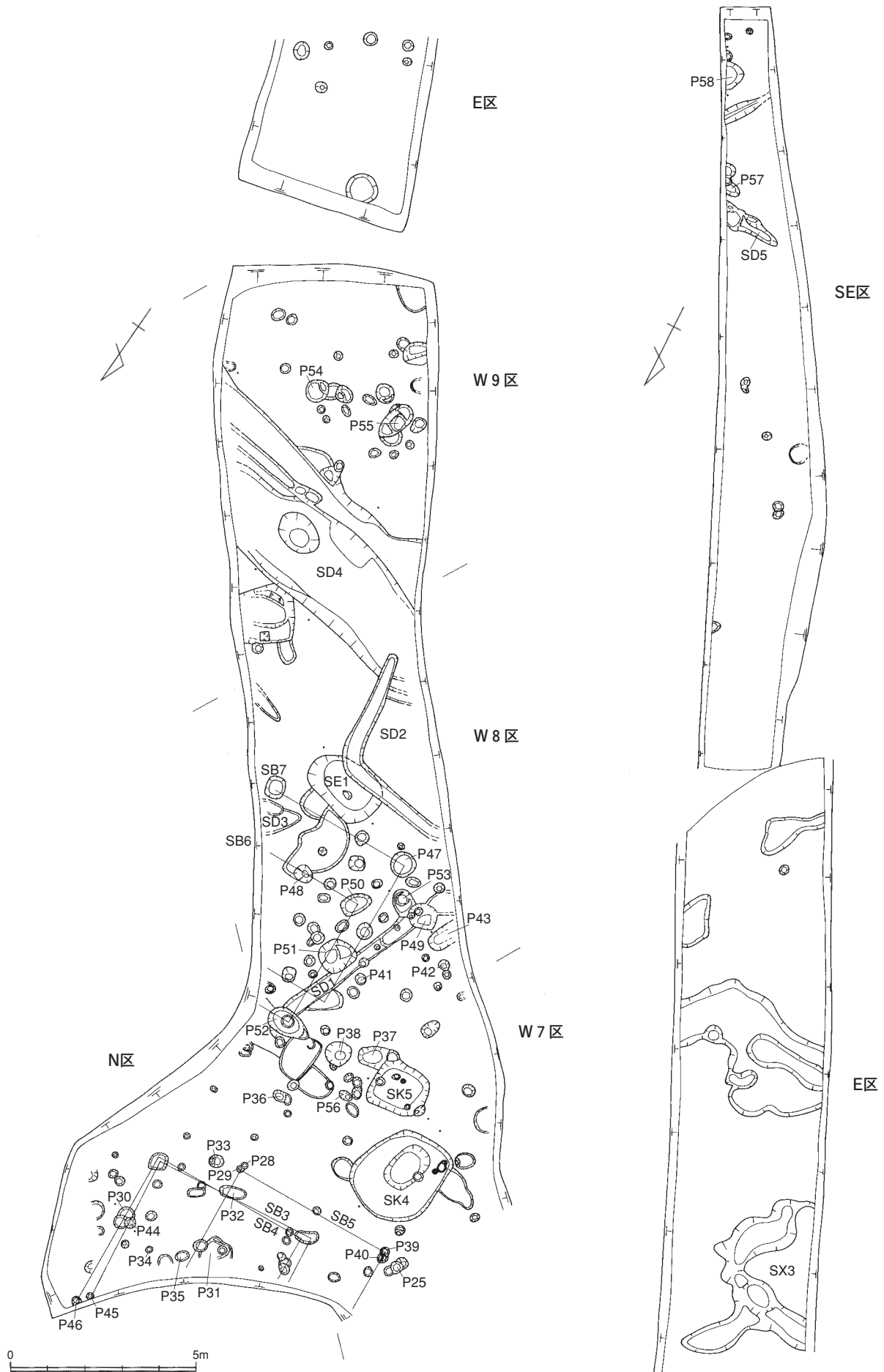
N区に位置する。2間×2間程度の規模と考えられる。柱間寸法は2.2～2.3mである。柱穴はP29・P39などからなる。他の掘立柱建物と比べて規模はそれほど変わらないものの、柱穴は直径25～40cmと小さく、深さも10～25cmと浅い。おおむね円形を呈する。遺物の出土がみられず時期は不明であるが、柱穴P29は、14世紀後半～15世紀前半の土師器皿が出土したP28に切られており、それ以前のものと考えられる。

#### SB6（第32・36図）

W8区に位置する。2間×2間程度の規模と考えられる。柱間寸法は東西方向では約1.6mであるが、南北方向では1.6～2.1mと北側が約50cm長い。柱穴はP48・P50・P51・P52で構成され、長軸が86～108cmの楕円形を呈する。深さ約30cmを測り、多くは礫層まで達している。P52の下層には礫層が見られず、さらに約30cm深く掘り込んでいる。P52から13世紀頃の土師器皿（第41図3）が出土している。



第31図 平成18年度調査 平面図① (S=1/150)



第32図 平成18年度調査 平面図② (S=1/150)



**SB 7 (第32・36図)**

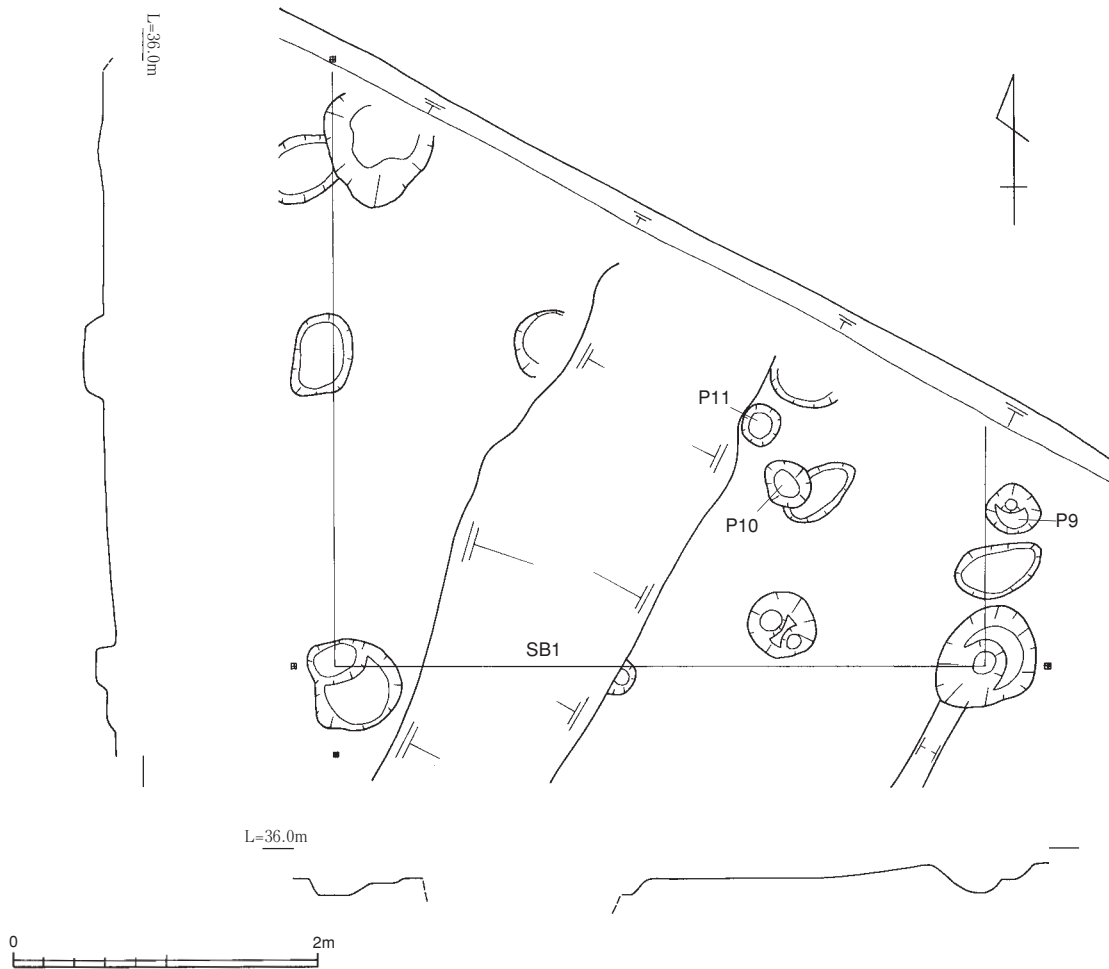
W 8 区に位置する。2 間× 2 間程度の規模と考えられる。柱間寸法は約2.2mを測る。柱穴はP47などからなり、直径46～66cmの円形や、長辺約62cmの隅丸長方形を呈し、深さ30～40cmを測る。遺物の出土がみられず、時期は不明であるが、SD 1 との切り合い関係から、SB 7 →SD 1 →SB 6 の順に変遷していったことが確認できた。

**SK 1 (第31・37図)**

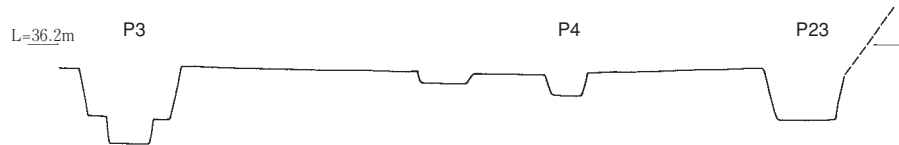
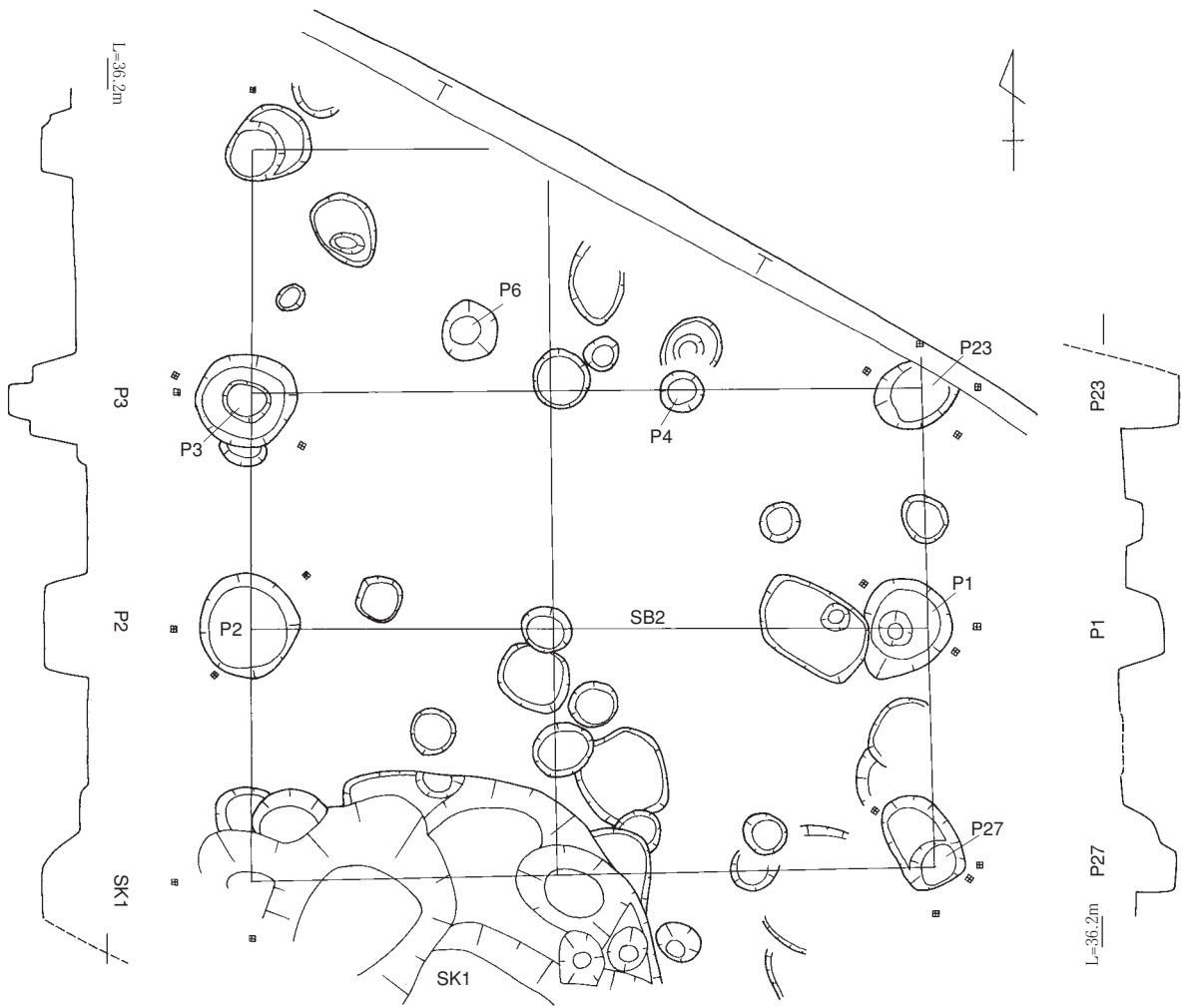
W 6 区に位置する。平成16年度の調査で南側が検出されており、今回の調査で北側を検出した。幅約3.5mの円形を呈するが、楕円形の土坑 3 基と複数の小穴が切り合っている。内、壁面西側と北側土坑にかかる小穴はSB 2 の柱穴と考えられ、北側の小穴は長軸74cm、短軸54cmの楕円形を呈し、深さ29.2cmを測る。東側の土坑からは須恵器の坏（第41図19）が、西側の土坑からは土師器の甕と須恵器の坏（第41図12・17）が出土しており、8世紀前葉頃と考えられる。

**SK 2 (第31・37図)**

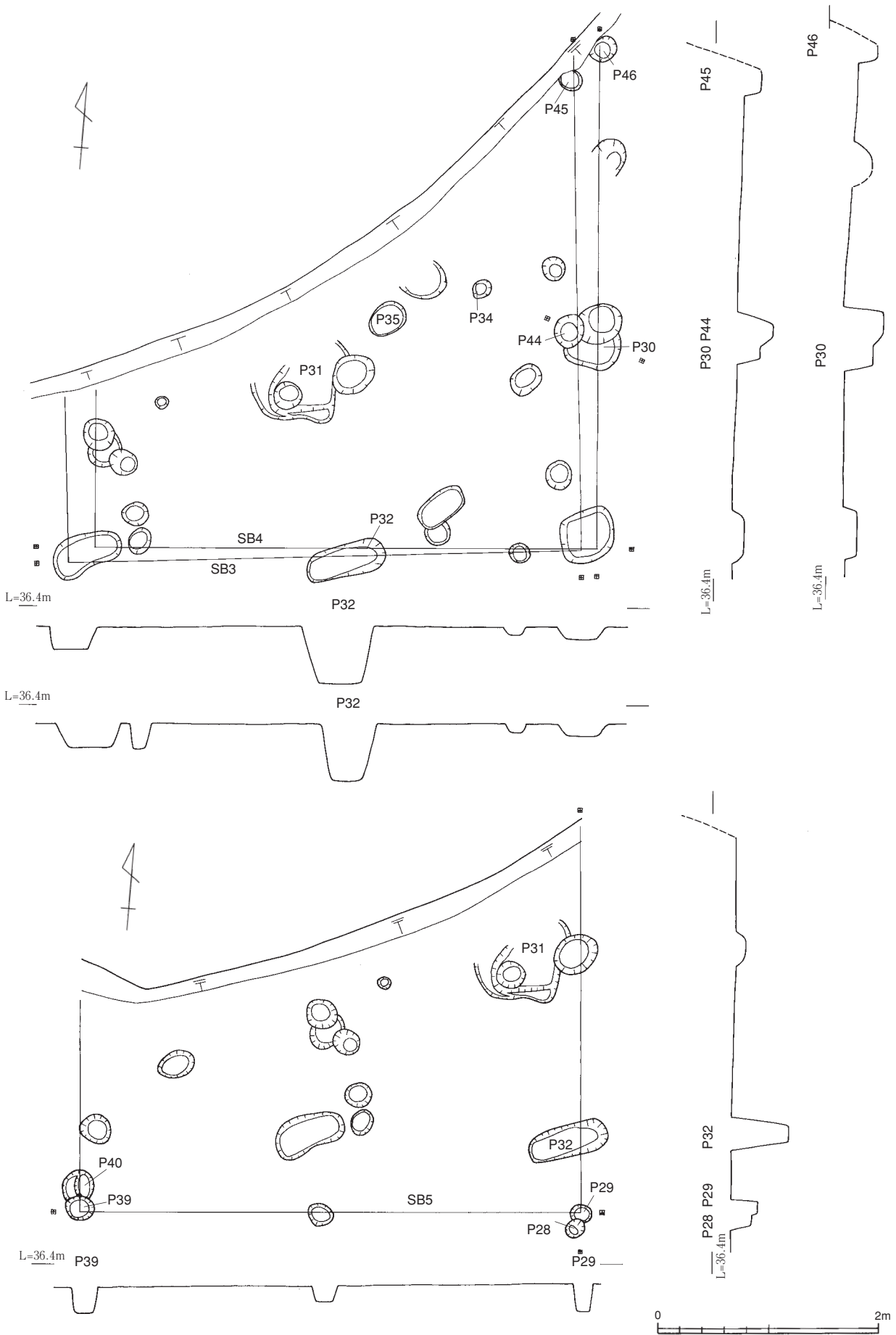
W 4 区に位置する。長軸約1.7mの楕円形を呈する。深さ約31.3cmを測る。中央付近から長さ約24cm、厚さ約10cmの自然石が出土した。また、土師器の高坏（第41図14）が出土しており、古墳時代中期頃と考えられる。



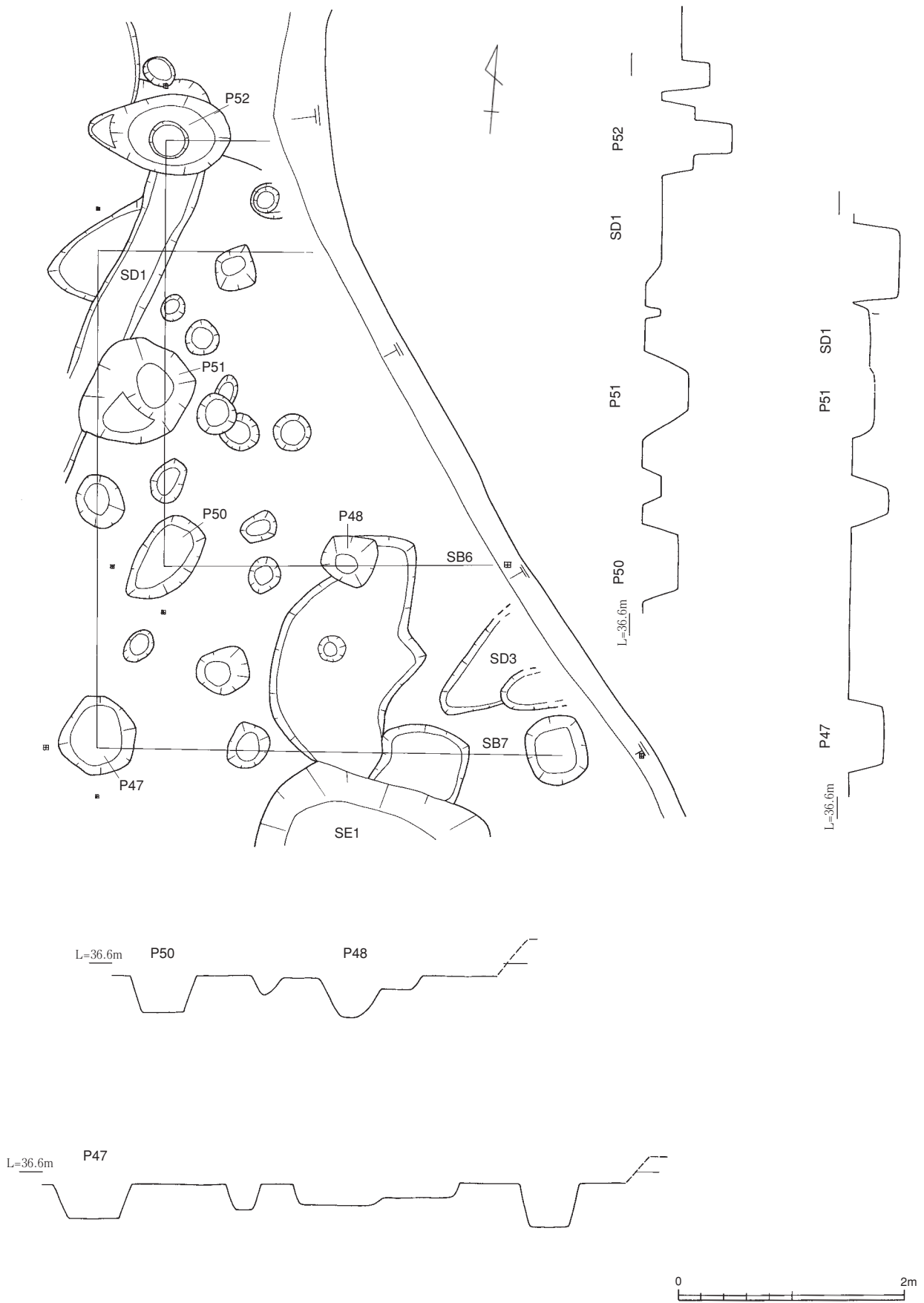
第33図 平成18年度調査 SB 1 平面図・断面図 (S=1/50)



第34図 平成18年度調査 SB2平面図・断面図 (S=1/50)



第35図 平成18年度調査 SB3～5平面図・断面図 (S=1/50)



第36図 平成18年度調査 SB6・7 平面図・断面図 (S=1/50)

**SK 3 (第31図)**

W 6 区に位置する。一辺が約1.5mの隅丸方形を呈し、深さ13.5cmを測る。西側へ10~20cm、深さ約2cmと浅く掘り広げられている。北東部で長軸約35cmの楕円形の小穴が1基検出された。深さは土坑の床面から東側で約7cm、西側で約12cmを測る。土師器片が出土しているが、時期は不明である。

**SK 4 (第32・37図)**

W 7 区に位置する。長辺約2.6m、短辺約2.3mのやや北側が膨らんだ隅丸方形を呈する。深さ約14.2cmを測る。中央やや南よりに長辺約134cm、短辺約78cmの隅丸長方形の土坑を、さらに約22.5cm深く掘り込んでいる。東西を現代の暗渠によって分断されている。土師器片が出土しているが、時期は不明である。

**SK 5 (第32・37図)**

W 7 区に位置する。長辺約1.5m、短辺約1.3mの隅丸方形を呈し、深さ約17.2cmを測る。中央東側で、直径約10cmの柱根の残る柱穴に切られる。柱根の下層からは、長さ12cm、厚さ6cmの礫が出土した。土師器片が出土しているが、時期は不明である。

**SD 1 (第32図)**

W 8 区に位置する。幅約40cm、深さ約15.2cmを測り、北南方向に走る。北側でP52に、南側でP49・P53に切られるが、4.5m程度の長さと考えられる。時期は不明であるが、周辺遺構との切り合い関係からSB7→SD1→SB6の順に変遷していったと考えられる。

**SD 2 (第32図)**

W 8 区に位置する。SD 4 から北へ約2.8m走った後、ほぼ直角に西へ折れる。幅約45cm、深さ約13.6cmを測る。周辺の掘立柱建物と軸をほぼ合わせており、区画溝と考えられる。遺物の出土はみられず、時期は不明である。

**SD 4 (第32・38図)**

W 8・9 区に位置する。東西方向に流れる。幅約3.1m、深さ約43.1cmを測る。南岸は浅い地点で礫層に達している。須恵器片を中心に、土師器片・灰釉陶器片が出土している。

**SD 5 (第32図)**

SE区に位置する。東西方向に流れる。幅約32cm、深さは東側で約9cmを測るが、西側では約4cmと浅い。北宋銭「熙寧元寶」(第42図35)が1枚出土しており、11世紀中頃以降と考えられる。

**SE 1 (第32・39図)**

W 8 区に位置する。長軸約2.1m、短軸約1.5mの楕円形を呈し、深さ約58cmを測る。床面は礫層に達しており、常に水が湧き出している。床面から長さ約35cmの石が2個体出土し、内南側の1個に煤が付着していた。SD 2 に切られる。土師器片・須恵器片が出土しているが、時期は不明である。

**P 1 (第31・34・39図)**

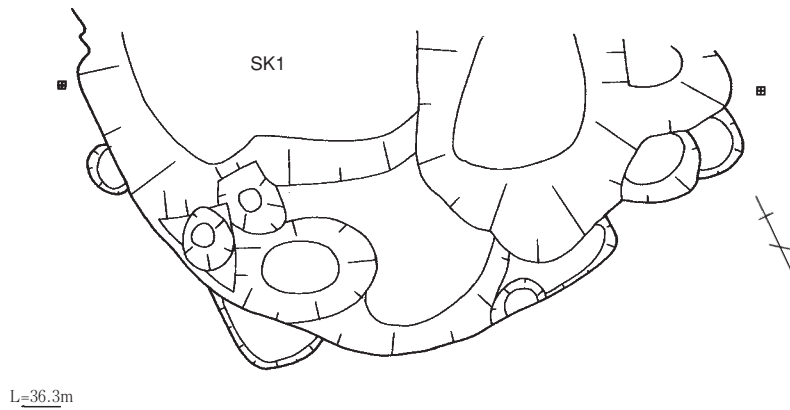
W 6 区に位置する。SB 2 の柱穴である。直径約62cm、深さ約29.2cmを測り、円形を呈する。やや西よりに約8.5cm深く掘り込んで、直径14cm程度の柱を据えていたと考えられる。土師器片・須恵器片が出土している。

**P 2 (第31・34・39図)**

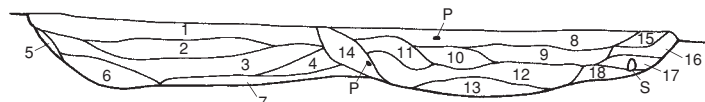
W 6 区に位置する。SB 2 の柱穴である。直径約70cm、深さ約29cmを測り、円形を呈する。床面は礫層に達しており、それ以上の掘削が困難であったのか、他のSB2の柱穴に比べて浅い。

**P 3 (第31・34・39図)**

W 6 区に位置する。SB 2 の柱穴である。直径約60cm、深さ約36.8cmを測り、円形を呈する。中央

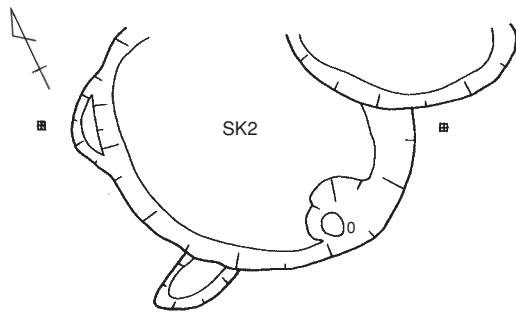


L=36.3m

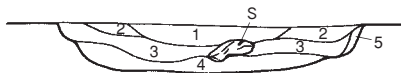


SK 1

- |                               |                              |                               |
|-------------------------------|------------------------------|-------------------------------|
| 1 黑色粘質土 (粘性大。)                | 10 黑色粘質土 (粘性小、やや硬。地山①少し混じる。) | 地山①(L~-49cm) にぶい黄褐色粘質土 (粘性小。) |
| 2 黑色粘質土 (粘性中、やや軟。)            | 11 黑色粘質土 (粘性中。炭含む。)          | 地山②(-49cm~) 灰オリーブ色シルト         |
| 3 黑色粘質土 (粘性小。地山②少し、焼土混じる。)    | 12 黑色粘質土 (粘性小。明褐色ブロック少し混じる。) |                               |
| 4 黑色粘質土 (粘性小、軟。地山②少し、焼土混じる。)  | 13 黑色シルト (粘性小。地山②多く混じる。)     |                               |
| 5 掘り過ぎ                        | 14 黑色粘質土 (粘性大、やや軟。土器片混じる。)   |                               |
| 6 黑色粘質土 (粘性小、軟。地山②多く混じる。)     | 15 黒褐色粘質土 (粘性大。地山①大量混じる。)    |                               |
| 7 黑色粘質土 (粘性小、軟。地山②大量混じる。)     | 16 黑色粘質土 (粘性小、軟。地山①ごく少量混じる。) |                               |
| 8 黑色粘質土 (粘性大。地山①ごく少量、土器片混じる。) | 17 黑色粘質土 (粘性小。地山①少し、礫混じる。)   |                               |
| 9 黑色粘質土 (粘性小、やや軟。地山①少し混じる。)   | 18 黒褐色粘質土 (粘性小、軟。地山①大量混じる。)  |                               |

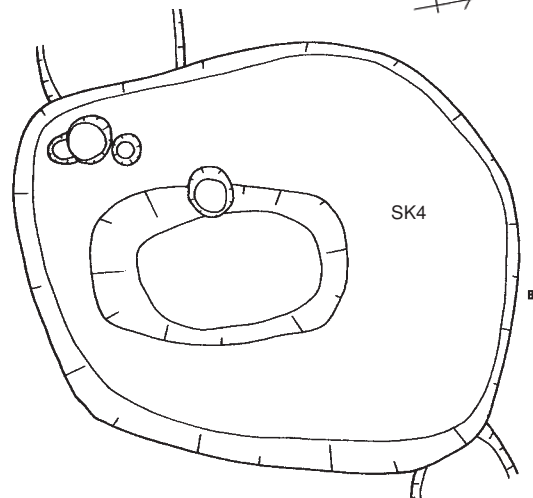


L=35.7m

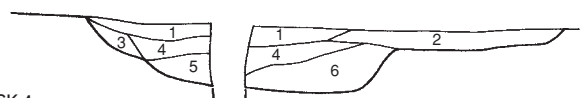


SK 2

- 1 黑色粘質土 (粘性大。2層土少し、土器片・炭混じる。)
  - 2 黑色粘質土 (粘性大。土器片混じる。)
  - 3 黑色粘質土 (粘性大、やや軟。炭・土器片・大礫混じる。)
  - 4 黑色粘質土 (粘性大、軟。地山、炭少し混じる。)
  - 5 地山 (3層土大量混じる。)
- 地山 暗灰黄色シルト

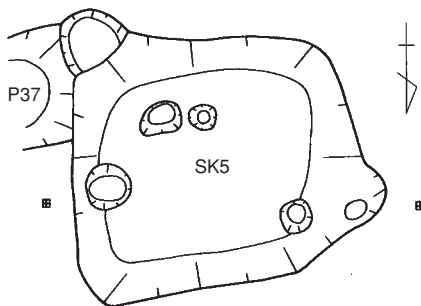


L=36.4m

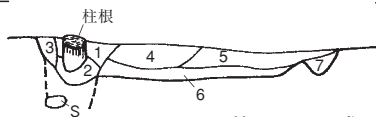


SK 4

- 1 黑色粘質土 (粘性大。地山①②ごく少量混じる。)
  - 2 黑色粘質土 (粘性大、硬。地山①大量・地山②少し、礫・木片混る。)
  - 3 黑色粘質土 (粘性大。地山①②少し、礫混じる。)
  - 4 黑色粘質土 (粘性大、軟。地山②ごく少量混じる。)
  - 5 黑色粘質土 (粘性中、軟。地山②少し混じる。)
  - 6 黑色粘質土 (粘性中、軟。地山②大量、炭・礫混じる。)
- 地山①(L~-30cm) にぶい黄褐色粘質土  
地山②(-30cm~) 灰オリーブ色砂質シルト

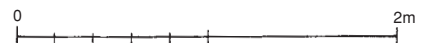


L=36.5m



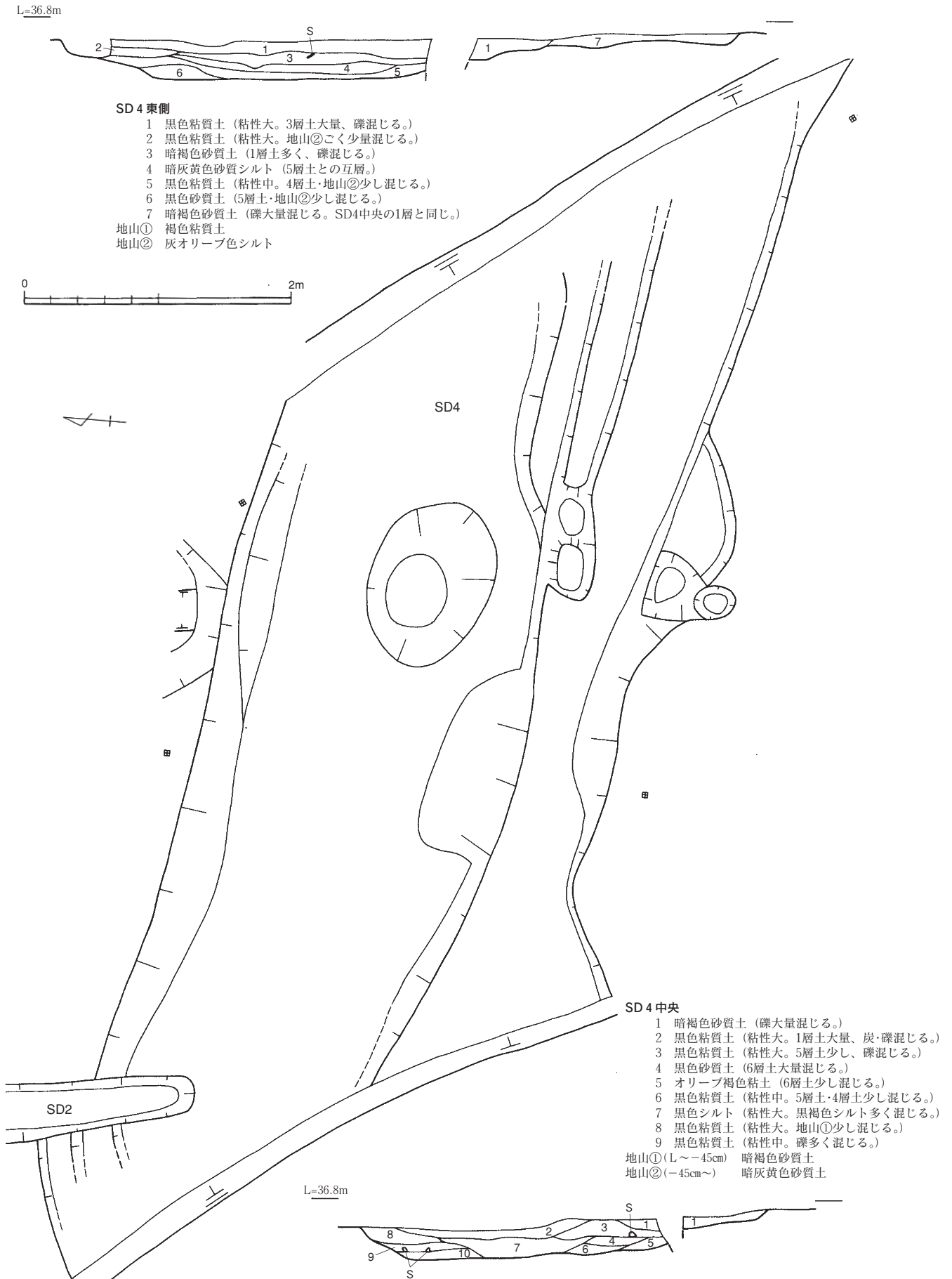
SK 5

- 1 黑色粘質土 (粘性大。地山②ごく少量混じる。)
  - 2 黑色粘質土 (粘性中、軟。地山②大量混じる。)
  - 3 黑色粘質土 (粘性大。地山①少し混じる。)
  - 4 黑色粘質土 (粘性大、硬。地山③多く混じる。)
  - 5 黑色粘質土 (粘性大。地山③少し混じる。)
  - 6 黑色粘質土 (粘性中、軟。地山①多く、地山③少し混じる。)
  - 7 黑色粘質土 (粘性大。地山③大量混じる。)
- 地山① 灰オリーブ色シルト  
地山②(4層周辺) 黒褐色砂質土  
地山③(7層周辺) 暗褐色砂質土



第37図 平成18年度調査 遺構平面図・断面図 (土坑) (S=1/40)





第38図 平成18年度調査 遺構平面図・断面図 (溝) (S=1/40)

部を約15.5cm深く掘り込んで、直径16cm程度の柱を据えていたと考えられる。土層断面に柱の抜き取り痕が確認できた。

#### **P 9 (第31図)**

W 5 区に位置する。直径約34cm、深さ約34.6cmを測る。円形を呈する。北側がさらに約3cm深い。土師器の有台椀(第41図5)が出土している。11世紀前半頃と考えられる。

#### **P14 (第31・39図)**

W 4 区に位置する。長軸約108cm、短軸約92cmの北側が膨らんだ楕円形を呈する。深さ約19.6cmを測る。遺構検出面直下から高坏(第41図15)がほぼ完形で、また床面近くから甕(第41図10)が出土している。古墳時代後期頃と考えられる。

#### **P16・P17 (第31・40図)**

W 4 区に位置する。P16は直径約1.1mの円形を呈し、深さ約17.7cmを測る。P17はP16の約1m東側に位置し、長軸40cm、短軸24cmの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。P16の中央床面から出土した土師器の皿(第41図2)と、P17の覆土から出土した土器片が接合した。11世紀前半頃と考えられる。

#### **P23 (第31・34・40図)**

W 6 区に位置する。SB2の柱穴である。調査区の北壁にかかり、全体を検出できなかったが、直径約45cmの円形を呈すると考えられる。深さ約35.5cmを測る。

#### **P27 (第31・34・40図)**

W 6 区に位置する。SB 2 の柱穴である。長軸約58cm、短軸約44cmの楕円形を呈する。深さ約26cmを測る。南西よりに約8cm深く掘り込んで、直径18cm程度の柱を据えていたと考えられる。

#### **P28・P29 (第32・35図)**

N区に位置する。P28は長軸20cmの楕円形を呈し、深さ19.1cmを測る。油煤痕が付着した14世紀後半～15世紀前半の土師器皿が出土している。P29はSB 5 の柱穴である。直径約20cm、深さ26cmを測り、円形を呈する。P29→P28の順に変遷している。

#### **P30・P44 (第32・35・40図)**

N区に位置する。P30は長軸約50cmの楕円形を呈すると考えられ、深さ約20cmを測る。P44はSB 3 の柱穴である。直径約30cmの円形を呈し、深さ約35cmを測る。土層断面の観察により、共にSB 4 の柱穴を切っていることが確認でき、SB 4 →P30→SB 3 の順に変遷していったと考えられる。

#### **P32 (第32・35図)**

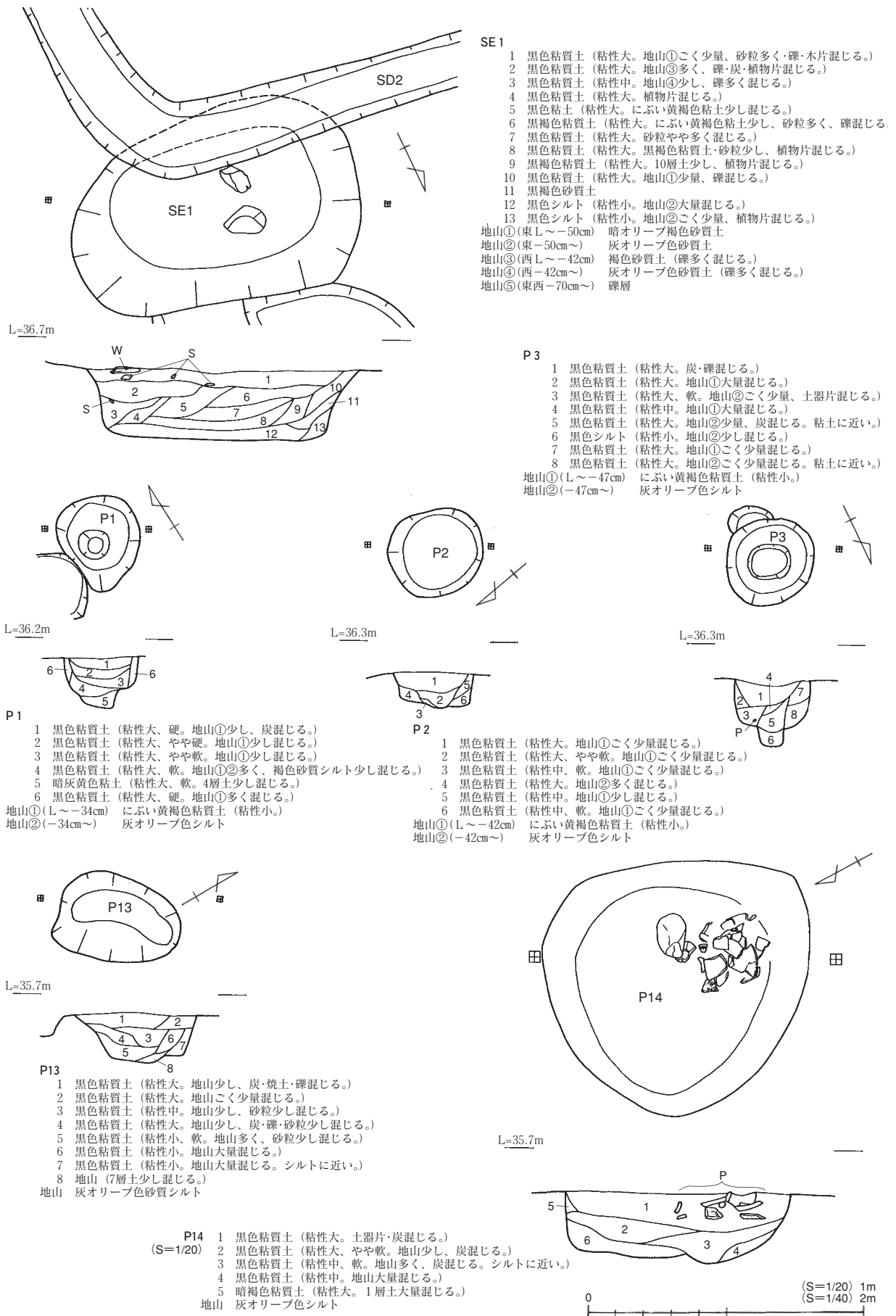
N区に位置する。長辺約74cm、短辺約30cmの隅丸長方形を呈する。深さ約54cmを測るが、掘りすぎの可能性もある。大きさ・深さ共に似通った柱穴を持つSB 3・4の柱穴が、東西に切りあっているため、長方形を呈したものと考えられる。

#### **P33 (第32図)**

N区に位置する。直径約37cm、深さ約16cmを測り、円形を呈する。東側の床面をさらに約5cm深く掘り込んでいる。遺構検出面から須恵器の蓋(第42図24)が出土しており、8世紀末頃と考えられる。

#### **P39・P40 (第32・35図)**

W 7 区に位置する。P39はSB 5 の柱穴である。直径約25cm、深さ約24cmを測り、円形を呈する。P40は長軸約30cmの楕円形、深さ約20cmを測り、東側をさらに5cm深く掘りこんでいる。ともに遺物の出土はみられず時期は不明であるが、P39がP40を切っており、P40の後にSB 5 が建てられたと考えられる。



第39図 平成18年度調査 遺構平面図・断面図 (井戸・小穴①) (S=1/20・1/40)

**P41 (第32図)**

W8区に位置する。直径約34cm、深さ約14cmを測り、円形を呈する。土師器の椀(第41図1)が出土しており、11世紀前半頃と考えられる。

**P43 (第32図)**

W8区に位置する。調査区の南壁にかかっているが、直径約60cm、深さ約35cmの円形を呈すると考えられる。土師器の皿(第41図4)が出土しており、13世紀頃と考えられる。

**P45 (第32・35図)**

N区に位置する。SB4の柱穴である。直径約25cm、深さ約17cmを測り、円形を呈する。遺構検出面直下で土師器皿(第41図7)が出土しており、12世紀前半頃と考えられる。

**P46 (第32・35図)**

N区に位置する。SB3の柱穴である。直径約25cm、深さ約16cmを測り、円形を呈する。遺構検出面直下で土師器皿(第41図6)が出土しており、12世紀前半頃と考えられる。

**P47 (第32・36図)**

W8区に位置する。SB7の柱穴である。直径約65cmの歪な円形を呈する。深さ約40cmを測り、礫層に達している。

**P48 (第32・36図)**

W8区に位置する。SB6の柱穴である。長軸約56cm、短軸約40cmの楕円形を呈する。深さ約35cmを測り、礫層に達している。床面から長さ約5cmの礫が出土した。

**P49 (第32図)**

W8区に位置する。長辺約70cm、短辺約60cmの隅丸方形を呈し、深さ約33cmを測る。遺構内の小穴2基・P53・SD1など、周辺の遺構全てを切っている。

**P50 (第32・36図)**

W8区に位置する。SB6の柱穴である。長軸約65cm、短軸約50cmの楕円形を呈する。深さ約30cmを測り、礫層に達している。

**P51 (第32・36図)**

W8区に位置する。SB6の柱穴である。長軸約110cm、短軸約92cmの楕円形を呈する。北東側が深くなっており、深さ約38cmを測る。

**P52 (第32・36図)**

W8区に位置する。SB6の柱穴である。長軸約110cm、短軸約70cmの楕円形を呈し、深さ約30cmを測る。さらに中央を約30cm掘り込んで、直径35cm程度の柱を据えていたと考えられる。土師器の皿(第41図3)が出土しており、13世紀頃と考えられる。

**P53 (第32・40図)**

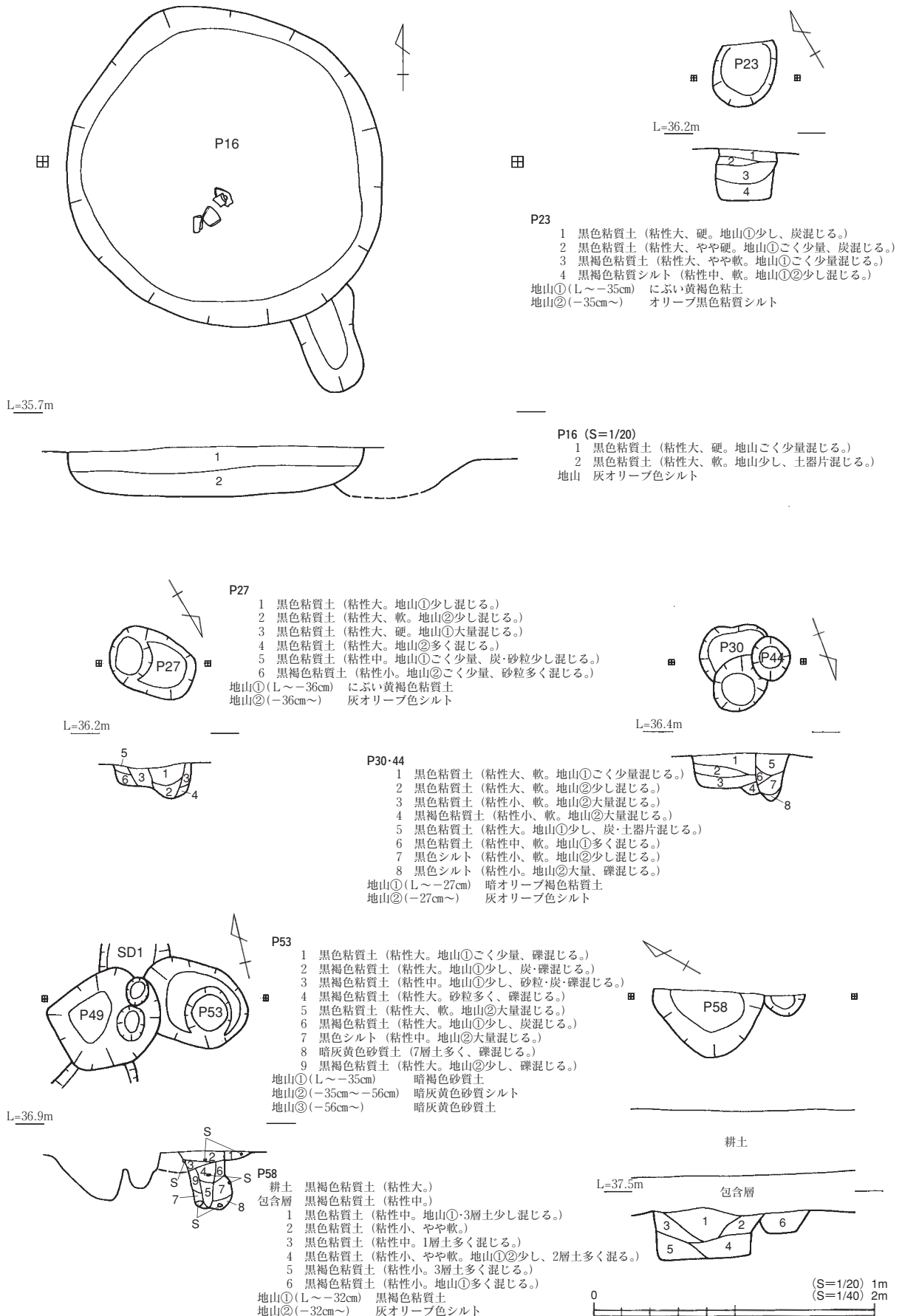
W8区に位置する。長軸約100cm、短軸約55cmの楕円形を呈し、深さ約8cmを測る。東側に直径約35cm、深さ約40cmの円形の小穴が見られ、柱穴と考えられる。P49に切られ、SD1を切っているため、SD1→P53→P49の順に変遷していったと考えられる。

**P56 (第32図)**

W7区に位置する。長軸約36cm、短軸約24cmの楕円形を呈する。深さ約20cmを測る。柱根(第42図32)が出土している。

**P58 (第32・40図)**

SE区に位置する。調査区の壁にかかり、南側半分のみ検出したが、おそらく一辺が約65cmの方形



第40図 平成18年度調査 遺構平面図・断面図 (小穴②) (S=1/20・1/40)



第6表 平成18年度調査 遺構計測表(小穴)

番号	位置	形状	検出面標高(m)	規模(cm)	深さ(cm)	埋土	備考
1	W6区	円形	36.090	62×(58)	29.2/37.7	断面図参照。土器片混じる。	SB2の柱穴
2	W6区	円形	36.078	70×66	29.0	断面図参照	SB2の柱穴
3	W5区	円形	36.066	60×63	36.8/52.3	断面図参照。土器片混じる。	SB2の柱穴
4	W6区	円形	36.015	28×28	14.3	黒色粘質土。にぶい黄褐色粘質土(地山)・炭・土器片、砂粒多く混じる。	
5	W5区	円形	35.958	32×35	28.2	黒褐色粘質土。にぶい黄褐色粘質土(地山)・炭混じる。	
6	W6区	円形	36.026	40×36	32.6	黒褐色粘質土。にぶい黄褐色粘質土(地山)・炭混じる。	
7	W5区	楕円形	35.970	27×22	11.2	黒褐色粘質土。にぶい黄褐色粘質土(地山)混じる。	
8	W5区	楕円形	35.860	76×48	6.2/14.5	黒褐色粘質土。にぶい黄褐色粘質土(地山)・礫混じる。	
9	W5区	円形	35.830	34×34	34.6/37.6	黒褐色粘質土。にぶい黄褐色粘質土(地山)・炭混じる。	
10	W5区	楕円形	35.839	36×28	27.8	黒色粘質土。にぶい黄褐色粘質土(地山)・炭混じる。	
11	W5区	隅丸方形	35.839	25×22	17.7	黒褐色粘質土。にぶい黄褐色粘質土(地山)混じる。	
12	W4区	楕円形	35.680	54×46	26.7/31.3	黒色粘質土。にぶい黄褐色粘質土(地山)・炭混じる。	
13	W4区	楕円形	35.618	90×62	33.6	断面図参照	
14	W4区	楕円形	35.532	108×92	19.6	断面図参照。土器片混じる。	
15	W4区	楕円形	35.670	88×57	14.0	黒色粘質土。にぶい黄褐色粘質土(地山)混じる。	
16	W4区	円形	35.618	112×120	17.7	断面図参照	
17	W4区	楕円形	35.632	40×25	28.9	黒色粘質土。にぶい黄褐色粘質土(地山)・礫・炭・土器片混じる。	
18	W4区	不定形	35.609	56×47	33.2	黒褐色粘質土。暗灰黄色シルト(地山)・土器片・礫混じる。	
19	W4区	楕円形	35.604	(36)×22	11.4	黒褐色粘質土。にぶい黄褐色粘質土(地山)・炭混じる。	
20	W4区	楕円形	35.760	44×35	30.5	黒色粘質土。にぶい黄褐色粘質土(地山)・炭混じる。	
21	W4区	不定形	35.650	110×(60)	25.5	黒色粘質土。暗灰黄色シルト(地山)混じる。	
22	W4区	隅丸長方形	35.528	64×54	14.3	黒色粘質土。暗灰黄色シルト(地山)・炭・礫混じる。	
23	W6区	楕円形	36.058	(50)×45	35.5	断面図参照。土器片混じる。	SB2の柱穴
24	W3区	楕円形	35.240	38×(30)	11.4	黒褐色粘質土。	
25	W7区	不定形	36.190	34×32	19.3	黒色粘質土。黒褐色粘質土(地山)・炭混じる。	
26	W6区	楕円形	36.127	31×28	25.9	黒色粘質土。にぶい黄褐色粘質土(地山)・炭混じる。	
27	W6区	楕円形	35.955	54×42	15.0/23.2	断面図参照。土器片混じる。	SB2の柱穴
28	N区	楕円形	36.231	20×14	19.1	黒色粘質土。オリブ褐色粘質土(地山)・土器片混じる。	
29	N区	円形	36.231	18×(14)	25.1	黒色粘質土。オリブ褐色粘質土(地山)・炭混じる。	SB5の柱穴、柱根
30	N区	楕円形	36.193	50×(26)	20.2	断面図参照。土器片混じる。	P30→P44
31	N区	方形?	36.177	92×(60)	24.6	黒褐色粘質土。暗オリブ褐色粘質土(地山)・礫混じる。	
32	N区	隅丸長方形	36.233	74×28	51.5	黒色粘質土。暗オリブ褐色粘質土(地山)・土器片混じる。	SB3・4の柱穴
33	N区	円形	36.225	38×32	11.6/21.4	黒色粘質土。オリブ褐色粘質土(地山)・土器片混じる。	
34	N区	方形	36.180	16×14	14.2	黒色粘質土。暗オリブ褐色粘質土(地山)混じる。	
35	N区	楕円形	36.180	38×28	24.5	黒色粘質土。暗オリブ褐色粘質土(地山)・炭混じる。	
36	N区	楕円形	36.290	38×26	41.3	黒色粘質土。オリブ褐色粘質土(地山)・炭混じる。	
37	W7区	隅丸長方形	36.351	(78)×66	31.5	黒色粘質土。にぶい黄褐色粘質土(地山)・炭・礫多く混じる。	
38	W7区	楕円形	36.351	67×68	33.3	黒色粘質土。暗褐色砂質土(地山)・礫混じる。	
39	W7区	円形	36.190	24×22	21.0	黒色粘質土。黒褐色粘質土(地山)・礫混じる。	SB5の柱穴、P40→P39
40	W7区	楕円形	36.190	(24)×28	28.4/33.5	黒色粘質土。黒褐色粘質土(地山)・炭・礫混じる。	P40→P39
41	W8区	円形	36.439	28×30	14.6	黒褐色粘質土。暗褐色粘質土(地山)・礫多く混じる。	
42	W8区	円形	36.486	28×30	29.4	黒色粘質土。暗褐色砂質土(地山)・礫混じる。	
43	W8区	楕円形?	36.486	(50)×54	35.4	黒褐色粘質土。暗褐色粘質土(地山)・炭・礫多く混じる。	
44	N区	円形	36.195	30×27	33.0	断面図参照。土器片混じる。	SB3の柱穴、P30→P44
45	N区	円形	36.148	20×(17)	17.3	黒色粘質土。暗オリブ褐色粘質土(地山)混じる。	SB3の柱穴
46	N区	円形	36.148	26×(18)	17.8	黒色粘質土。暗オリブ褐色粘質土(地山)混じる。	SB4の柱穴
47	W8区	円形	36.501	70×68	31.8	黒褐色粘質土。黒褐色砂質土(地山)・炭・礫・土器片混じる。	SB7の柱穴
48	W8区	楕円形	36.486	47×40	35.1	黒褐色粘質土。暗褐色砂質土(地山)・礫・土器片混じる。	SB6の柱穴
49	W8区	隅丸長方形	36.494	66×74	34.3	黒褐色粘質土。暗褐色粘質土(地山)・炭・礫多く混じる。	SD1→P53→P49
50	W8区	楕円形	36.494	78×50	31.8	黒褐色粘質土。暗褐色砂質土(地山)・炭・礫多く混じる。	SB6の柱穴
51	W8区	楕円形	36.474	110×92	19.3/38.6	黒褐色粘質土。暗褐色粘質土(地山)・炭・礫・木片混じる。	SB6の柱穴
52	N区	楕円形	36.415	106×68	39.3/69.9	黒色粘質土。暗褐色砂質土(地山)・礫混じる。	SB6の柱穴
53	W8区	楕円形	36.483	100×55	41.5	断面図参照	SD1→P53→P49
54	W9区	円形	36.749	64×60	24.7	黒色粘質土。にぶい黄褐色粘質土(地山)混じる。	
55	W9区	楕円形	36.690	110×60	15.5/31.4	黒色粘質土。にぶい黄褐色粘質土(地山)・礫混じる。	
56	W7区	楕円形	36.289	34×24	18.6	黒色粘質土。	柱根
57	SE区	楕円形	37.339	(40)×33	36.5	黒色粘質土。黒褐色粘質土(地山)・土器片混じる。	
58	SE区	方形?	37.319	(70)×(60)	31.5	断面図参照	

第7表 平成18年度調査 遺構計測表(土坑)

番号	位置	形状	検出面標高(m)	規模(m)	深さ(cm)	埋土	備考
1	W6区	円形?	36.165	3.5×(1.7)	41.0	断面図参照。土器片混じる。	SB2→SK1
2	W4区	楕円形	35.609	1.7×(1.2)	31.3	断面図参照。土器片混じる。	
3	W6区	隅丸方形	36.070	1.5×(1.4)	13.5	黒色粘質土。褐色粘質土(地山)・炭・土器片混じる。	
4	W7区	隅丸方形	36.192	2.6×2.3	14.2/36.7	断面図参照。土器片混じる。	
5	W7区	隅丸方形	36.235	1.5×1.3	17.2	断面図参照。土器片混じる。	

第8表 平成18年度調査 遺構計測表(溝)

番号	位置	検出面標高(m)	幅(cm)	深さ(cm)	埋土	備考
1	W8区	36.483	40	15.2	黒褐色粘質土。暗褐色粘質土(地山)・礫・炭・土器片混じる。	SD1→P53→P49
2	W8区	36.524	45	13.6	黒色粘質土。黒褐色砂質土(地山)・炭・礫混じる。	
3	W8区	36.486	(60)	4.3	黒褐色粘質土。暗褐色砂質土(地山)・炭・礫混じる。	
4	W8・9区	36.745	310	43.1	断面図参照。土器片混じる。	
5	SE区	37.289	32	4.1~9.0	黒色砂質土。黒褐色粘質土(地山)・礫・土器片混じる。	



を呈すると考えられる。深さ約31cmを測る。

### SX 2 (第31図)

W5区に位置する。深さ約25cm、長軸約2.7m、短軸約1.9mの楕円形を呈する。SX 2の東側周辺では礫層が遺構検出面にまで現れており、SX 2内でも南東側で早々に礫層に達し、深さ10cmと浅くなっている。北側で複数の小穴が、南側でもおそらく複数の遺構が切り合っていると考えられる。

### SX 3 (第32図)

E区に位置する。直径約4mの歪な円形を呈する。中央部は深さ約10cmであるが、周囲は環状に小穴が連なり、深さも20～40cmとばらつきがみられるため、風倒木痕と考えられる。縄文時代中期頃と考えられる粗製深鉢(第42図31)が出土している。

## 第2節 遺物

平成18年度の調査では、土師器・須恵器を中心に、土器がパンケースで3箱出土している。うち実測可能な31点を図化した。小片のため図化できなかったものに関しては、写真と観察表にのみ掲載している。土器以外では木製品が3点、銅銭が2点出土しており、すべて図化した。時期は、平成16年度調査と同様、古墳時代・古代は田嶋編年(1986・1988)を、中世は藤田編年(1992)を、珠洲焼は吉岡編年(1994)を参考とした。

1～15は土師器である。1は焼成前に、底部内面から外方向に径1.1cmの円孔を施した椀である。穿孔の際、胎土中の礫が剥離したため、外面の孔が歪に拡大している。2～4は皿である。2は磨滅が激しく、調整等不明瞭であるが、1と同様底部を回転糸切りによって切り離していると考えられる。3・4は口縁部にヨコナデ調整を1段施し、口唇部を外反させた皿で、3はやや丸底気味で、4は平底を呈する。6・7は小皿である。6は高い平高台風の底部をもつ。7は内面に煤が付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。1・2・5は田嶋編年Ⅶ2期、3は藤田編年Ⅱ-Ⅱ期、4はⅢ-Ⅰ期、6・7はⅠ-Ⅱ2期頃と考えられる。9～13は甕である。9は口縁部外面に擬凹線が3条、雑に施されており、部分的に2条しかみられない。頸部の接合部外面に粘土を付加して補強し、6mm程度の間隔で反時計回りにしっかり押さえるようにヨコナデ調整を施す。10は同一遺構内から、同一個体と考えられる胴部片が出土しており、胴部外面に縦方向の目の細かいハケ調整を施すと考えられる。11は口縁部がなだらかに外反して開く。焼成も甘く、胎土に砂粒を多く含むなど、全体的に粗雑な作りである。12の内面は磨滅が著しいが、ハケ調整の後ナデ調整を施しているとみられる。13は口縁部を大きく外反させる。内面は肩部にハケ調整を施した後、口縁部にナデ調整を、胴部にミガキ調整に近い丁寧なナデ調整を施している。14・15は高坏である。14は坏底部と口縁部の接合部外面に粘土を貼り付けて補強し、口縁部側はハケ調整で、底部側はナデ調整で押えている。15の坏部は口縁部の立ち上がりが不明瞭で、脚部は「ハ」の字状に大きく開き、裾部でゆるく屈曲して開く。9は田嶋編年5・6群、14は12・13群、10・15は14・15群、12はⅡ3期頃と考えられる。

16～28は須恵器である。16～21は無台の坏である。16は口縁部に強いナデ調整を施して、端部を摘み出すように外反させる。底部外面に煤が付着している。17は体部下半に強いナデ調整を施して、底部との境を明瞭にしている。平成16年度調査で出土した土器(第30図70)と接合した。18は墨書土器である。文字左側の縦線はへら切り時の溝にかかっており、文字の一部なのか判然とせず、2文字以上「一孔」の可能性も考えられる。22・23は有台坏である。22は焼成不良のためか、にぶい褐色を呈する。24～26は蓋である。24は平坦な天井部から口縁部が「ハ」の字状に開き、端部を僅かに折り返

して狭い平坦面をもつ。25・26は天井部がなだらかに開き、26は口縁端部を折り返し、平坦面をもつ。27は高坏、28は横瓶である。27は坏底部外面に脚部との接合痕がみられる。28は胴部をカキ目調整の後、下から上方向へタタキ調整を施したあと、倒立させて開口部を反時計回りに絞り、外側から円盤を貼り付けて塞ぎ、底部にカキ目調整を施し整えている。16・17・19・21・23・27・28は田嶋編年Ⅱ3期、24はⅣ2期、18・22はⅤ2期頃と考えられる。

29・30は珠洲焼である。29は小型の壺で、口縁端部を肥厚させ、端面に浅く1条の溝がみられる。30は播鉢である。口縁端部を著しく拡張させ、1単位8目の太めの櫛歯原体で、卸目を施している。ともに吉岡編年Ⅳ3期頃と考えられる。

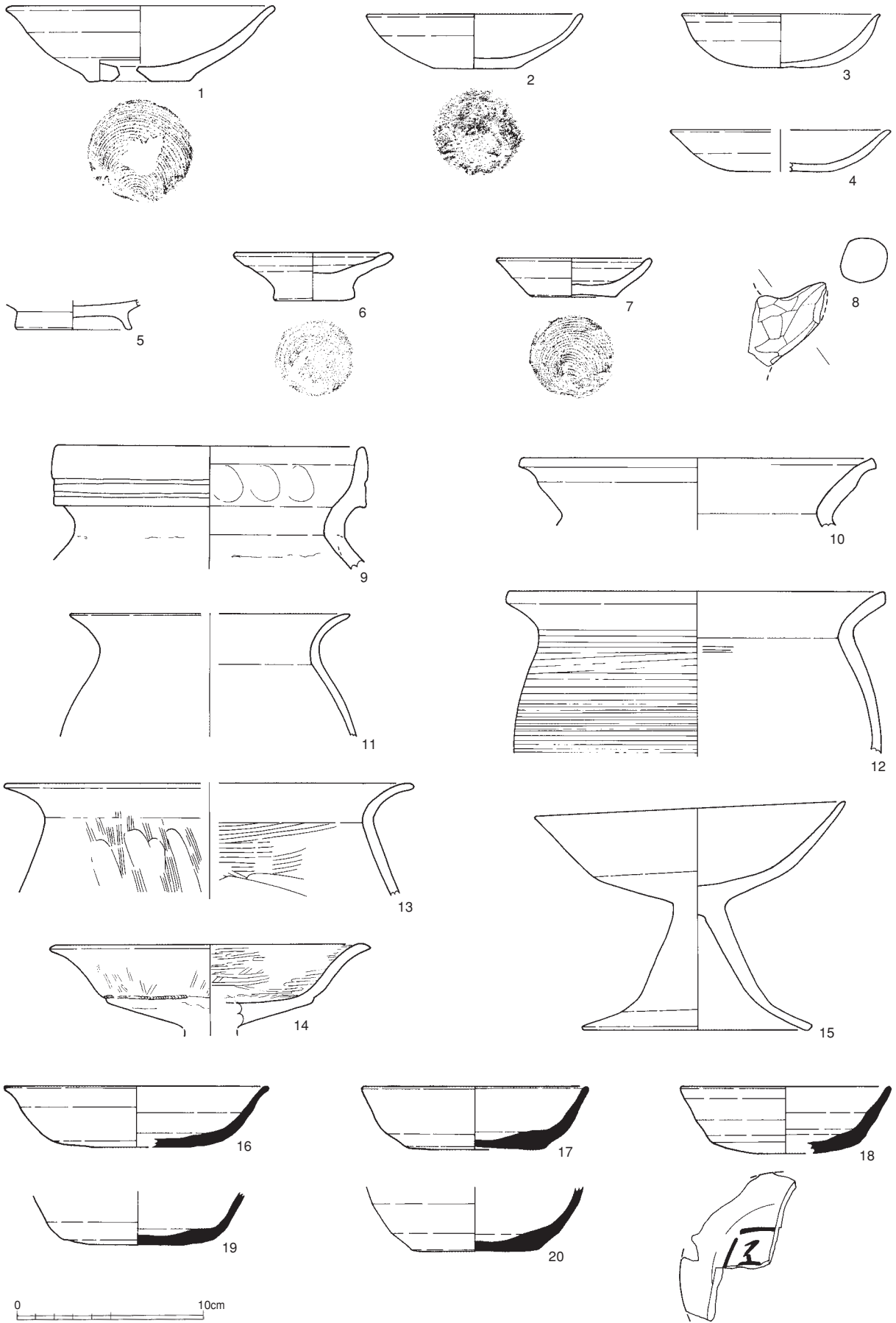
31は縄文土器で、外面にRL単節縄文を施した粗製深鉢である。胎土から中期頃と考えられる。

32～34は木製品である。32・33は柱根で、ともに底面を幅約5cmの工具で反時計回りに粗く削り、33はさらに半面のみ平滑にしている。34は農具等の柄と考えられる。削りの方向はやや左に流れるが、どの断面も円形で、丁寧に仕上げている。

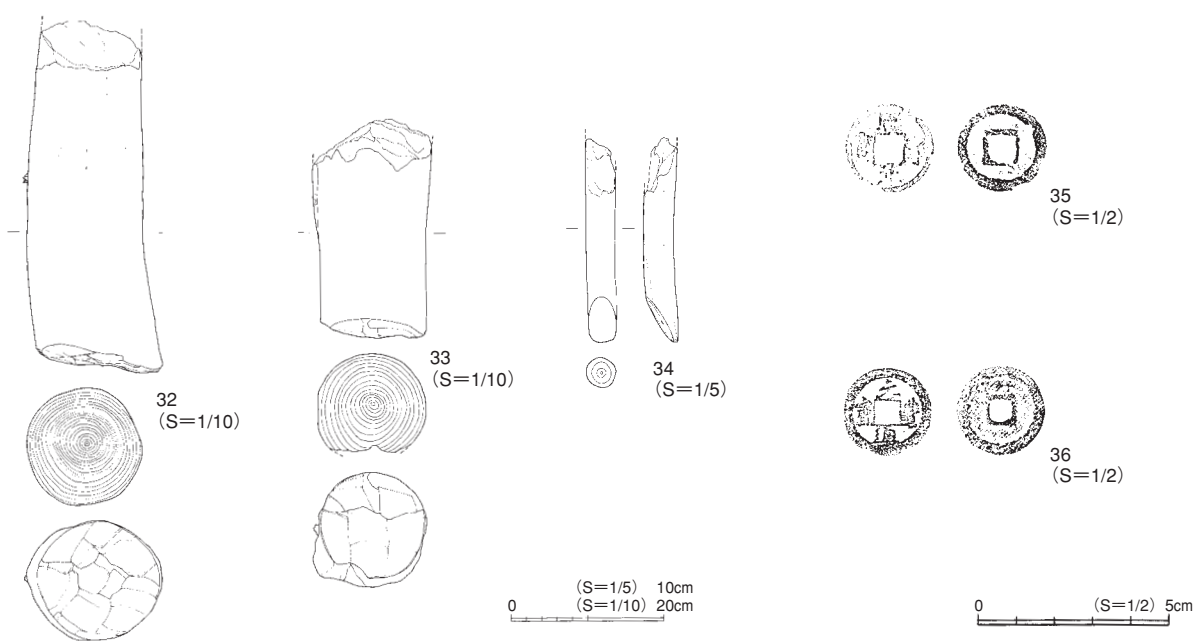
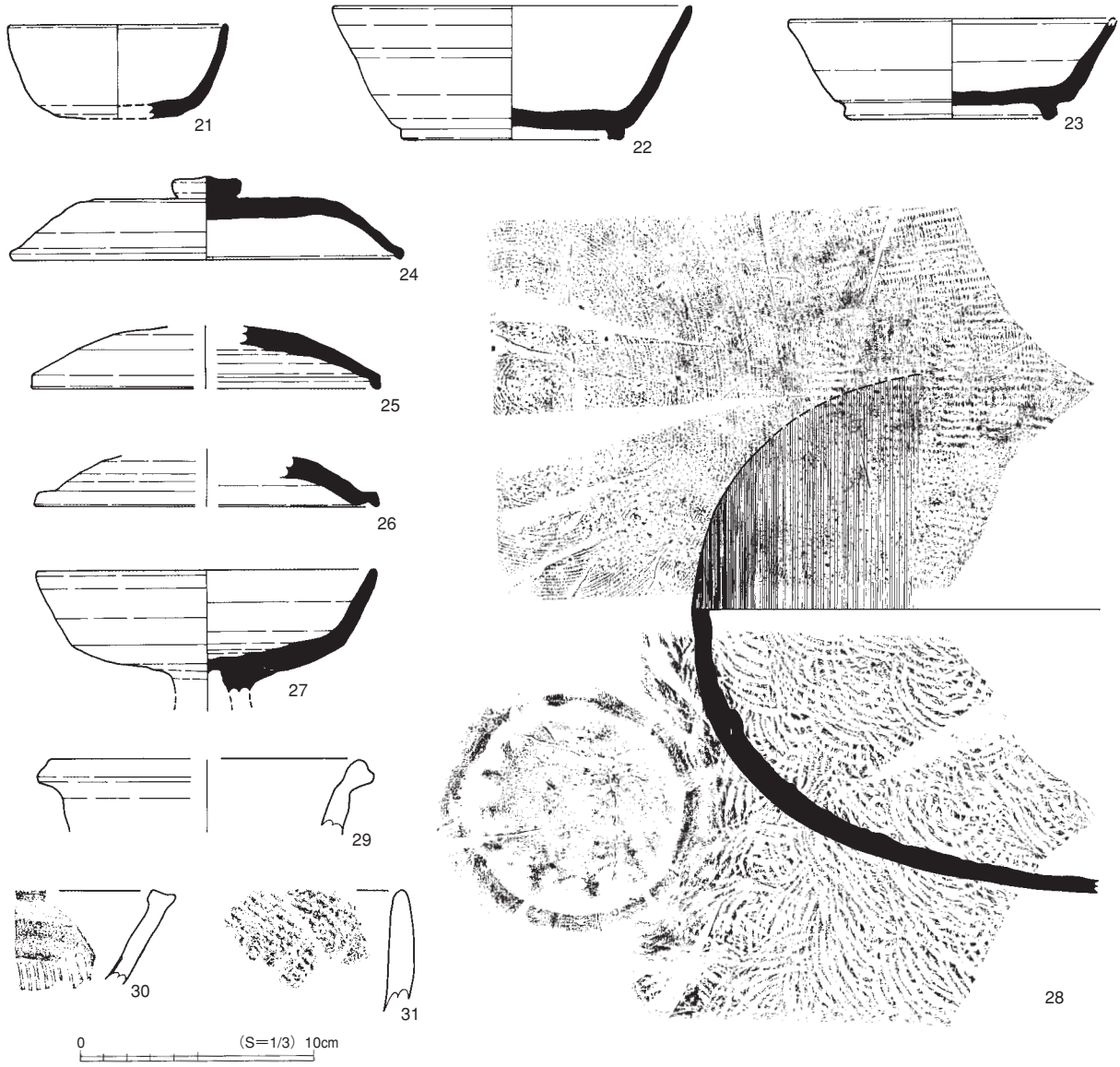
35・36は銅銭である。ともに北宋時代(11世紀後半)に鑄造されたもので、34は「熙寧元寶」、35は「元豊通寶」である。

#### 引用・参考文献

- |      |      |  |
|------|------|--|
| 川畑 誠 | 1994 | 「石川県内の古代建物に関する基礎的考察—掘立柱建物の平面プランを中心に—」『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報6』社団法人石川県埋蔵文化財保存協会 |
| 田嶋明人 | 1986 | 「第2節 9世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター                           |
|      | 1988 | 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会                      |
| 藤田邦夫 | 1992 | 「加賀における様相—土師器—」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会                                |
| 望月精司 | 2002 | 「二ツ梨一貫山窯跡出土須恵器貯蔵具の成形痕跡」『二ツ梨一貫山窯跡』石川県小松市教育委員会                               |
| 吉岡康暢 | 1994 | 『中世須恵器の研究』吉川弘文館  |



第41図 平成18年度調査 出土遺物① (S=1/3)



第42図 平成18年度調査 出土遺物② (S=1/2・1/3・1/5・1/10)

第9表 平成18年度調査 土器観察表

図版番号	出土地点	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	焼成	内面色調	外面色調	胎土	内面調整	外面調整	備考
1	W8区 P41	土師器	椀	14.2	5.6	4.2	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	細砂少、金雲母大量	不明	ロクロナデ 回転系切り	底部穿孔
2	W4区 P16・P17	土師器	皿	11.6	4.6	3.1	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	粗砂・礫多、雲母少	ロクロナデ	ロクロナデ 回転系切り	
3	N区 P52	土師器	皿	10.6	—	2.95	良好	灰褐色	灰褐色	粗砂・雲母少	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	SB6
4	W8区 P43	土師器	皿	—	—	2.3	良好	灰黄色	灰黄色	細砂・金雲母少	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	
5	W5区 P9	土師器	有台椀	—	6.3	(1.6)	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	粗砂・雲母少	ナデ	ナデ	
6	N区 P46	土師器	皿	8.3	4.3	2.6	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	細砂・礫少、金雲母大量	ロクロナデ	ロクロナデ 回転系切り	SB4
7	N区 P45	土師器	皿	8.0~8.2	4.3	2.1	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	細砂少、金雲母大量	ロクロナデ	ロクロナデ 回転系切り	SB3 内面部分的に煤付着
8	W6区 南側側溝	土師器	把手	—	—	—	良好	橙色	橙色	粗砂多、雲母少	不明	指押さえ	
9	排土	土師器	甕	16.5	—	(6.6)	良好	にぶい橙色	にぶい黄褐色、黒褐色	粗砂・金雲母多	ヨコナデ・指頭圧痕、 ナデ	擬凹線 ヨコナデ	
10	W4区 P14	土師器	甕	18.9	—	(3.8)	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	粗砂・礫・雲母・ 海綿骨針多	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	
11	W3区 北側側溝	土師器	甕	(14.9)	—	(6.7)	良好	淡黄色	淡黄色	粗砂・礫大量	不明	不明	
12	W6区 SK1西側	土師器	甕	20.3	—	(8.8)	良好	淡黄色	淡黄色	粗砂大量、雲母・ 礫少	ヨコナデ 不明	ヨコナデ カキ目	
13	W6区 南側側溝	土師器	甕	(21.7)	—	(6.0)	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	粗砂大量、雲母少	ヨコナデ ハケ後ナデ	ヨコナデ ハケ後ナデ	
14	W4区 SK2	土師器	高坏	16.6	—	(4.6)	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	細砂・礫少、金雲母多	ハケ・ナデ後ミガキ	ハケ後ナデ後ミガキ	接合痕
15	W4区 P14	土師器	高坏	16.7	12.1	12.4	良好	橙色	橙色	細砂・礫・海綿骨 針多	不明	不明	
16	W6区 南側側溝	須恵器	坏	14.2	9.4	3.4	良好	灰褐色	灰黄褐色	粗砂・礫少	ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラ切り後ナデ	外面一部煤付着
17	W6区 SK1西側	須恵器	坏	12.0	7.8	3.5	良好	灰黄褐色	灰黄褐色	粗砂・礫多	ロクロナデ ナデ	ロクロナデ 回転ヘラ切り後ナデ	口縁部内外面自然軸付着 H16第30図70と接合
18	W2区 包含層	須恵器	坏	11.2	8.0	3.6	良好	灰白色	灰白色	粗砂ごく少量	ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラ切り後ナデ	底部外面墨書
19	W6区 SK1東側	須恵器	坏	—	7.7	(2.9)	良好	黄灰色	黄灰色	細砂・礫少	ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラ切り後ナデ	
20	W6区 遺構検出作業	須恵器	坏	—	6.9	(3.5)	良好	灰白色	灰白色	粗砂・礫少	ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラ切り後ナデ	
21	W5区 遺構検出作業	須恵器	坏	9.4	5.7	4.1	良好	灰色	灰色	粗砂多、礫少	ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラ切り	外面一部自然軸付着
22	W2区 包含層	須恵器	有台坏	15.3	9.6	5.8	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	粗砂・礫多	ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラ切り	
23	W2区 包含層	須恵器	有台坏	14.1	9.2	4.4	良好	灰白色	灰白色	粗砂・礫少	ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラ切り	外面自然軸付着
24	N区 P33	須恵器	蓋	16.8	—	3.6	良好	灰色	灰色	礫少	ロクロナデ	回転ヘラ切り ロクロナデ	外面自然軸付着
25	W2区 包含層	須恵器	蓋	15.0	—	(2.7)	良好	灰白色	灰色	粗砂少	ロクロナデ	回転ヘラケズリ ロクロナデ	
26	W1区 包含層	須恵器	蓋	(14.7)	—	(2.2)	良好	灰色	灰色	粗砂ごく少量	ロクロナデ	ナデ ロクロナデ	
27	排土	須恵器	高坏	14.8	—	(5.3)	良好	灰色	灰色	礫大量	ロクロナデ ナデ	ロクロナデ 回転ヘラ切り後ロクロナデ	
28	W6区 南側側溝	須恵器	横瓶	—	—	(19.6)	良好	灰色	灰色	礫多	タタキ	カキ目後タタキ後カ キ目	
29	NE区 耕土	珠洲	小壺	(13.4)	—	(3.2)	やや軟	灰白色	灰白色	細砂ごく少量	ナデ	ナデ	
30	W8区 南側側溝	珠洲	罎鉢	—	—	(4.0)	良好	灰色	灰色	細砂ごく少量	ヨコナデ	ヨコナデ	
31	E区 SX3	縄文	深鉢	—	—	(5.0)	良好	にぶい褐色	にぶい黄色	粗砂大量	ナデ	縄文	
37	W4区 P14	土師器	甕	—	—	—	やや不良	橙色	橙色	粗砂・礫多	ケズリ	ハケ	体部外面煤付着
38	W6区 北側側溝	須恵器	鉢底部	—	—	—	良好	灰色	灰色	粗砂・礫少	ロクロナデ	ロクロナデ 沈線・波状文	
39	W4区 北側側溝	白磁	皿	—	—	—	良好	明緑灰色	明緑灰色	緻密	施軸 蛇の目軸剥ぎ	施軸	肥前(波佐見)

第10表 平成18年度調査 木製品観察表

図版番号	出土地点	種別	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考
32	W7区 P56	柱根	46.6	16.1	15.8	
33	W7区 SK5	柱根	28.9	15.6	15.2	
34	W6区 SK1東側	柄?	13.4	2.0	2.0	

第11表 平成18年度調査 銅銭観察表

図版番号	出土地点	種別	最大長(cm)	最大巾(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
35	SE区 SD5	宋銭	2.42	2.40	0.12	0.71	1.3	「熙寧元寶」
36	排土	宋銭	2.40	2.38	0.15	0.59	3.4	「元豐通寶」



## 第6章 ま と め

遺跡内における集落跡の時代別分布状況を確認してまとめたい。

遺物を伴う遺構を見ていき、時代は弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中・後期、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代に分けて説明を加えていく。年度の異なる調査区はH16-3区、H18-W2区等と呼称し、時期については田嶋明人(1986・1988)と藤田邦雄(1989)の編年を参考にした。

弥生時代後期～古墳時代前期ではH16-3区SD1を検出した。古墳時代中・後期ではH16-2区SD1・2、H16-3区SD5・6、H16-4区土器集中箇所、H18-W4区SK2、H18-W4区P14を検出した。奈良時代ではH16-6区SK1・2及びH18-W6区SK1、H18-W6区SB2を検出した。平安時代ではH16-2区P104、H16-4区SK2、H18-N区SB3・4(12世紀前半)、H18-W5区P9、H18-W4区P16・17、H18-W8区P41、H18-SE区SD5を検出した。鎌倉時代ではH16-1区SD1・2、H16-3区SD7・9、H16-4区P19、H18-W8区SB6、H18-W8区P43、H18-W8区P52を検出した。室町時代ではH18-N区P28を検出した。

以上の結果から以下のように①～③のまとまりを想定できる。

### ① H16-1・3・4区(弥生時代後期～鎌倉時代、第1・4図)

遺跡南西部に位置する。弥生時代後期～古墳時代前期を主体とした3区北半部、古墳時代中期と鎌倉時代を主体とした1区南半部から3・4区連結部にかけての範囲、古墳時代中期と平安時代を主体とした4区中央部の計3つの遺構・遺物のまとまりを確認した。調査区狭小なため建物跡を確定するには至らなかったものの、時期を違え重複するようにして集落が営まれていた状況が窺える。

### ② H16-2区(古墳時代中期、平安時代、第1図)

遺跡東部に位置する。中央部で古墳時代中期、東端部に平安時代の遺構・遺物のまとまりを確認した。東端部で遺構の数が増加し、遺跡は紺屋町のある東方向へと広がる可能性が高い。中央部から西半部にかけては遺構・遺物がほとんどなく、①と②の間は集落跡が途切れていたものと判断した。

### ③ H16-6・7区、H18調査区(古墳時代～室町時代、第1・5図)

遺跡北東部、現正友集落南縁沿いに位置する。古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉時代と時期を違え重複するようにして集落が営まれていた状況が窺える。調査区北側は地形が高くなっていることから現正友集落の位置と重なるようにして遺跡が展開していった可能性がある。H16-6区西半部とH18-N区は遺構の分布が希薄であり、集落境を示すものと判断した。

遺構の検出には至らなかったものの、縄文時代の深鉢や江戸時代の陶磁器も出土していることから、古墳時代の集落跡として古くから知られていた正友じんとくじま遺跡が複数時期にわたって連綿と営まれてきた集落跡であることが今回の調査によって明らかとなった。また、局所的に遺構・遺物が集中しており、遺跡内で小集落が点在していた状況を確認できたことも調査の成果として挙げられる。

### 参考文献

- |      |      |  |
|------|------|--|
| 田嶋明人 | 1986 | 「IV 考察『漆町遺跡I』 石川県立埋蔵文化財センター                      |
| 田嶋明人 | 1988 | 「古代土器編年軸の設定」『北陸の古代土器研究の現状と課題』 石川考古学研究会 北陸古代土器研究会 |
| 藤田邦雄 | 1989 | 「中世土器素描」『北陸の考古学II』 石川考古学研究会                      |





調査前状況（南から）



調査前状況（西から）



1区完掘状況（南西から）



1区完掘状況（東から）



1区完掘状況（北から）



1区完掘状況（南西から）



1区完掘状況（南から）



1区SK1完掘状況（西から）





1区SK3完掘状況（北西から）



1区SD1遺物出土状況（西から）



2区西部完掘状況（西から）



2区西部完掘状況（南東から）



2区中央部完掘状況（西から）



2区中央部完掘状況（東から）



2区中央部完掘状況（北東から）



2区中央部完掘状況（北東から）





2区中央部完掘状況（北東から）



2区中央部完掘状況（北から）



2区中央部完掘状況（北から）



2区中央部完掘状況（北東から）



2区中央部完掘状況（北西から）



2区中央部遺物出土状況（西から）



2区東部完掘状況（東から）



2区東部完掘状況（北東から）





2区東部完掘状況（北西から）



2区東部完掘状況（北東から）



2区東部完掘状況（北東から）



2区東部完掘状況（西から）



3区南部検出状況（南から）



3区南部完掘状況（南から）



3区南部検出状況（南から）



3区南部完掘状況（南から）





3区南部完掘状況（南東から）



3区南部東壁土層（北西から）



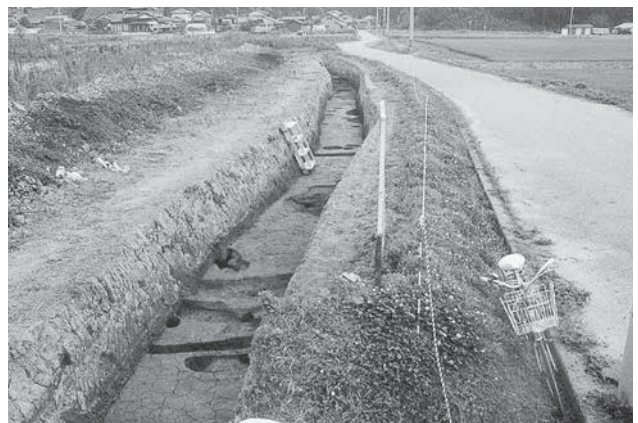
3区南部東壁土層（南西から）



3区南部完掘状況（南西から）



3区南部検出状況（北から）



3区南部完掘状況（北から）



3区南部 SD 4・5 完掘状況（東から）



3区南部SD6完掘状況（東から）





3区南部作業風景（北から）



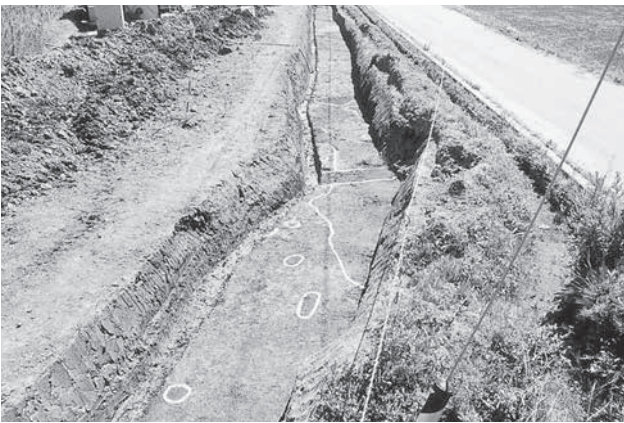
3区北部検出状況（南から）



3区北部完掘状況（南から）



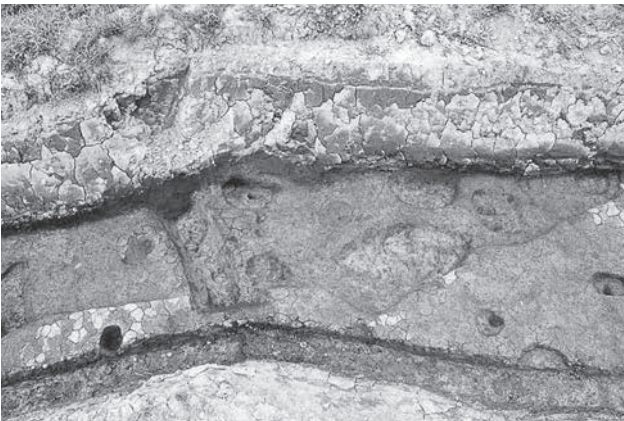
3区北部SK1周辺完掘状況（南東から）



3区北部検出状況（北から）



3区北部完掘状況（北から）



3区北部SD1完掘状況（東から）



3区北部完掘状況（南から）





3区北部完掘状況（南から）



4区検出状況（西から）



4区完掘状況（西から）



4区検出状況（東から）



4区完掘状況（東から）



4区検出状況（西から）



4区完掘状況（西から）



4区P11・12周辺検出状況（北西から）





4区P11・12周辺完掘状況（東から）



4区南壁土層（北東から）



4区SK2周辺完掘状況（東から）



4区SK2検出状況（北東から）



4区SK2完掘状況（南から）



4区SK2土層（北から）



4区検出状況（東から）



4区完掘状況（東から）





4区完掘状況（南西から）



4区完掘状況（東から）



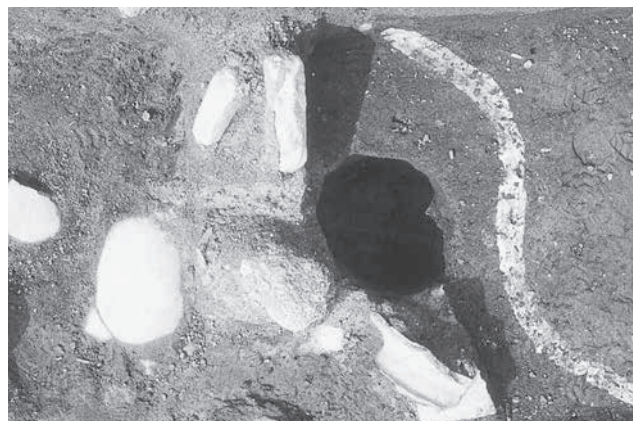
4区北壁土層（南から）



4区P24～27周辺遺物出土状況（南東から）



4区遺物出土状況①（南から）



4区遺物出土状況②（南から）

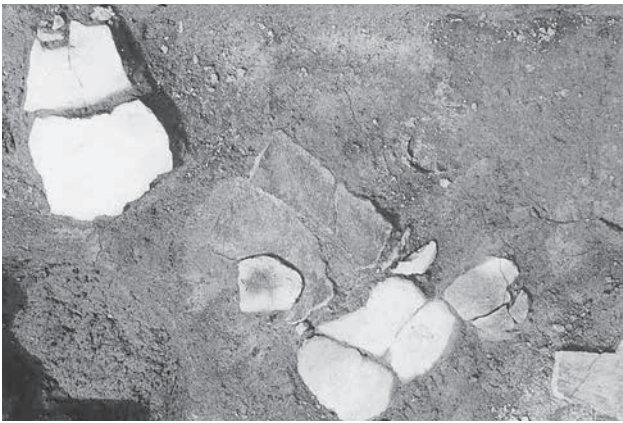


4区遺物出土状況③（南から）



4区遺物出土状況④（南から）





4区遺物出土状況⑤（南から）



4区遺物出土状況⑥（南から）



4区遺物出土状況⑦（南から）



6区完掘状況（東から）



6区検出状況（東から）



6区完掘状況（東から）



6区検出状況（東から）



6区完掘状況（東から）





6区SK1・2検出状況(南から)



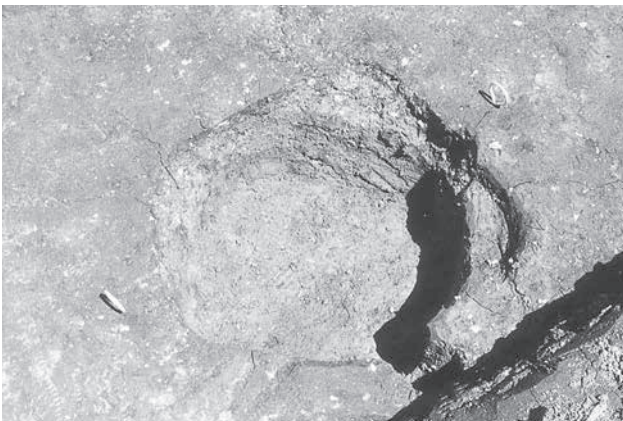
6区SK1遺物出土状況①(南から)



6区SK1遺物出土状況②(南から)



6区SK1・2完掘状況(南西から)



6区P15完掘状況(南西から)



6区SK1土層(南から)



6区SK2土層(北から)



6区P1土層(南から)





6区P4土層(南から)



7区検出状況(北西から)



7区検出状況(西から)



7区完掘状況(北西から)



7区SK3完掘状況(北から)



7区完掘状況(南東から)

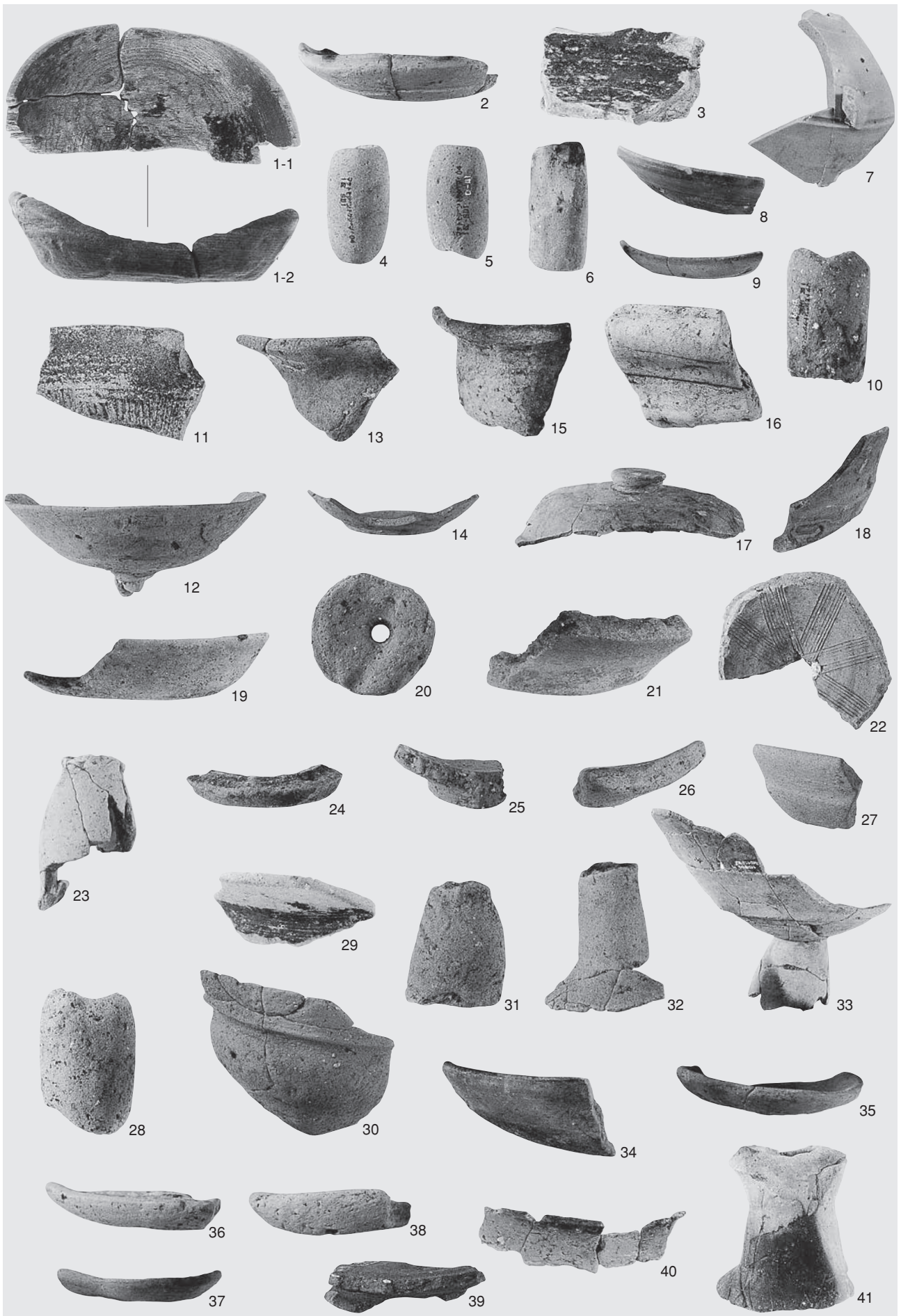


7区完掘状況(西から)

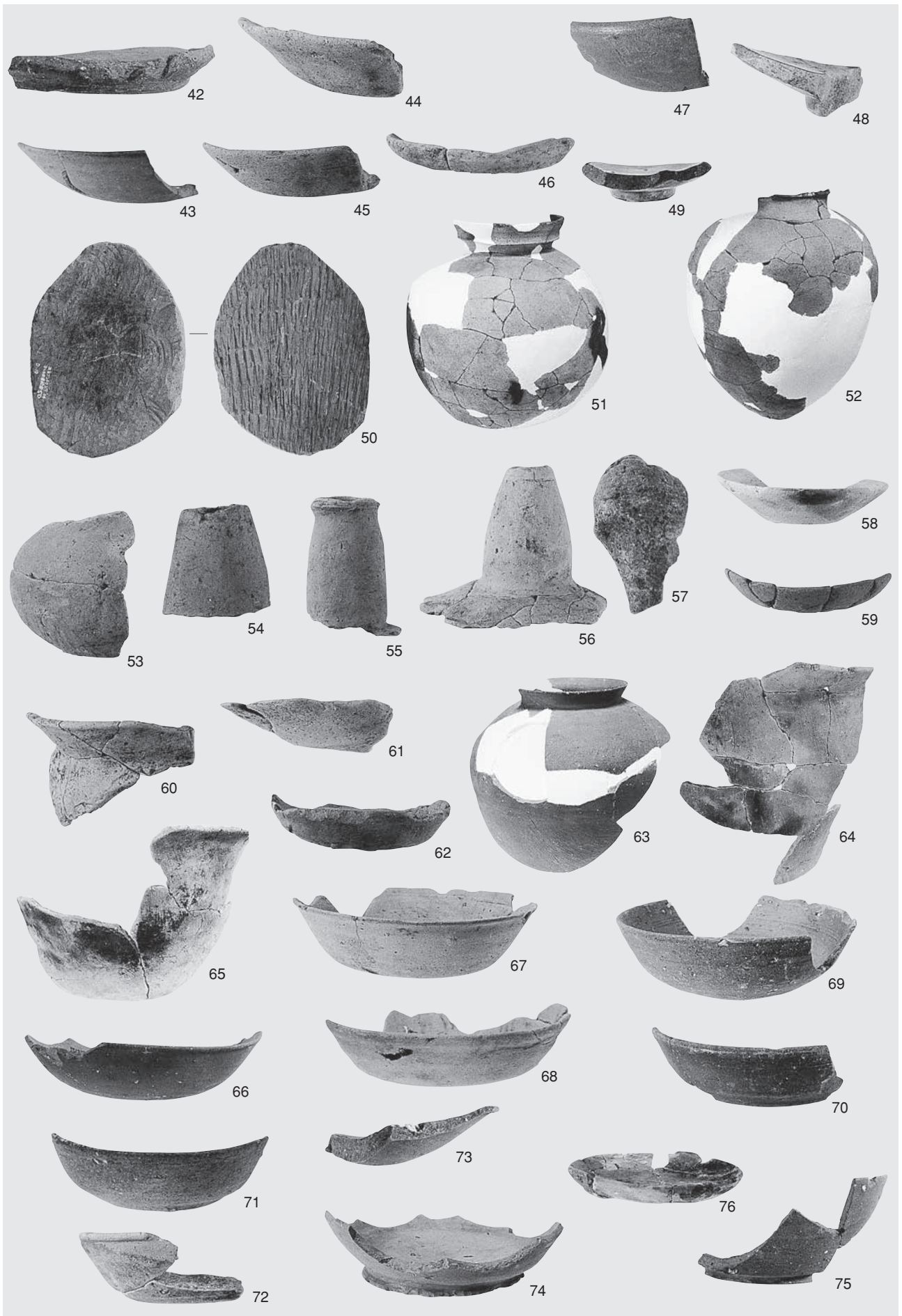


7区完掘状況(北西から)



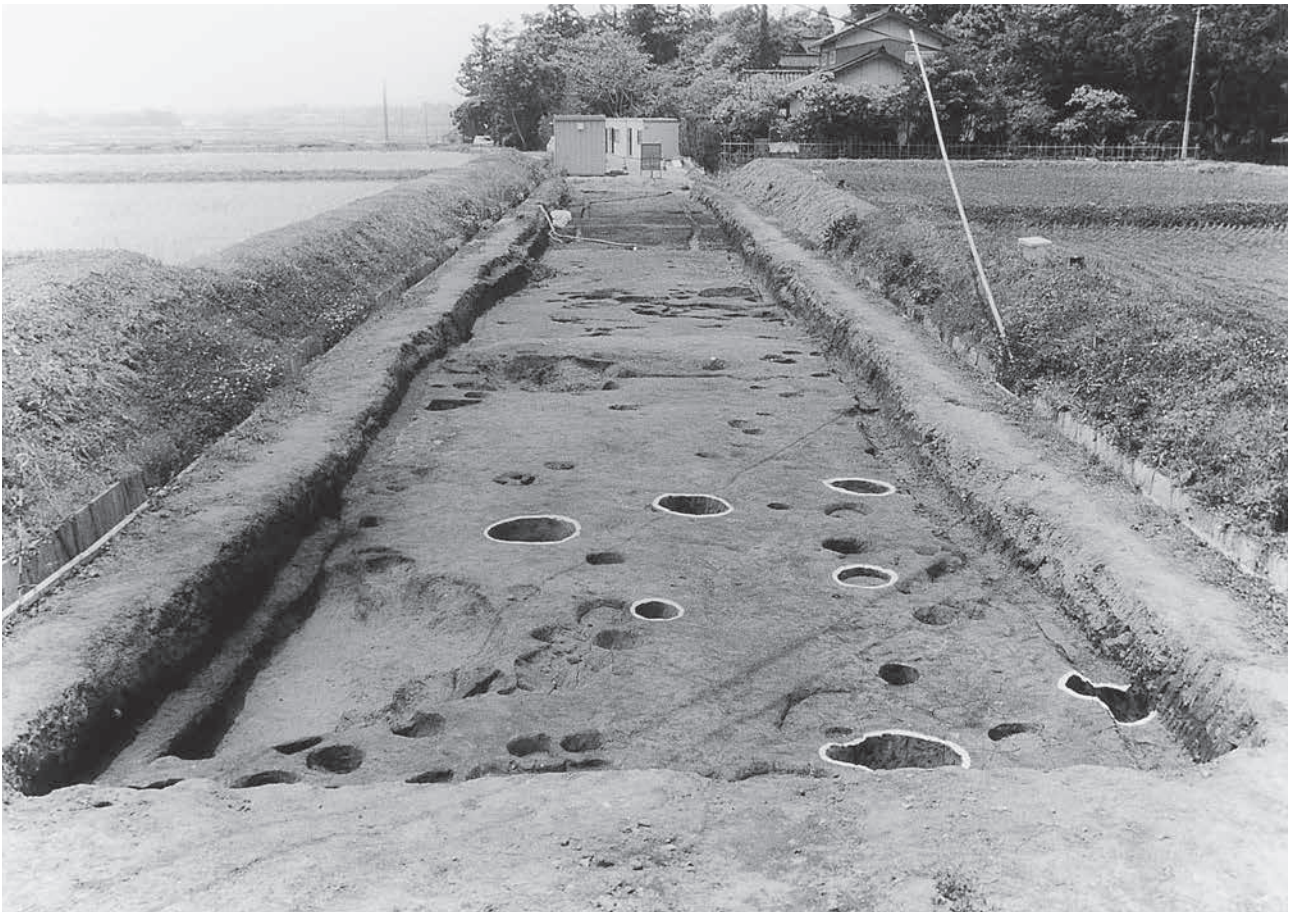


出土遺物 1



出土遺物 2





W1～W6区 遺跡完掘状況（東から）



W6区 SB1 完掘状況（南から）





W6～W9区 遺跡完掘状況（西から）



N区 遺跡完掘状況（北から）





W6～W9区 遺跡完掘状況（東から）



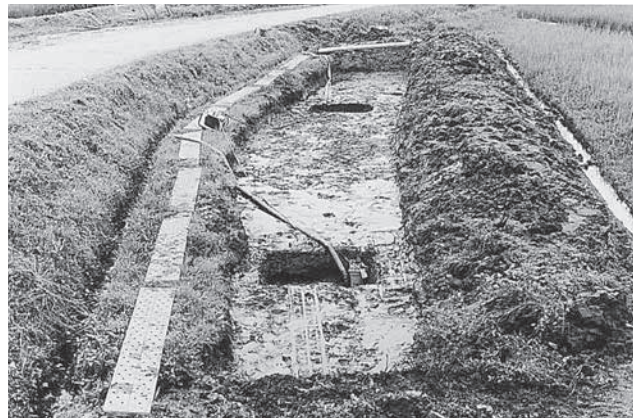
W8区 SB6・7周辺完掘状況（北から）



E区 遺跡完掘状況（西から）



SE区 遺跡完掘状況（東から）



NE区 遺跡完掘状況（東から）

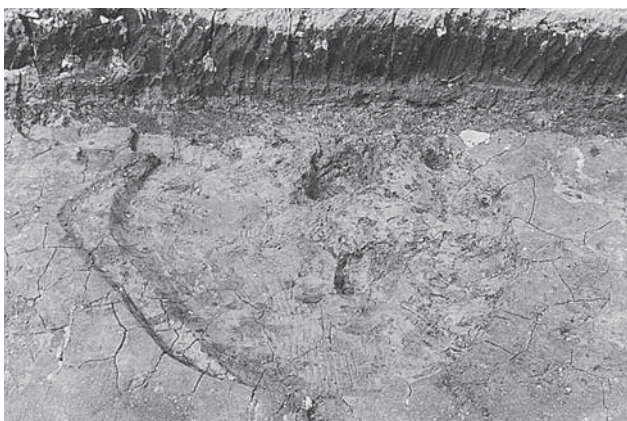




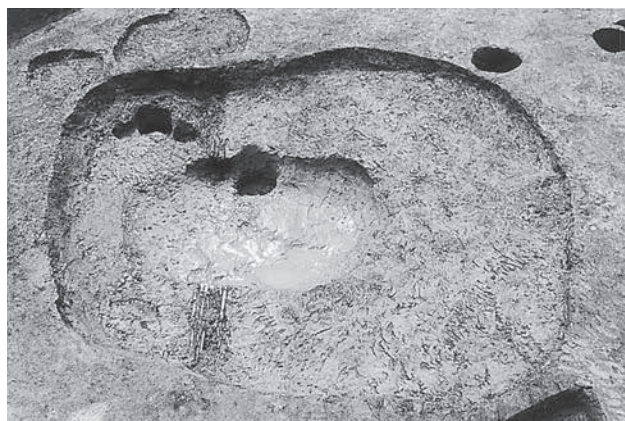
W6区 SK1 完掘状況（北から）



W4区 SK2 土層断面（南から）



W6区 SK3 完掘状況（南から）



W7区 SK4 完掘状況（東から）



W7区 SK5 完掘状況（南から）



W8区 SD1 完掘状況（南から）



W8区 SD2 完掘状況（南西から）



W8・9区 SD4 完掘状況（西から）





W8区 SE1 土層断面 (北から)



W8区 SE1 完掘状況 (北から)



W6区 P1 土層断面 (南から)



W6区 P3 完掘状況 (南から)



W4区 P14 土層断面 (西から)



W4区 P14 遺物出土状況 (南から)

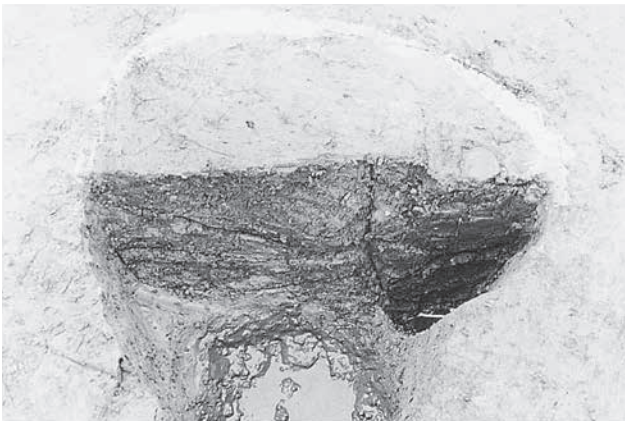


W4区 P16 遺物出土状況 (南から)



W6区 P27 土層断面 (南から)

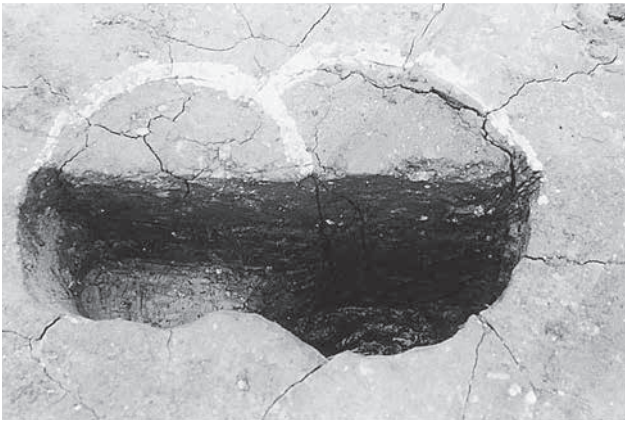




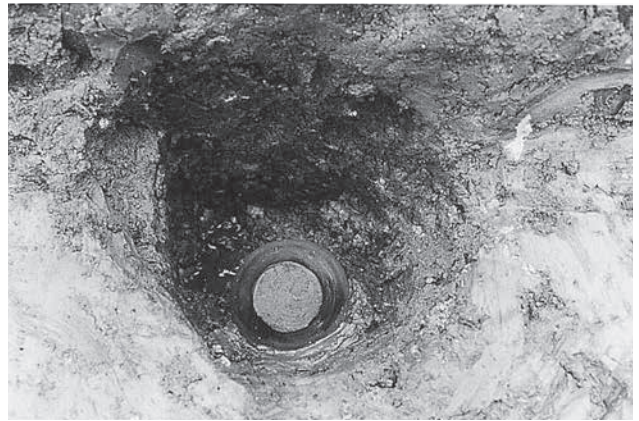
N区 P30・P44 土層断面（北から）



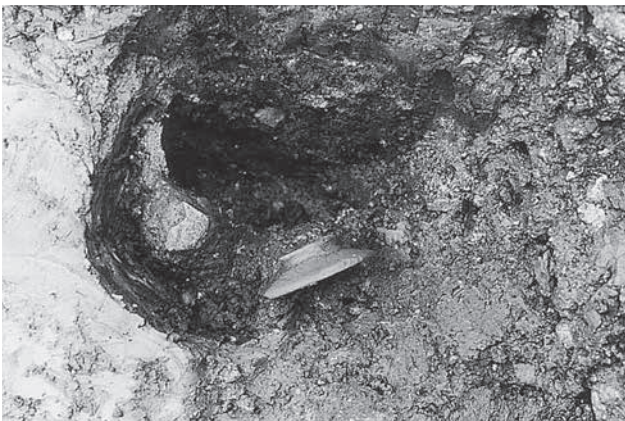
N区 P33 遺物出土状況（北から）



W7区 P39・P40 土層断面（北から）



N区 P45 遺物出土状況（南から）



N区 P46 遺物出土状況（南から）



W8区 P48 土層断面（北から）

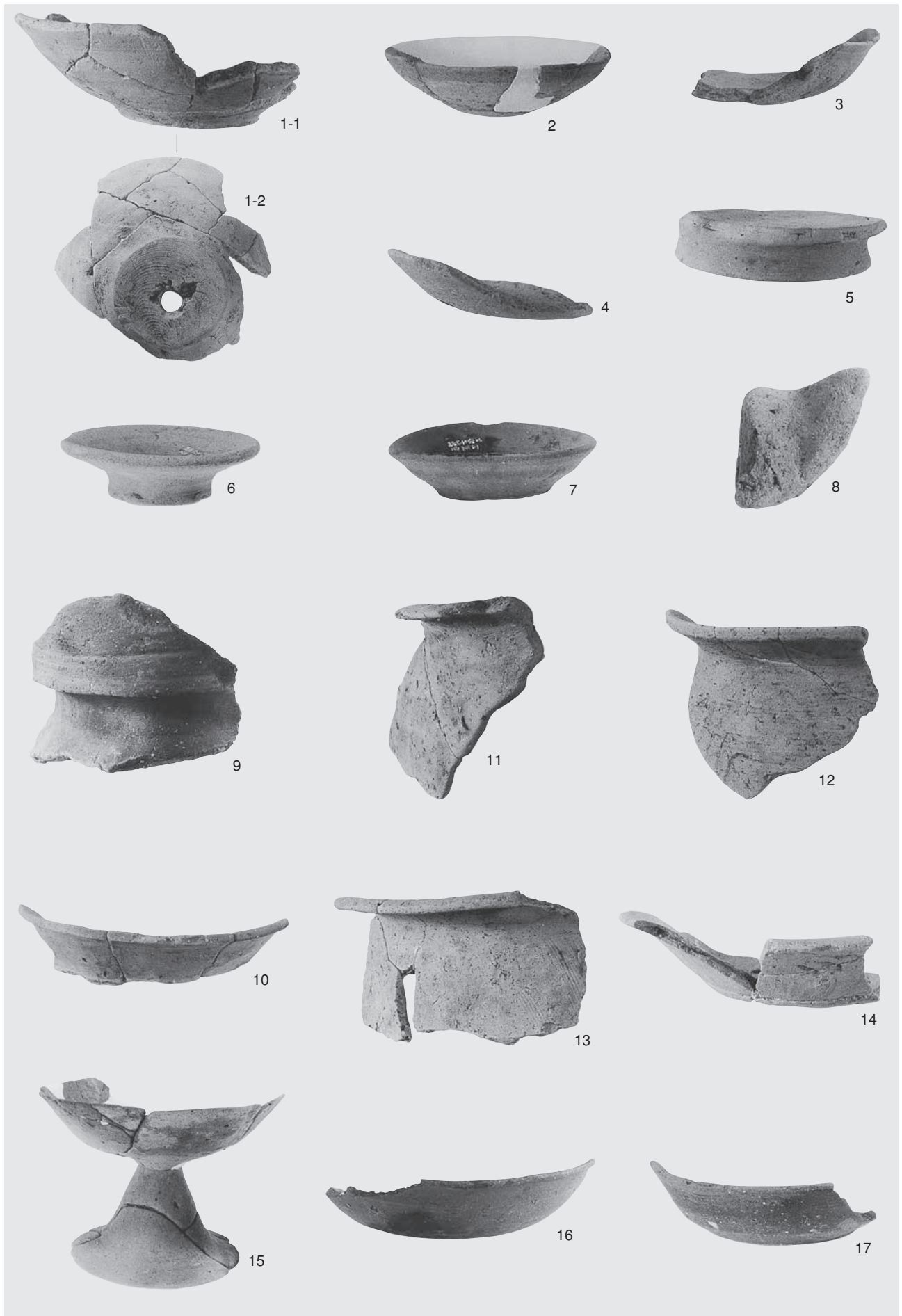


W8区 P52 完掘状況（北から）

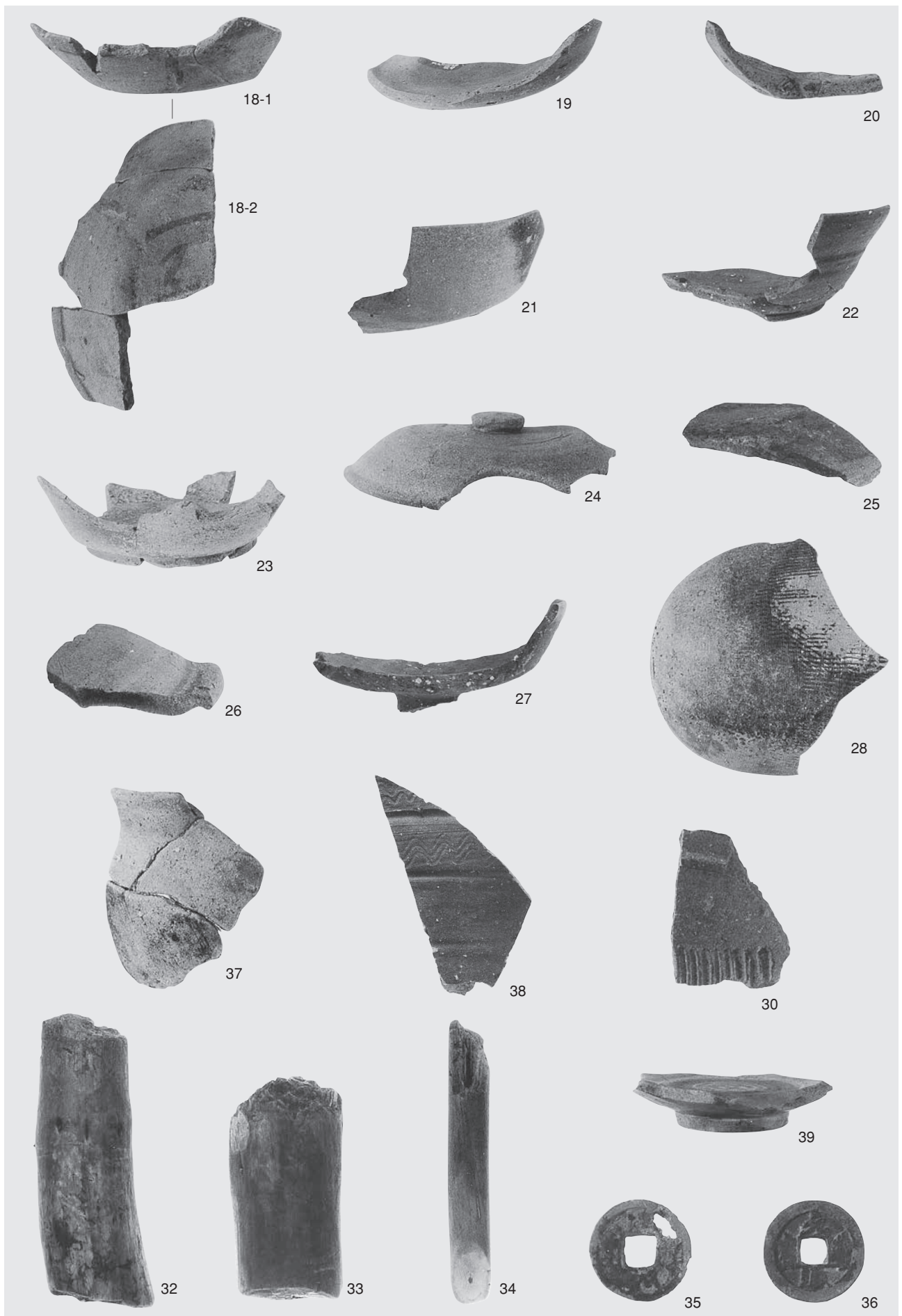


W7区 P56 柱根出土状況（北から）





出土遺物 1



出土遺物 2

## 報告書抄録

ふりがな	ほうだつしみずちょう まさともじんとくじまいせき							
書名	宝達志水町 正友じんとくじま遺跡							
副書名	県営ほ場整備事業（北大海地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	松山和彦、谷内明央、森 由佳							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL076-229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まさとも 正友じんと くじま遺跡	いしかわけん ほかい ぐん 石川県羽咋郡 ほうだつし みずちよう 宝達志水町 まさとも こんや まち 正友、紺屋町 ちない 地内	173860	30039	36度 47分 54秒	136度 45分 51秒	20040621～ 20040905	1,900m <sup>2</sup>	県営ほ場 整備事業 （北大海 地区）
						20041116～ 20041228		
						20060510～ 20060720	1,000m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
正友じんと くじま遺跡	集落	弥生	土杭、溝、柱穴		弥生土器		弥生時代の集落跡	
	集落	古墳	土杭、溝、柱穴		土師器、須恵器		古墳時代の集落跡	
	集落	古代	掘立柱建物、土杭、 溝、柱穴		土師器、須恵器		古代の集落跡	
	集落	中世	掘立柱建物、土杭、 溝、柱穴		土師器、珠洲焼、 陶磁器		中世の集落跡	
要約	弥生時代～中世の集落跡を検出した。遺構・遺物が局所的に集中して発見されており、小集落の点在する状況が窺えた。							

宝達志水町 正友じんとくじま遺跡

発行日 平成19(2007)年3月31日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地

電話 076-225-1842(文化財課)

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 高桑美術印刷株式会社